

---

# 武田君のモッテモテ物語

さらさら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

武田君のモツテモテ物語

### 【Zコード】

Z2383X

### 【作者名】

さりせり

### 【あらすじ】

小学校、中学校。主人公・武田昂は、幼稚園の頃に得た幼馴染滋野重郎と野木久美の二人を描くと、さしたる友人を作る事も出来ず、高校生になった。引っ越し思案だった自分に区切りを付けようと思い定め、昂は高校一年生、初めての始業式へと向かう。  
……基本的には、恋愛ゲームぐらいの話に、ファンタジーを入れ込んだ感じです。もとい、入り込んだ感じです。

序章的な扱いになる野木久美?は、殆どがブログ用に書いた物だ

つたので、一ページが長くなってしまっています。読みにくそうだと  
つたら、また訂正致します。また、以降は、更新頻度の関係から、  
三千～六千文字程度で投稿するつもりです。

ブログに転載する可能性アリです。

## 野木久美？・前（前書き）

以下からの「野木久美？」の段は、プロローグ含みです。  
ずっとこんな感じで書くつもりなので、雰囲気を見て頂ければと思います。

僕が通っていた幼稚園は、通う園児達の中で、大体三つのグループに分かれていた。

やたらと外で遊びたがる男の子グループ、おままごとが好きな女の子の子グループ、そして男の子ながらにして、女の子グループと遊ぶ子の小グループ。僕は、一番最後の小グループに属し、毎日数人の『おかあさん』とままごとをして遊んでいたと記憶している。

本来なら、園長さんはこう言った傾向を認めるべきではない。だが、僕の幼稚園の園長さんはその点一味違つた。園長さんは、三つのグループに、それぞれ代表を立てたのだつた。各グループを取り仕切るリーダー。突飛なアイデアであると、当時の僕も思った。

男の子グループからは、圧倒的な推薦を得て一人の男の子が選出された。彼は他の子に比べて群を抜いて力持ちで、周りから慕われていた。

女の子グループからは、積極的な立候補と自薦により、園児にしてポニー・テールだった女の子が選ばれた。だが普段は、その行動力からは想像し得ないほどに、非常におとなしい子だつた。

そして残る、小グループからは、元々少人数な上に自主性の薄い男の子が集まつていた結果、いくらかの押し付け合いの後、先生指名によつて僕が選ばれた。

リーダーには、普通の子よりも優先して先生の手伝いなどがあてがわれるようになつた。何度も何度も、そう言つた手伝いの度に顔を合わせるのだから、僕と彼、彼女が言葉を交わし、仲良くなるのにそう時間は掛からなかつた。

男の子の名前が、滋野重郎。女の子の名前が、野木久美。僕たちは、最初こそ気まずい空氣をかもしていたが、気がつくとそれぞれの集団から抜け出し、三人で新たなグループを築いていた。

「すばるくんは、もう一かにたつてなしゃい！」

驚いたのは、女の子……久美が、女子グループに居る時の彼女とは違い、実際には気性の荒い子だつたと言う事、そして男の子……重郎が、力持ちと言うだけではなく、かなり気さくな子だと言う事だつた。二日に一回は、久美に引っ掛けられた傷を付けて、僕は家に帰つていた。不思議と、それは苦痛ではなかつた。

小学校も中学校も、家が近かつたこともあつて同じ所に上がつた。長く一緒に過ごしていると互いに影響を及ぼし合つようで、久美は僕の消極性と重郎の気さくさを得て乱暴から陽気で気が利く子になつた。僕も、彼らからポシティブを得て、かなり外向的になつたと思ひ。

「…………っしゃー！ 受かつてやんの、俺！」  
「そりやまあ、そんな高い高校じゃないし…………ってあれ、私の番号どこだ」  
「無いんぢゃない？」  
「ま、まつさかー…………さかー…………かー…………」  
「え、マジでねえのか？」  
「…………あ、あつたあ！」

そうして、僕たち三人は、言葉に出さずとも互いに意識しあつて、同じ高校へと進学したのだつた。

「……わあ、もうこんな時間だあ

田を覚ました僕は、鳴ったのか鳴らなかつたのか分からぬ目覚まし時計を見て、ほつとそんな一言を漏らした。寝起きは頭がよく回りす、とりあえずそういう事を言つのが決まりのよう気がしてしまひ。とりあえず、ベッドから起き上がる。

「…………

トイレに行か、顔を洗う。

「…………

両親におはよう、と告げてから、用意してある食パンを頬張る。

「…………

ベッドに腰掛ける。

「……ま、間に合わない……」

時計は、既に八時十二分を指していた。八時三十分に始まる学校までは、徒步二十分。普通に歩いていると遅刻してしまひ。自転車通学は認められていないから、走るしかなさそうだ。

「行つて来まーす！」

入学式から遅刻しないよーなー、と言つ母親の姿を後ろに、僕は家を飛び出し駆け出した。

最初は一人として同じ制服の人を見掛けなかつたが、二・三分ほ

ど走ると、早足で急いで歩いている何人かに追い付いた。僕も同じぐらいの速さに戻して、歩いていく。

(……一番最初に入学式があつて……)

ちょうど良いので、学校説明会で貰ったプリントを出して、今日の予定を再確認することにした。

まずは入学式。ここで、入学のお祝いと教職員の紹介と、クラス分けの発表が行われる。それから各ホームルームに移動して、自己紹介などをし、後は帰宅。

(素っ気ない……)

とは言え、一田田ならこんな物なのかも知れない。

もう一枚貰っている、入学式での席順のプリントを取り出して、確認してみる。五十音順で並んでいるから、『武田昂』である僕は、大体真ん中ぐらいに位置する事になる。左隣が『竹頭明菜』、右隣が『田中萌』……。

よく見れば、左右に加えて前後、更には斜めに至るまで、全員が女子っぽい名前をしていた。

(……神様は実在した……)

そんな事に熱中したせいか途中で足が止まっていたらしく、気付いた時にはもう誰も周りには居なかつた。

学校に着いた時、手持ちの腕時計は三十二分を示していた。  
気まずい中、そつと校門をくぐり、音を立てないように体育館を

覗くと、中では肅々としたムードの中、今まさに教頭の先生が新入生に起立を命じている。非常に入りにぐい空気に足踏みしていると、近くに居た先生が僕に気付いて、話し掛けて来た。

「あなた、新一年生の子？」

「あ、はい。遅れちゃいましたけど」

「毎年一人が一人居るのよねえ……。」これも恒例なんだけど、入学式遅刻者は、式中に校長先生か教頭先生から戒めの言葉を受ける、みたいなしきたりがあつてね」

「はあ」

その女先生の言葉によると、何やら、思つていたよりも更にまずい状況らしい。

全新入生の前で、大恥を搔く羽目になるとは思いもしなかつた。

「何か訊かれても、黙つていろると良いわ。最近は、言えれば言つ程酷くなる傾向だし」

そういう言いつつ先生は、僕を生徒達が座る一番右端に連れて行つた。ここは待機せよ、という事らしい。その動きだけで既にかなりの注目を集めてしまつていて、しかもその視線一つ一つが突き刺さるようになってしまった。とても、怖い。

「次は、学校長様の言葉です」

「これまでも相当だつたが、更にたたずまいを直して、教頭の先生が宣言した。スキンヘッドの男がサツ、ヒ立ち上がり、壇へと向かつていく。

「えー……『ホン』

礼を済ませた校長が、莊厳に咳払いをした。僕は、目を閉じる。少しでも、少しでも優しさがあるような人でありますよ！」。

「……入学、おめでつ……おめでとう。えーと……今日から君達も、ほん、本校の生徒であります」

思い切りどもつていた。ついでに、メモもちらりと見ている。強面な外見の割に、声は少し弱々しい。有体に言つて、口下手だ。髪の無い頭には、滝のような汗が見て取れた。

五分ほど、何度も詰まりながら話があつた後、ついに僕にとっての本番が始まった。

「……えー、さて。入学式から遅刻して来た生徒が、えー、二人、居ます。前に出なさい」

後ろから、その担当らしい先生に背中を押されて、僕は壇の前に立つた。もう一人遅刻したらしい女子生徒が、僕と反対側の端から歩いて来て同じように立つ。

女子生徒は、どこか猫っぽい雰囲気を持っていた。

「ゴホン。……何故に遅れて來たあああ！」

突然、校長がシャウトした。僕と隣の子は、目を点にして校長を見上げた。

「何か言わぬ……かああああ！」

今度は溜めて來た。在学生見学席から拍手が上がる。傍から見れば良い見せ物だろうが、受ける僕たちにとっては恐ろしい事この上

ない。

校長による叱責シャウトは、この後三分以上も続いたが、その間中一度も拍手が消える事はなかつた。

シャウト校長が下がると、後はクラス分けの発表と、事務連絡を残すのみだった。

八クラス編成の、僕は七組に当たつた。ある意味自分のクラスよりも二人のクラスを気にしていたのだが、残念な事に久美だけは、別のクラスになつてしまつたようだ。それも一組。かなり、遠い。

「さーみしーなあーねー」

入学式が終わつて各教室に移動する時、久美は僕に寄つて来て、そう言つた。僕は黙り込んだまま、小さく頷いた。

「ま、来年に期待だあーねー」

そう言つて、久美はそそくさと去つていつた。

果たして一年後、僕や重郎と久美との絆は、ちゃんと残つているのだろうか。これまで、小学校も中学校もずっと同じクラスで來た分、その不安は大きかつた。新しい生活の幕開けだと言つのに、どこか寂しい。

そんな憂悶に駆られている間も、遅刻して壇の前で叱られた僕の知名度は高いらしく、同じクラスと思しき何人かの生徒に話し掛けられた。中には、免許部を創設しようとしている男子生徒も居て、僕にしつこく入部を勧めて來た。何が悲しくて、青春真っ只中に第一種危険物取扱免許の取得に向けた勉強などしなければならないのだろう。いや、寂しいのは確かだが。

七組はありがたい事に、北校舎の一階に存在しており、全く階段を使わずに済んだ。中に入ると、もう殆どの生徒は着席しており、僕も、机に置かれた名札を見て、真ん中一番前の席に座った。

「よつしゃ、全員座つたかいな？」「

担任の男性教師は、一瞬でそれと分かる関西人だった。生徒を見渡して人数を確認し、黒板に大きな文字で『倉口 友朋』と書く。

「これが僕の名前なんやけど、読めるか？ そやな……漢字が共通しどるさかい、津田朋絵さん、読んでみ」

「え？ えーと、くらひーともとも先生？」

僕のすぐ後ろの女の子の答えに、クラス中から笑い声が上がる。僕も振り返って、その子を見た。見覚えがある。猫の子だ。

「さすが、入学式から遅れて来るだけあるなあ。名字を読み間違えられたんは初めてかも知れん。あと、名前を最初に当てられたのも、初めてやわ」「

今度は歎声が上がる。女の子は自分が何をしたのか自覚がないらしく、とりあえず称賛されていると受け取つて、照れるように頭を搔いていた。

「僕の名前は、くらぐちともとも、や。変な名前やけど、まあ、仲良くしたってえな」

クラスの雰囲気は、倉口先生の氣をくさのお陰か、かなり良さそうだ。自己紹介でも、面倒くさそうにしている生徒は一人として居なかつたし、それを聞いていない者もやはり居なかつた。

そんなちょっととした満足感に浸つていて、順番は僕に回つて来ていた。そつなくこなそう、と思うが、入学式遅刻の実績は意外と大きいようで、僕に向けられる視線は熱い。

「えーと……神月中学校から来た、武田昂です」

とりあえずテンプレート自己紹介をしてみたが、まだこちらを見るその目に期待が残つていて、さつと彼らの中では、僕はかなりのお調子者に見えているのだろう。ちよつと考えて、僕は言った。

「校長先生の物真似やります」

クラス中が湧き上がった。僕の拙い演技力で、その後すぐに場が冷め切つたのは言つまでもない。

僕の次は、さつき先生に褒められ、貶された津田朋絵だった。僕と同じく遅刻組だと言う事と、さつきの名ボケからも、期待と共にまた場の熱が上がっていく。

「ええっと……津田朋絵です、かあああー！」

……。

一瞬の沈黙の後、クラス中が爆笑の渦に飲み込まれていった。

自己紹介の後は、早くも学級委員長決めだつた。

学級委員長の仕事は、中学校の頃に比べても格段に増えるようで、普段の授業での監視役からちょっとした手伝いをする雑務役まで、様々な役割があった。

これには積極性のありそうなこのクラスでも、話し合いは紛糾す

るかと思われたが、意外にも一人の立候補者があり、話はすんなりと決まった。

「…………

無言でそつと手を上げたのは、本当なら入学式で僕の左側に座るはずだった……と言つか、僕が右側に座るはずだった、竹頭明菜だ。何と言うか、背が低く、胸部も小さく……好みである。犬耳が似合いいそうだ。

(神様なんて居ないよ……)

どこか言葉がぶつきらぼうで、無口な所がゲームに出て来そう感をかもし出している。容姿も、かなり可愛い。が、僕と出席番号は連番なのにも関わらず、席は一列違いの一番後ろと一番前で、かなり離れていた。

(……そして、悪魔は実在する……)

副委員長も彼女の指名でとんとん、と決まり、予定よりも三十分ほど早く、クラスは解散となつた。が、殆どの生徒は帰ろうとせず、友達作りに躍起になつていた。

僕も、ここには一人でも知り合いを増やそうと、これから人気になるであろう後の朋絵さんに声を掛けてみた。

「はい、何でしょう?」

「席、近いしや。一応挨拶しておこうかなって

「そうですか~」

朋絵さんがありがたい事に人懐こい性格をしていたので、少しの

会話でかなり打ち解けることが出来た。話を聞いていると、やつからボケボケは、素だと言う事が良く分かる。

五分ほどで、話すのに遠慮しなくて良いほどになった。「ノリノリケーション力が上がっている自分に、ちょっとだけ感動する。

「でもさ、入学式での遅刻って、良い経験だよね」

「ですね～。この辺、迷いややすいですしね……私、一時間ぐらいた迷失つてたかもです」

「……それはどうだろ？」

「学校に着いてからも、体育館がどこにあるのか分からなくて……」

…「うう」

校門の位置から、体育館が見えないわけは無いのだが。ちょっと間が抜けている所があるようだ。いや、やつさんの件からすると、かなりかも知れない。

しばらくそうやって話していると、早くも一人の女子を引き連れている重郎が近くを通ったので、背中を叩いて朋絵さんを紹介してみた。

「げえ……か、可愛い……」

聞いた重郎の第一声は、それだった。僕も、重郎の引き連れていた二人の女の子も呆れた表情になつたが、当の朋絵さんだけはきよとんとして、ありがとうございます、とか言つている。

「何だ。私たちはお払い箱か」

二人の内、背の高い方の女子が、冗談っぽく言つて笑つた。重郎は、そんな事ねえよ、と言いながら、僕にその二人を紹介してくれた。

それによると、背の高い方の女の子が駒黒佐奈、そうじやない方の子が須本多香子と言つらしい。佐奈さんは、言葉数が多くてどつしりと構えたタイプのようで、多香子さんは物静か、と言つ印象が強く残つた。

「……では、昴さんは、神月小学校の出身なのですね」

ただ、不思議と、会話は多香子さんとの方がよく弾んだ。彼女は本が好きなようで、様々な点で僕と話が通じるはずはなかつたのだが、人間関係とは分からぬものである。向こうが昴さん、と呼ぶので、僕までつられて多香子さん、と呼ぶ始末だった。

重郎たちも朋絵さんの周りで落ち着いた頃、今度は学級委員長の明菜さんが話し掛けた。

「初めまして。全員の名前と顔を覚えるために、回ってる」

卷之三

۱۰۷

声は平坦そのものだが、明菜さんの表情は意外にも豊かだつた。朋絵さんの言葉に反応して回り始めた時には、青春を謳歌しているぜ、的な表情までもしていた。

互いに自己紹介を終えると、明菜さんは全員に握手を求めた。強く僕の指を握る彼女の手は、とても温かく、そしてふにゃふにゃとして気持ち良かつた。

「じやあ、これで。」

明菜さんは文字通り、回りながら去つて行つた。目が回つて事故でも起こつたら、朋絵さんには大きな責任があるだろう。次に現れたのは、クラスが解散になつて駆けつけたらしい、久美

だつた。とりあえず、皆に紹介する。

「久美い、よりどりみどりで、俺ア困ったよ……」

「へんたーい。……あ、重郎はいつもこんななので、何かあつたら容赦なくどうぞ」

「重郎さんは変態、と。メモメモ」

本当にメモする明絵さんに、どこから出したのか佐奈さんが既に『重郎=変態』と書かれているメモ用紙を渡した。それから、全員に同じ物を手渡していく。

「変態も勲章の内……だ」

「言い切りました。偉いです」

「おう……だよなあ！」

多香子さんに褒められて、重郎は何とか立ち直ったようだつた。殆どクラスに人影がなくなつて来て、明菜さんが戻つて来た。が、久美を見るや否や、血相をえて逃げ出そうとする。

「ふつふーん、逃がさん逃がさんー」

その服の背中を掴んで、久美が彼女を引き戻す。明菜さんはその間も、何とか逃れようとしたばた暴れていた。

「ん、明菜さんと知り合ひ？」

「うん。って言つても、今日の朝からの、だけじね」

「知り合つてない。私達は、知らない者同士だ」

「またまたあ。あれだけスキンシップ取つたのに、まだそんな事言うかなあ？」

「取つたからだ」

「だつて、明菜ちゃん可愛いんだもん」

後ろから抱きしめると、久美は明菜さんをくすぐり始めた。何だか見てはいけない物を見ているような気がして、僕は目を逸らした。重郎は食い入るように見入つていたが。

朋絵さんが、そつと僕の背中を突いて、尋ねて來た。

「久美さんって、さつき言つていた幼馴染の方ですか？」

「そそ。久美と重郎と僕で、仲良し三人組的な感じかな」

「良いですね、そう言つのつて」

確かに。と、僕は思つた。

願わくば、そんな風に思える人達が、この高校生活で増えますよう。僕はそつと、居ないかも知れない神様に、囁いた。

その日。家に帰つてからやつと、男子の友達が一人も出来ていな  
いことに気が付いた。

これでは、いけない。何も、恋愛するだけが青春ではないのだ。  
喧嘩から芽生える友情とか、スポーツの試合から生まれる仲間意識  
とか、そう言うのも青春の大重要な要素のはずだ。

そんな事を夕食後も入浴後も考え続け、考えたままベッドに寝転  
んでいると、枕元に置いていた携帯電話が、懐かしの名曲を奏で始  
めた。ついついずっと聞いていたくなる衝動を抑えて、電話を取る。

『もしもし？ スバズバ？』

電話は、久美からの物だつた。一週間に二度三度は電話があるか  
ら、そう珍しいことではない。

「うん。用件をどうぞ」

『んー。ちょっとね、一組で出来た友達の事でも話そうかなって』

これは好都合である。久美なら男友達を作るのにも抵抗がなさそうだし、学校内で友情線を作るチャンスだ。

『まずはー……春花ちゃんって子。もうね、凄いの。レモンに梅干を足して、塩酸で割つたような性格』

「全然分かんないんだけど」

『噛み碎いて言うと、突き抜けて明るい感じかな。凄く付き合い易そうな感じ? しかもだいぶ『』』

「あー。こっちのクラスには、そんな子は居なかつたかも」

そんな調子で、その後五人ほど紹介されたが、どれも女の子で男子は一人として居なかつた。

会話の切れ間に、珍しく不安そうに久美が呟いた。

『私、人見知りするのかなあ』

「久美が? まさか』

快活豪放、よく気が利く人懐こい久美に限つて、そんな事は信じられなかつた。

だが、久美は続けた。

『何かこう、お腹を割つて話せてない感じがするんだよね。今日だつて、最初に言つた春花ちゃんとぐらいしか、ちゃんと話せなかつたしさあ』

『時間が経てば、変わると思うけど』

『そつかなあ? こう言つのつて、最初が駄目だとずっと駄目なん

じゃない?』

そう言われてみるとそんな感じがして、僕は曖昧に答えた。久美がこんなにもブルーになるのは、これまでになかった事だ。

『んー……ん。そろそろ寝るかねえ。お休みー、また明日ー』

適当なタイミングでそう切り上げて、久美から電話を切った。携帯電話を元の枕元に放り投げて、僕はベッドに横たわった。あまり上手に受け答え出来たとは言えない。これと言った励ましも道しるべも『えられなかつたから、仕方なく適当に流したという感じさえする。

もつと、真摯に向き合わないと駄目だつたかな。背中を睡魔に突かれながら、僕はそう思った。

目が覚めたのは、六時一十五分だった。

昨日に比べて良すぎる覚めに、嬉しくなつて早朝から、ひやつほーうと叫んでしまつた。寝起きとは、本当に何をしてかすか分からぬ時だ。おはよう、の代わりに、なめろう、でも良いかと考えて、なめろうと送つた男子生徒の話は有名である。

(なめろう男みたいに、超能力があつたら良いんだけど)

ゲームの話である。大抵のゲームでは、そういう男子生徒は超能力のせいで事件に巻き込まれるが、最終的にはハッピーエンドを迎える。そのゲームも例に漏れず大筋はそんな感じだったが、全体的

に話が大きすぎてよく覚えていない。

「……」

久々にそのゲームの事を思い出してテンションが上がり、オープニングテーマを鼻歌で奏でながら歯を磨いた。それから部屋に戻ると、時計は三十一分を指していた。

「……鳴つてないじゃん！」

アラームは六時半に設定してある。洗面所と僕の部屋とはそう離れていないので、鳴れば気付く筈だ。つまり、鳴つてない。昨日起きれずに遅刻したのは、時計が壊れていたからなのか。

お陰で、昨日の暗澹たる校長シャウトまで思い出してしまった。僕にとつて残酷だったのは、それ自体よりも物真似の失敗だったのだが。

(つづいて……アラームのスイッチ入れてなかつた……)

昨夜は勢いで眠つてしまつたから、目覚まし時計は今日に限つてただの時計だつたらしい。鳴らない方が起き易いのだろうか。

ひとまず、鳴らなかつた理由を突き止めたところで、今朝は早くに出掛けてしまつている両親の用意した朝ごはんへと向かつた。今日の朝ごはんはカレーライスで、よくあるケースだが昨日の夕飯の残りである。昨日の夕飯は、一昨日の夕飯の残りのカレーライスだったから、今日の朝ごはんは一昨日の夕飯の残りのカレーライスの残り、と言つ事になる。

とは言え、家庭の味とは恐ろしい。一日続いたぐらいでは、カレーライスが持つ独特の魅力は全く薄れていなかつた。

「行つて来まーす

食事の後、何十分かの一人の時間の満喫してから、僕は誰に告げ  
るでもなく挨拶をして、家を出た。

空は清々しく、青く映えている。昨日は遅すぎて誰も居なかつた  
道には、今日は早すぎて誰も居ないよつだつた。昨日の僕に、ちよ  
つとした優越感を覚える。

そこへ、昨日見たばかりの顔が通り掛かつた。

「おはー

とりあえず、声を掛けでみる。

「あ、昴さん。おはよー」わざとまく

まさか忘れられては居ないだろつか、と思つたが、さすがにそん  
な事はなかつた。

「昴さんも迷つたんですか？」

「え？」

「道です。私、かれこれ三十分ほど迷つてこらんどすが……」

行き道は忘れているらしい。方向音痴、と、僕の脳内の朋絵さん  
データに書き足しておいた。全般的に、どこか抜けている所がある  
よつだ。

「じゃあ、一緒に行く?」

折角の珍しい、女の子と一緒に登校するチャンスなので、少ない  
勇気を存分に振り絞つて訊いてみた。

答えは存外早く返つて来た。

「はいっ！」

ちょっと周りの視線が突き刺さるようで痛いが、それを除けば今ほど幸せな時はないだろうと思う。

なんせ、女の子と一人での登校だ。そして、その相手の女の子は、中々可愛い上に既にクラスの人気者と来ている。えへへ。

「…………」

「…………あ、あの～？」

「うん？ 何？」

敬語キャラな分、ちょっと他人行儀なのが気になるものの、遠目には彼氏彼女に見えるだろう。昨日会つたばかりだから、他人に近いことは間違いないのだが。えへへ。

「顔、にやけてますけど」

「えへへー……つてわ、わ！ わあ！」

危ない危ない。つい弛緩してしまった表情筋には、後でみつちりお仕置きしておかねばなるまい。えへへ。えへへ。

そんな調子でそのまま教室に入つた。

先生が来るまでの時間、一緒に登校してきた流れで後ろの席の朋絵さんと話していると、ちょっととして教室に入ってきた重郎がこちらを見るや否や、駆け寄つて叫んで來た。

「おい！ お前！ 朋ちんと付き合つてるって本当か！？」

「朋ちんって、私の事ですか？ 付き合つてませんけど～」

「で、でも、朋ちんと昴が、一緒に登校してたって言つ噂があつてだな……うわあー！ 昴の裏切り者ー！」

「誤解だよ！」

叫び散らす重郎に、時に理路整然と、時に感情的に、時に深層心理に働き掛けるようにして事情を説明してみたが、聞く耳を持たない彼には全く効果がない。その間にも、重郎の声を聞いた周りの生徒達が、わいわいと勝手に騒ぎ始める。

「大体お前、昨日だつて朋ちんと一緒に遅れて來たじゃねえかよ！ 裏切り者あ！ ブルータス！ お前もかあ！」

「混乱しそぎだつて、ちょっと落ち着いてよー！」

昨日に至つては、シャウト校長の前で初めて会つたというレベルなのだが、それを否定する暇もないほどに重郎が押してくる。騒ぎはどんどんと加熱し、早く火の元を止めなければその内爆発に至るだろう。

「なるほど、昴さんと朋絵さんは、そうでしたか……」

「会つた時から、そんな感じはしていたな」

「学級崩壊の危機だ、どうすれば良いのか……」

気が付くと、昨日の三人も、火を注いだり納得の境地に至つたり、はたまた火消しの方法について思案したりしている。

わいわい、がやがや。五分、十分と経つに連れ、飽き始めたギャラリーが他の事に気をやつたお陰で、騒ぎは段々と温度を下げ始めた。

「おい、どうした苗一。もつと盛り上がりやせえい！」

「……昴さん、昴さん。重郎さんって、いつもこんな感じなんですか？」

ちょっと伏せ田がむに言ひ朋絵さんの皿は、それでもどうか楽し  
そうだった。

「朋ちゃんちゅーたら、僕の学生時代のあだ名やね」

あらう事か、重郎は先生が来てからもずっと騒いでいた。お陰で  
先生にもその噂が聞こえ、そこから十分以上にも渡る先生の超青春  
記が始まってしまっていた。

やつとそれが終わり、先生は黒板に大きな文字で『グループ決  
め』と書いた。教室内でいくつかのグループを作り、それらで日直・  
掃除・課題・遠足などに当たるのだと言ひ。結構重要なだ。

「三十一人やし、一グループ六・七人で五グループ作るか。……は  
い、開始。ドーン」

掛け声が必要かは全くの不明だ。

とりあえず重郎の方を向くと、向こうは既にこちらへと移動し始  
めている所だった。こう言うグループ決めは、早い者勝ちである。  
誰も、他のグループに入ってしまった人を、自分のグループに強引  
に連れてくるわけには行かないからだ。

幸い、朋絵さんはまだ誰とも組んではいないようだった。

「一緒に組もつか」

「あ、はい。了解です~」

あつむつしている。何かじつ、一十年来の知り合いのよひな。違うけど。

重郎が合流すると、昨日も連れていた一人も合わせて、五人になつた。あと一人か一人。昨日得た知り合いと言つと、あとは……。

「明菜さんは?」

「あちらの方で、グループ作りの斡旋をしているようですね」

多香子さんが指差した先で、明菜さんは小さな体をフル活用して、きぱきと指示を出していた。八人のグループと五人のグループを、上手くならして七人と六人に分ける所などは、一種のカリスマ性を感じさせる。

近寄つて、後ろから竹頭さん、と呼んでみた。

「どうかしたのか?」

「えと、明菜さんは、グループ決まつてるの?」

明菜さんはちょっと天井を見上げて、考えた。そして、そつと答え  
ば決まっていない、と答えた。

「良かつたら、昨日の五人でグループ組んでるんだけど、入らない  
?」

「ありがとう。そうする」

「じゃあ、終わつたら来てね」

「うん。くるくるー」

昨日からのお気に入りなのか、明菜さんは愛らしくくわつと一回  
転して見せた。

皆の所に戻つてみると、何故か全員が僕を冷たい目で見ていた。

「……君はアレだな、軽い男だな」

「え？」

「下の名前で呼ぶのが早すぎる。私なら、ボツコボコにするレベルだ」

佐奈さんに言われて、我に返つた。中学校の頃は、三年間下の名前で呼んだのは、重郎と久美だけだったのに。いつの間にこんなに積極的になつたのだろう。

「多香子さんにつられたんだよ、きっと」

「責任転嫁……良くないです」

「また名前で呼んでるしな。ひでえ奴め、浮氣性め。ブルータスめ！」

「ブルータスが浮氣性なのかも気になりますけど、重郎さんも人の事言えませんよね」

わいわい、がやがや。三分ほどで来た明菜さんも巻き込んで、グループは早くも大議論を始める事となつた。

大議論は五分で決着がついた。

「以上をもつて、あだ名や名前で呼ぶ事をくるくる認める」

明菜さんがそつまとめる。最初は攻守分からずに言い合っていただけだったのだが、明菜さんが入つて意見を一人ずつに聞くと、皆が名前で呼ばれる事に抵抗がないと言つ意見だつたので、その後はこれと言つた反論もなく綺麗にまとまつた。

「よつしゃー。いつたん席ついてなー」

先生の言葉で、僕たちは席に戻った。

それから、グループについてさつき受けたものよりも詳しい説明を受けた。グループの仕事の一つである掃除は、教室と、すぐ近くのトイレと、少し遠くにある社会科教室が、週に各一回ずつ計三度回ってくる。先生の指示で各班の代表者が話し合い、その結果月曜日に社会科教室、木曜日に教室、金曜日にトイレの掃除を担当する事になった。掃除は来週からなので、月曜日早速掃除があると言つ事になる。

次は、来週金曜日……今日が火曜日だから、ちょうど十日後に訪れる遠足についての説明だつた。行き先は近くのレジヤー施設で、飯ごうやら料理やらを行つてグループの団結を図るのが目的らしい。

「時間は、調理・食事・片付けを含めて一時間半や。間違うても、時間の掛かり過ぎる料理したらあかん。去年は、ドーナツ作るうとしたアホがあつたからな。じゃ、もつかい班で集まつてその辺決めてんか。あと、班長も決めといでな」

先生の指示に従つて、また六人で集まる。集合場所は僕と朋絵さんの席の周りだという、暗黙の了解が出来たらしく、僕と朋絵さんは全く動く必要がなかつた。

全員集合しての開口一番、重郎が言った。

「リーダーは、まあ俺で良いとして……。料理が悩み所だな  
「悪い冗談はよせ」

すぐに佐奈さんが突つ込みを入れる。そのタイミングの良さたるや、久美にも劣らないほどで、僕が突つ込む隙すらない。

「んあ？ 何だ、何か良い料理の案があるのか？」

「そつちじやない。お前がリーダーと言つ件だ」

「確かに、ちよつと不安ですねえ～……」

「なんでだよー。」

朋絵さんが佐奈さんに同意した。僕としてはどうでも良い事だったが、リーダーに適任な人が一人居るので、一応提案してみた。

「明菜さんは、どう？」

「……良いですね。明菜さんなら、安心してお任せ出来ます」

多香子さんが同意してくれる。佐奈さんも朋絵さんも、不満はなさそうな顔だ。

だが、明菜さんは首を横に振った。

「学級委員長の務めがある。残念ながら、時間が取れない」

「よつしやあ！ ならもういれは、俺しかないな！」

「つむ。では、委員長に指名して貰う事にしよう」

重郎は半分無視されかかっていた。

結局、佐奈さんの提案通り、明菜さんの指名でリーダーを決める事になった。明菜さんが一番に指名したのは、大方の予想を大きく裏切る重郎だったが、佐奈さんが提出した不信任案に賛成票が三票集まり、結果重郎は解任され、一度目の明菜さんによる指名で、何故か僕が選ばれた。

「名前で呼ぶ合づつきフレンドリー感を生み出した功績を評価した」

「たつたそれだけの理由？」

正直、リーダーと言つ柄でもないので、腰が引ける。見た所、佐

奈さん辺りがリーダーに相応しそうなのが。

「昨日と今日しか評価基準がないから、十分だつた。くるくるを生み出した朋絵が三番手」

「鼎さんなら……重郎さんは良さそうですね」

「多香子嬢が言つたら、私もそつ思ひことにしよう」

「私も、それで良いと思いますよ～」

色々まどろっこしい言い方をされはしたが、重郎以外の信任を得た僕は、めでたくリーダーに就任した。重郎だけはずつと俺だ俺だと言つていたが、逆にその事が、自分がリーダーになる決心を固くしたのだった。

続いて、恐らく本題である料理の選択を話し合い始めたのだが、その一番最初、あまり好き嫌いをしなさそつな明菜さんが、

「さんまだけは嫌だ」

と言つた。

「元々、さんは選ばれる余地がなさそつだが」

「苦手なの？」

「被るから嫌だ。フーキーンの人と被る」

うわあ、その人凄く記憶にある。確かに、その『フーキーン』と明菜さんは、見た目は全然違うものの、話し方やその他の特徴はそつくりだった。

とりあえず、初めから考えになかったさんまを更に遠くに追いやつてから、意見を一人ずつに訊いて行つた。

「焼きそば……シーフード焼きそばが良いですねえ～」

「カレーが妥当ではないかと」

「裏を搔いて、塩結びだ」

「コーンフレークはどうだらう。栄養満点」

「俺、サンドイッチが食いてえ！」

……バツラバラだった。一体感がないって言ひレベルじゃない。  
まずは、ふるいにかけよ!。

「塩結びは一時間半使えないし、サンドイッチはご飯が余つりやう

し、「コーンフレークはそもそも料理していないから却下ね」

「となると、一択だな。重郎……以外で採決を取ろう

「なんでやねんっ！」

重郎が先生に、良いツツコミだと褒められている間に、五人で採決した。シーフード焼きそばが五人、カレーが無し……。

「あれ、多香子さん、カレーは良かつたの？」

「何だか、シーフード焼きそばと言ひフレーズに惹かれまして」

満場一致。僕たちは残りの時間を、談笑と重郎をなだめるのに費やした。

遠足の計画の後は、グループによる校内のオリエンテーションだつた。

元々そんなに広い校舎ではないのだが、明菜さんのお陰で道に迷う事は一度もなく、十分ほどで全行程の三分の一を終えてしまった。

「昂つ！ 見たか、おい！ 食堂のメニューすげえぞ！」

「何故さんまの塩焼きがあるのか……」

「……少し、割高な気もしました」

それでも、僕たちの会話が途切れる事はなかつた。とても良い空氣だ。

そんな中、化学実験室の前を通りかかると、実験室の電気がついている。妙なハイテンションだった僕たちは、誰か居るなら入つても良いか、という謎の論理に誘われ、実験室に入つてしまつた。中に入った途端、実験室の証明が落ちた。

『いえす！　ないすかむおんね！』

謎のマイク音が響き、小さい電球が光つて部屋の一一番奥に居る一人の女の子を照らした。その女の子の手には、マイク。

「…………」

「……あつれえー、ノリ悪いのねえ」

女の子……と言つても高校生には違ひないだろうが、とにかくその女の子が何かを操作すると、一斉に実験室中の電気が点つた。未だに呆気に取られている僕たちを他所に、彼女は話し始めた。

「科学部へよつこせ！　カガクつて言つても、バケガクじゃないわよ？　自然科学部と呼んでちょうだい」

「……あ、え、ええと……」

「質問は手を上げて！」

「は、はー！」

「はい、どうぞ」

何か言おうとしたらしい朋絵が、女の子の勢いに押されてつい手

を上げてしまい、質問を強要されてしまう。普段なら気の利いたフオローも出来るのだが、こんな力オス空間の中では上手く出来ない。

「「」は何ですか?」

「いい質問ね。」は化学実験室兼、自然科学部の部室予定地よ!」

ちょっと的外れな質問ではあったが、向こうはそれなりに納得したらしく、誇らしげに答えてくれた。……ちょっと引っ掛かる。

「予定地……君は、上級生ではないのか」

「いえす! 私は白水優、一年生よ。あなた達もそうでしょ?」

「一年生は今、校内オリエンテーションをしている」

「ふつふーん。そこは、昨日中に学校の部屋の位置関係を科学的に把握して、今日のオリエンテーションで回る順番を論理的に想像して最短距離を割り出し、後は物理的に走って回って教室に戻れば、後の自由時間にここに居る事が出来るってわけ」

「どこが科学的でどこが論理的なのは分からぬが、とりあえずとてつもない努力の末にここに居る事は分かった。」

「そこまでしてここに居る必要性つて何だよ……」

「あら。」にして他の生徒に、自然科学部の存在を認知して貰えるじゃない?」

「……ちなみに、私達で何人目ですか?」

「六人目」

僕たちの班は六人班である。僕たちで六人目なら、僕たちが一組目だ。そもそも、よほどの事がなければ、化学実験室に入ろうとする新入生は居ないだろう。

「さあ、あなた達も早速自然科学部に入部希望を出して、科学的な学園ライフを送りましょう！」

「……嫌です」

多香子さんが、全員の総意を代表して言つてくれた。女の子……優さんの表情が強張る。

「あなた達、この期に及んで入部を拒否すると言つたの？」  
「まだそんなに及んでないと思いますけど……」  
「そもそもまだ部がない」  
「俺、野球部入りたいんだよなあ」  
「僕は帰宅したいし」  
「本が読みたいです」  
「多香子嬢を観察したい」

優さんがたじろいだ。が、後一歩で踏み止まつて返してくれる。

「じゃあ、野球が出来て帰宅もオーケー、読書もその観察も出来る  
自然科学部が出来たら、もちろん入るわよね？」  
「……帰宅して良いなら迷うけど、優さんはそれで良いの？」  
「もちろん！ 大事なのは予算、予算には人数！ ぶっちゃけ活動は私一人の方が嬉しいし！」

何か無茶苦茶な人だ。

「じゃ、そんな部が出来たら連絡してね」

そう言い残して、全員で逃げるように化学実験室を後にした。

僕たちが教室に戻ると、既に教室中の椅子は埋め尽くされていた。

「『ジッケツやさかい、昂ぐんト』が五班や」

本来なら一斑になれたのに、と思つと、ちょっとだけ悔しい氣もする。

明日はいよいよ新入生実力テストやし予習はしつかりなー、という先生の惡魔の言葉と共に、その日のホームルームは終わりを告げた。

さすがに昨日のように教室に残る生徒は少なく、五班の皆も各自帰る用意を始めていたので、僕もカバンを持つて早々に教室を飛び出した。

「…………」

声が出ないよに氣を引き締めてから、廊下で大きく伸びをした。体育会系という訳ではなかつたが、体を動かさないでいると、全身が凝り固まるような気がしてしまつ。

「……大丈夫ですか？」

そこに、後ろから声を掛けられた。体勢を戻して振り向くと、多香子さんがこちらを心配そうに見つめていた。

「ああ、うん。ちょっと、体を伸ばしてただけだから」

「そうでしたか。……腹痛でもお抱えなのかと思いました」

「大丈夫だよ」

とても恥ずかしい。何と言つ事のないように思えるかもしない

が、伸びの瞬間を誰かに見られるのは、少なくとも僕にとっては火が出るほどに恥ずかしいことなのだ。

相手が、せめて多番子さんで良かった。空気的に、走り去りたくなるほど恥ずかしくはない。

「やつですね……ちょっと可愛かったですよ」

僕はその場を、風のように走り去った。

夕飯は、残り物のカレーとうどんの組み合わせ……と見せかけて、まさかのハヤシうどんだった。その名の通り、ハヤシライスからライスを取り除き、うどんを加えた料理である。

「……なんでやねーん」

「あら、どうしたの？ うどんより、ナンの方が良かつた？」

母は、大真面目である。これだからタチが悪いのだ。

結婚が響き合ひを止めた風味が絶麗にまとめていて、とにかく食べ終わつた後に残つたダシも、そのままビーフシチューっぽく食す事が出来る点で素晴らしい。

「…ちそう様でしたー」

僕はお皿を軽くお湯で洗つた後、自分の部屋に戻つた。

昨日タウンローーとしておいて聴き損ねたお気に入りのウエブラジオを、部屋中が満たされるぐらいの音量で掛けた。

『そーせききょーだいっ！』

タイトル「コール」が出落ちになるほどに変わったタイトル名だが、内容はラジオにして自由奔放、終始明るい番組なので、聴いていて疲れる事がなく、僕は人生中で聴いたラジオの中では、この番組が一番好きだった。まだ四半世紀も生きては居ないが。

四十分ほどで聴き終わり、僕は体を起こした。携帯電話を開こうとして、焦る。

(台所に置き忘れた………)

携帯電話に一定時間触れられないというだけで手が震える人も居るが、僕は母に携帯電話を触れられると全身が震える。あの人は、携帯電話を勝手に見るので。そして更には、その履歴についてからかってくる。

急いで、取りに階段を下りる。案の定、携帯電話は既に母の手に落ちていた。

「いやいや。あんたも隅に置けないわねえ！」

「もう……勝手に見るの、止めてつてば」

昨日メールを全件削除して、その後通話を一回しかしていないはずだから、母のこの満面の笑顔は、ご飯から今までの間にメールがあつた事を如実に物語っている。

隠そうとする母から電話を分捕つて、階段を上りながらその内容を見た。

『FROM 久美" kumicumi@neweb.ne.jp』

件名：無題

本文：

『そうだ、部活をしよう。』

分からぬ。母がこのメールを見て、ビックリさせしていたのが全く分からぬ。

とりあえず、詳細を訊ねるメールをする。返信はすぐに来た。

『FROM 久美" kumicumi@neweb.ne.jp"

件名: Re:Re:無題

本文:

重郎とか、スバーンと同じ部活に入つたら、退屈しないで済みそうだしさあ。

あとは、クラスの子に誘われたりもしたんだよねえ』

何部に誘われたの? .....送信。

『FROM 久美" kumicumi@neweb.ne.jp"

件名: Re:Re:Re:Re:Re:無題

本文:

自然科学部。白水優ちゃんつて子に誘われたから、ここはちやつかれんと入っちゃおうかなあと。

青春を謳歌するためには、部活を大事にしないと!』

僕は頭を抱えた。そもそも、まだ出来ていない部活である。それに、自然科学になど、全く興味がない。

だが、久美は不思議なほどに乗り気だつた。三度四度とやんわり諫め、五度六度と強く否定したが、久美の熱は全く冷めなかつた。

『FROM 久美" kumicumi@neweb.ne.jp"

件名: Re:Re:Re:Re:Re:Re:R . . . . .

本文:

ありがとう！  
おやすみっ！

結局、押し切られてしまった。久美は満足そうな絵文字と共に、こちらの気が変わらないうちにと引き上げていった。

僕が入るとして、五班の皆は一人でも入ってくれるだろ？ 重郎は？ 朋絵さんは？ 多香子さん、佐奈さん、明菜さんは？ 暗雲が、立ち込めつつあるような気がした。

また、六時一十四分と言う、田舎まし時計泣かせの時間に起きてしまった。また鳴るのを止めるのがわざらわしく、僕は先にスイッチを切つて置いてから、顔を洗いに行つた。

(あ～……テストだっけ)

手遅れになつた重要情報を思い出しながら、昨日に続いて早くに出掛けてしまつた両親の書置き通りに置いてある朝食を食べ始める。昨日の残りのハヤシライス……と見せ掛けて、昨日の残りの素うどんである。

ただのうどんだが、それなりに美味しい。誰にともなく「こちそりさま」と言ってから、僕は部屋に戻つて何週間か前に貰つたまま放置していたテキストを引き出しから出した。

『新入生歓迎実力判断テストの結果は、直接成績には関わりませんが、著しく低得点だった場合、関心・意欲について考慮する可能性がある

ります』

「うわあ、不吉。長いテスト名は、その重要性に比例しているのか反比例しているのか。

表紙をめくると、まずは大きく『国語科』の文字があり、すぐ下に小目次があった。文章読解、古文漢文、漢字の成り立ち、ことわざと慣用句……。

眠気を感じた僕は、それを静かに閉じて引き出しに厳重にしまいこんだ。

「行つて来まーす」

半ば独り言のようになつて、家を出る。

今日は、昨日とは違うルートを通るつもりだ。昨日のように朋絵さんと出会つて、道に迷つたと泣きつかれると、一度田の二人で登校が実現してしまつ。朋絵さんは悪いが、今日は避けて行こう。

「あうー……学校うー……」

と思っていたのだが、大きな交差点に差し掛かつた時、左側の道からぐつたりうなだれた朋絵の姿が田に入った。何故か学校側から歩いて来ている。僕はとっさに電柱に隠れ、朋絵さんの動向を見守つた。

「あうー……あうー……」

幸運にも、彼女はこちらに気付かず、真っ直ぐ右へと歩いて行つた。まるでゾンビのようだ。朋絵さんと、心から心だけで気持ち謝つておく。

その後も警戒して登校したお陰で、誰にも会ひ事なく学校に着く

事が出来た。

「あ、おはよ'ひ'やこます」

「……うん、おはよ'ひ」

だと言つのに、教室に入ると、朋絵さんは真っ先に僕に挨拶してくれた。

あんなに冷たくしたのに……ではなく、さつき学校と反対方向に歩いていたのに、どうして僕より先に学校に着いているのだろう。

「んう？ 私の顔に、何かついてます？」

「あ、ううん。大丈夫」

とは言え、登校の様子を見ていたとも言えない。早くも、僕の中の学校七不思議の一、一つ目が埋まつた。七不思議の一、朋絵さんのワープ。

「おはよ'ひ'やこます、昴さん」

「あ、うん。おはよ'ひ」

そういう感じでこの内に空いていた席も埋まり、テスト直前にだけ訪れる、緊迫している様な、厳肅なような、そんな空気が流れ始めた。

前の扉が開いて、先生が入つてくる。定期テストほどの重要性も無いはずなのに、先生はスースッと決めていた。

「よし皆、自分の椅子に座つてや」

チャイムが鳴る。最初の五分間で、解答記入用紙と問題用紙が配られ、諸注意がされる。そしてそれが終わってからの一時間が、テ

スト時間だ。

「……諸注意は以上や。各自、解答を始めてええで」

かりかりかり。天国か地獄か、分かれ目の一時間が始まった。

「……よつしゃ、そこまでや。後ろから解答用紙だけ回収してな」  
全く駄目だつた。半分以上の問題は久しぶりすぎて答えに窮し、一部の問題に至つては、初めましてと言つレベルだつた。

後ろの朋絵さんも似たようなものらしく、机に突つ伏してしくしく泣いていた。五班のメンバーを見回してみると、多香子さんが平静、明菜さんが満足げ、佐奈さんが余裕、重郎がガツツポーズ……。重郎も中学校の頃から、アレでいて頭が良かつた事を考へると、僕と朋絵さんが五班の低成績ツートップになりそうだ。

「はあ……」

朋絵さんを真似して、僕も机に突つ伏した。

その日の学校での用事は、それで全部終了だつた。何か分からぬいが、今回のテストに込められた学校側の強い意志を感じる。嫌な話だ。

帰ろうとする五班の皆を呼び止めて、僕は自然科学部への入部について話した。

「めんどい」

「何だか、帰りにくくなりそうですねえ~」

「バスだ」

「遠慮します」

「入らない」

一斉に嫌がられた。嫌われすぎている自然科学部の罪は大きい。

「どうして?」

一同に訊く。

「人が多いし。あと、自然科学部怖い」

「結構な人数ですし……」

「人ごみは嫌いだ」

「本を読むには、大所帯過ぎるかと」

「クミーが怖い」

明菜さんを除いて全員が心配しているのは、五班まる」と入った時の部員数だった。全員が入ると、少なくとも八人になる。騒がしくなりそうなのは間違いなかつた。

「そもそも、活動しないのに部員になるのは、ちょっとまずいんじやないです?」

「うーん……。とりあえず、一組行こつか

旗色が非常によろしくないので、僕は話を切り上げて、半ば強引に皆を一組に誘つた。

一組は四階にあり、辿り着くまでにそれなりに骨が折れた。日々に文句を言い出す皆を、リーダー権限を無理矢理に用いてなだめ、ようやく一組に辿り着くと、ちょうど扉から久美たちが出てくるところだつた。

「おおー。スバスバつ！」

久美と、優さん。そしてあと一人、見かけない女の子。前に久美が話していた春花と言う子だらうかと思つて訊ねようとしたが、誰かに服の背中を掴まれて勢いをなくし、振り返つた。

「……えーと、明菜さん？」

久美に怯えた明菜さんが、服をぎゅっと掴んで背中に隠れていた。凄く可愛い。これが萌えと言つものか、と僕は一つ悟つた。が、和んでいる暇はない。

「ひゅーひゅー　スバスバつたら、モツテモテえー  
「にやーるほどにやるほど、モツテモテー！　あ、初めましてー、  
一年生の花こと高木野春花だよ、へいっ！　いえい！」  
「あ、うん。……ええと、武田昂です。よろしく  
「いえい、よろよろー！」

凄い勢いだ。見えない力に押されて、何歩か後ずさつてしまつ。僕の後ろに居た明菜さんは、僕の後退によつて横に押し出され、しぶしぶ前に出て、春花さんと握手を交わした。それから、久美の目を恐れるようにして、今度は佐奈さんの後ろについた。久美もそれに気付いて、いつ食い付いてやううつかと目を光らせる。

「……うむ。明菜嬢は私の物だ。譲らんよ

佐奈さんが、振り返つて明菜さんを捕まえ、くすぐるよつこして抱きしめた。

「ええー、公共物公共物！」

「渡る世間は鬼ばかりとはこの事なのか……」

明菜さんは諦めたような表情で、この世の不条理と力による支配の恐ろしさについて考えているようだった。

「そしてー、ここにおわすのがー……じゃんじゃんじゃーん、じやかじゃん！」

「……騒がしい子だわ。さて、七組五班の君たちは、入部の意思を伝えに来たのよね？」

ああ、そんな用事だった。気を取り直して、本題に入る。

「その事なんだけど……僕はともかく、ここちの五人にやる気がなぐつて」

「それは由々しき科学的な問題ね。……そうねえ。活動場所の化学実験室は、空調力学的に夏は涼しく冬は暖かいわよ?」

「空調力学つて、エアコン……」

僕は途中で声を失った。

あれだけ、難攻不落そうだった五班の皆は、空調力学の効果によつて、全員が入部の意思を表して手を上げていたのだった。併せて明菜さんがその間に、佐奈さんの魔の手から脱出した。

「以上。武田君だけ。質問は?」

「……おみそれ致しました」

「素直でけつこう。これで九人ね……予算も、鍊金術的に転がり込んでくる……いえす！」

優さんは笑顔で、手を振り上げて見せた。明菜さんがくるくる回

る。

「……あれ、九人？ 八人じゃない？」

「私とー、スバスバとー、明菜ちゃんとー、重郎とー、佐奈さんに多香子さんに朋絵さん、あと優びょんと、春花つちで……九人かなあ。スバスバ、大丈夫？ 疲れてる？」

「あ、春花さんも入るんだ……」

「じゃんじゃんー、ヘイツー！」

前途多難な未来が、垣間見えた。だけどそれはとも、楽しそうな未来だとも思えた。

始業式の日から創部申請を出していたらしく、明日には部活動として最初の活動を行える運びになつているらしい。明日は木曜日、まだ午前中に授業が終わつてしまつ田だ。

「明日は一応最初の日だから、全員出席してね。開始は、十一時から。場所は化学実験室、以上！」

終了時刻を告げなかつた辺りがまた怪しいが、あえて突つ込まない事にした。そうして、自然科学部の創部前ににおける話し合いは、解散となつた。

今日の晩御飯はハヤシカレー……さすがに飽きて來た。とは言え舌はそうでもないらしく、おかわりまでしてしまつた。

部屋に戻つて携帯をいじつていると、昨日に続いて久美からのメールが届いた。

件名：無題

本文：

ゆ～つたりま～つたり。お風呂つて良いねえ』

今日は雑談スタイルのようだ。ちょっと迷つてから、『そりだね』とだけ返信する。

『FROM 久美”kumicumi@zewaneweb.ne.jp”

件名：Re：Re：無題

本文：

今想像したでしょ。へんたーい』

久美は、幼馴染の僕から見ても、あまりスタイルの良い方ではなかつた。すらつと細く、女の子らしいラインをなぞつてはいるのだが、最も重要な部分が足りない。つまりは胸が貪相なのだ。よつて、想像したらドキドキはするだろ？が、特にえちい要素はない。

（シャワーなら……）

煩惱に呑み込まれそうになるのを頭を振つて逃れ、『全然』と返信する。

『FROM 久美”kumicumi@zewaneweb.ne.jp”

添付ファイル”H23-4-03-2024.jpg”

件名：Re：Re：Re：Re：無題

本文：

えー？ ほり、画像送るしわ』

絶対に違うと分かつているのに、わずか千分の一の可能性すらないのに、万が一にもありえない事は明白なのに、男には添付ファイ

ルを開かねばならない時がある。今がそれだ。

ディスプレイに現れたのは、お決まりの赤目女。でも、これはこれで可愛く……ない。

『FROM 久美”kumicumi@neweb.ne.jp”

件名：Re：Re：Re：Re：Re：Re：無題

本文：

ほら、分かつても開いちゃう私の魅力ってヤツ、えっへん』

ちょっとだけ悔しい。ただ、一昨日や昨日のアンニュイな感じから、久美が復活したような気がして、それを上回って嬉しかった。

目が覚めた時、時計は六時二十九分を指していた。体を起こした後、頭がはつきりとするまでうとうと揺れている間に、時計の表示する時間は三十一分に変わった。目覚ましのベルは鳴っていない。

（あれえ……）

目覚ましのスイッチはちゃんと入っている。つまり、時計の目覚まし機能は、月曜日以前から壊れていたのだ。火曜日の時点で早合点してしまったが、今週に入つてから目覚ましは一度も鳴っていないかった。

ちょっととした笑い話になるな、と思いながら、一昨日から三連続で家に居ない母親が作り置いてくれた、カレーパンを食べる。わざわざスーパーで買ってまでカレーにまとめる必要はないと思うのだが

が、味は中々だった。

「行つて来まーす」

丹念に準備の再確認をして、家を出た。

家を出て一つ田の曲がり角で、早くも朋絵さんと出くわしてしまつた。しかも、子供を連れている。逃げる暇もなく、朋絵さんは僕に気付いた。

「おはよう」「やれこます～」

「うそ、おはよう。その子は？」

小学校六年生ぐらいの子。「コーコー」と、無邪氣そうな笑顔をこれ見よがしに振り撒いているその顔は、どこか朋絵さんに通じるものがある。

「私の妹の、誼絵です」

「すばるさん、初めまして、おはよう」「やれこます！」

「おはよう。初めまして、誼絵ちゃん」

凄くはきはきと挨拶をする、活気に溢れた子だ。話を聞いて行くと、朋絵さんが道に迷わないように付き添いに来たらしい。彼女が通っている中学校とは開始時刻が違うだけで方向が一緒なのだそうだ。

中学生に付き添いされる高校生と言つのも妙な図だが、それ以上に一人の仲の良さがとても目立つている。この年頃の姉妹なら、もつとギスギスしていくても良むかつなのだが。

「お姉ちゃんは、いつもいつもなんですよー」

『さあ、話しかけてくれる誼絵ちやんの話を聞きながら、登校した。

午前十一時。五班メンバーを連れて、僕は化学実験室へと向かった。

着くと既に、実験室の電気は点いていた。中に入つて見回すと、既に他の三人は椅子に座つて待機していた。

「遅かつたわね、サブキャプテン」

「うん。ちょっと長いです。……って、誰がサブキャプテンって？」

「もちろん君」

七組五班六名のリーダーとして、副キャプテンにちょうど良いと思つたらしい。特に仕事も出席しないといけない会議もないらしいので、一応引き受けておいた。

「とりあえず予算は出たから、明日までに実験装置第一号を作つておくわ」

「わーい、アイス買お！　アイス！」

春花さんが、予算と言つ言葉だけに反応して、びこから持つてきただのか分からぬカスタネットを叩き始める。頭が痛そうに、優さんは言つた。

「……久美。この子の保護者はあなたよ」

「ほーら、春ちゃん。アイスじゃ氷だよ？　ちゃんとアイスクリーミーとか、ソフトクリームとか言わないと」

「了解！ ソフトクリーム買おー ソフトクリーム！」

久美に頼んでもこいつの結果になるのは目に見えていたのだが、優さんは驚きの表情を持つてそれを迎え、今度は僕に向いた。

「……サブキャプテン、久美の保護者に君を任命するわ」「えー。ソフトクリーム、ダメなの？」

どうせなので、僕も乗つかつて訊いてみた。優さんは、駄目に決まってるわ、とだけ言って、そっぽを向いてしまった。ちょっと機嫌を損ねてしまつたらしい。

「ソフトクリームは和製英語だ。だから、優も怒つたに違いない」

隣で、明菜さんが冷静に分析を始める。

「英語じゃ、なんて言つんだ？」「ソフトアイスクリームと言つ。昨日の帰り、佐奈に教えて貰つた」「あのラムソフトは、中々の味だつたな」

既に一人で帰つたりしているのか、と思って、二人で登校した事を思い出した。男女である事を除けば、そんなに特殊な事でもないようだ。

多香子さんが、早くも読み始めていた本にしおりを挟みながら訊いた。

「では、アイスクリームはビのよつな意味になるのじょ？？」

「……私には分からんな」「軟らかい軟膏」

優さんが机に腰掛けて言つた。さつき少し悪くした機嫌の事はもう忘れたらしく、微笑みをたたえながらじらを見ている。

「なん」「う……って何ですか？ 落語？」

「まあ、朋絵嬢は放つておくとして、なるほど。クリームで軟膏か」

佐奈さんが大きく頷く。軟らかい軟膏を食べる所を想像すると、かなり気持ち悪い。そもそも食用じゃない。

「オイントメントが正しい英訳だけど、そりよ」

「優たんが知識人……いえい？」

「失礼ね。これでも、そこそこの中学校で、そこそこ成績だったのよ？」

「それって全国的にもそこそこだよね」

僕の言葉にむっと顔を引きつらせ、優さんはすぐ横に置いてあつた彼女のカバンから、青色の小さな手帳を出した。中学校の頃の生徒手帳よ、と言つて手帳を投げ渡してきたので、僕は受け取つて、表紙を開いた。

そこには、いつか雑誌で見た『全国の中学校で最もレベルの高いところ』ランキングで、一位を獲得していた学校の名前が、至つてスマートに小さく書かれていた。その雑誌によれば、その中学校の現役三年生の一割は、日本の最難関大学である東京都大学の入試試験で、八割以上の得点を取れるほどなのだ。そもそも、その中学校への入学試験が、既に私立大学の平均ぐらいの難易度があるらしい。

「……えー」

「あら、まだ不満なの？」

「いや、ちょっとおかしな人だなあ、と思つてたのになあ、って」

「同感ヤシマー！」

同じぐらいおかしな人である春花さんも同意してくれる。優さんは一度顔をしかめたが、すぐに緩めて溜め息を吐いた。

「……まあ、良いわ」

「それより誰か、なんこつって何なのか教えてくださいよ……」「んー、よしよしー」

久美が、朋絵さんを撫でながら、軟膏についての詳しい説明を始める。その様子を見ている内に、また新たな疑問が湧いた。

「そんな超学生の優さんが、どうしてここに？」

「超学生って何よ。……この辺の高校じゃ、創部してすぐには予算が貰えるのはここだけなのよ」

誇りしげに優さんは言つた。

「……え、それだけ？」

「十分すぎる理由じゃない」

「だつてほら、もっと勉強出来る所に行つた方が良いんじゃ……」

「高校の勉強なんて、もう要らないわよ」

そもそもそうだ。何せ、入学の頃から大学レベルの問題を解いている中学校なのである。高校の勉強はおろか、大学の勉強すら半分ぐらいは要らないのではないだろうか。

「糜爛剤は作っちゃ駄目つてのが、ちょっと誤算だったけどね」

「びらんざい？ 軟膏の進化系？」

「あら、知らないの？ 皮膚をただれさせる兵器。マスターードガスつて、聞いた事ないかしら」

そう言つゲームが好きな僕には、親しみのある兵器だった。ゆつ  
くじじつくりと効いてくる、残留性の高い化学兵器である。よくあ  
る「Mの防弾着も通してしまつので、中々に凶悪なのだ。

「そんなの認められる学校に居たくないよ」

「そりかしり？ 自由つて大事よ？」

天才の考える事は誰も理解出来ないそうだが、少なくとも天才と  
変な奴が紙一重なのは間違ひなさそうだ。違うのは、それを実現出  
来るか出来ないかと言つ点である。

「あら…… そろそろ解散時ね。帰つて良いわよ」

「……優さんは、どうされるのですか？」

「言つたでしょ？ 実験装置第一号を作るのよ」

部員九人の新部に下りる予算がどの程度が分からぬいが、そう多  
くはないと思う。何を作る気なのか気になつたが、昼食時も近かつ  
たので、全員を引き連れて帰る事にした。

「……ずは解体ね……」

後ろでちょっと物騒な言葉が聞こえたが、これも気にしない事に  
した。

その晩のご飯は、グラタンだった。ついにカレー・ハヤシ路線を  
突破したらしく、久しぶりの新しい味に舌が感動を覚えていた。

お風呂から出てから少しして、久美から電話が来た。すぐに取る

のもどうかと思つたので、三ホール田代りで出る。

『やふーー。ぐーぐるー。ぐーー。えどはるみー。』

「……こつになく、テンション高いね」

『そう? もう何か、楽しくって楽しくってさあー』

声は明るい。元々、集団でわいわいと騒ぐのが好きな久美の事だから、自然科学部をそれなりに気に入つたに違いない。

『いやあー。明菜ちゃんは可愛いし、朋絵つちは萌えドジおとぼけだし、さなさなは姉貴いーつ! つて感じだし、多香ちゃんは清楚美人だし、七組は粒揃いだねえー』

「一組だって、天才優さんとか、騒がし春花さんとか、中々珍しいクラスだと思うけど」

『んー、まあねえー』

話した三十分ほどの間、ずっと久美は上機嫌だった。やつぱり、久美はこうでなくてはいけない。

時間が遅くなつて來たのでこちらから電話を切り、少しテレビを見た後、ベッドに入つて眠りについた。

いつもと同じように、準備だけしてある朝ご飯を一人食べる。

(.....)

夕飯ならともかく、朝食を一人で食べる高校生は、そう少なくな

いと思つ。それでも、一人で対面する「飯と言つのは、どうか味気ない。困む、とまでは行かなくても、食卓を真ん中にして誰かと向かい合わせで食べるだけで、ひもじご」飯の何と美味しいことか。と、妙に暗くなつてしまつた心をビリにか盛り上げ、家を出た。

「行つて来まーす」

鍵を、きちんと掛けておく。最近はこの辺つも治安が悪くなつたと、父が嘆いていた。昔から住んでいる町だから、少しだけ悲しい感じもある。

慣れた道をゆっくり歩いてくると、昨日と同じ交差点で、誼絵ちゃんに連れられている朋絵さんに出会つた。

「おはよー」「やあこまゆ~」

「うそ、おはよー。誼絵ちゃんも、おはよー」

「おはよー」「やあこまゆ~」

連日の一緒に登校が、変な噂を呼ばなければ良いが。そんな事も考えたが、結局また一人と一緒に登校する事にした。

話題はもっぱら、誼絵ちゃんの事だった。朋絵さんによると、誼絵ちゃんはとても頭が冴えるらしい。

「道に迷つもしませんし~……」

「それは、朋絵さんだけが特殊なんじゃない?」

「ですよね。お姉ちゃんが、ちょっと変なんです」

談笑しながら登校した。高校生にもなつて、女の子達と一緒に登校出来るのは、やはり神様が居るからに他ならない。僕は、神様に感謝の意を捧げた。

「月曜日から午前午後の平常授業が始まるさかい、ちゃんと準備しつきや」

五日間とは思えないほど長かった新入生の時期も今日で終わると思つと、これからのはしい学校生活を思い浮かべて憂鬱になる。中学校の頃には理科で統一されていた科目も、一年次では化学と物理に分かれている。これが、月曜日の一時間目と一時間目だ。頭の切り替え云々もそうだが、朝からするにはあまり良い授業ではない気がする。

(……でもまあ、どの授業もそつかも知れないけど)

何でも前向きに考えないといけない。一時間続く体育が、朝に回らなかつただけでも幸運だと考える事にしよう。

先生の終了の挨拶を聞いて、僕は化学実験室へと向かつた。五班の皆も、昨日を踏まえて今日は誘わなくとも来てくれるに違いない。

「…………」

「…………」

「…………」

その期待は、あっさりと裏切られた。

多香子さんと、朋絵さん、それから久美が居なかつた。一応教室にも探しに戻つたが、当然カバンもなく、既に帰宅の途にあるよう

だ。

「七五班が四人と、私と……五人も居れば十分ね」「私だけあからさまにスルーするなんて、泣いちゃう…」「優。春花は泣くと長い。優しくしないと駄目だ」「うー、明菜ちゃん優しいつ！ 私感動した！ 泣いちゃう…」

春花さんと明菜さんは、昨日一緒に帰つたらしく、既にかなり打ち解けていた。昨日も佐奈さんと帰宅していたのだから、明菜さんの「コミュニケーション能力には恐れ入る」

「ほれほれ、重郎ちゃん。飴舐めましゅかー？」  
「……何だ、それ。漫才師春花の新手のギャグか？」  
「え？ だつて、七五三だし。五歳の重郎ちゃんは、千歳飴舐めるかなあーつてさー」

春花さんが、やたらに重郎の頭を撫で回していた。力が入りすぎていて、重郎は痛そうに顔をしかめている。

「七五班だよ。優さんも、変な略し方しないでよ」「七組五班じゃちょっと長いもの。何なら、そつちで考えてくれても良いけど」「なら、宿題だ。土日で考えよつ。月曜日の活動は大喜利で決定だ。良かつたな、優姫」「良かないわよ……」

他のメンバーの間にも、壁はないようだ。そうなると、今日居ない多香子さんと朋絵さん、久美の事が気に掛かる。人懐こい朋絵さんや久美はともかく、物静かな多香子さんは馴染めるだろうか。僕がそんな事を考えていると、また少し放置され気味だった優さ

んが、手を叩いて注目するよつて号令をかけた。

「……わて、じゃあ、昨日言つておいた実験を始めるわ。佐奈、その台車に装置が載つてゐるから、台車ごと持つて来てちょうだい」「うむ。と言う事だ、春花嬢」

「はーい……つてなんでじやボケー！ 鳴つちにやらせろおー！」

「えー、人にやらせてばつかじや駄目なんだよ？」

「それ佐奈たんに言えー！」

結局重郎が押し付けられて、しぶしぶ運んで来た。

その、中々に大きい装置の外装を見て、僕たちは言葉を失つた。普通の紙よりも頑丈な作りになつた、茶色の安価な箱……ダンボールが、装置のおよそ九割を囲つていたのである。

「見た目はちよつと悪いけどね。中身は、近代科学を大きく上回る代物よ。……多分」

「多分？」

「去年の今頃、実験用に山で穴を掘つていたら、謎の設計図が出来たのよ。それがこれ」

「これは、どんな装置なんだ」

「分かんないわ。だから、実験するんじゃない」

優さんがつと誇らしげに笑う。反対に、僕たちの顔は引きつった。一体何が起こるかすら分からない、設計主不明の、怪しい人が製作した装置で実験をして、よからぬ事が起きないとは言い切れない。

「それは安全なのか」

「簡単な構造だつたから、そんなに危険ではないと思つわよ

「確信は？」

「もちろん無いわよ。で、そこに飛び出でるコードを、掴んでちょうだい」

かなり不安にさせる言い草だったが、まあ確かにこの見た目で、何か危ない事が起こることは思えない。僕たちは頷き合って、そのコードを持った。

優さんが、スイッチらしき物を小気味良い音で叩いて、自分もそのコードを持った。

「…………」

五秒経過。

「…………」

十五秒経過。

「…………」

一分経過。

「…………まだ？」

「どうやらガ設計図だったみたいね。離して良いわよ」

それぞれ慎重にコードを離す。優さんが、大きく溜め息を吐いた。ガ設計図はきっと、ガセの設計図と言う意味だろ？。よくよく考えてみると、設計図は山に埋まっていたのではなく、山に捨てられていたと考える方が自然だ。そんな物が、動く筈もない。優さん以外はその辺の結論に至つたようだが、優さん一人が納得出来ずにはいがいがと怒っていた。

「今年分の予算使い切ったのに……腹立たしいわ」

「……え？」

「残りは十円玉が何枚かだけよ」

「ソフトアイスクリーム、食べられないのか……」

明菜さんが、悲しげに目を伏せた。元々ソフトクリームを食べられないのはしなかつたのだが。

ひもじい。創部から数日を経ずして、自然科学部は無予算での活動を強いられる事となつた。

昼食時が近付いて来て、一人まだぶつぶつと文句を垂れている優さんを残し、僕たちは帰る事にした。

成り行きで、久しぶりに重郎と一人で帰宅する事になつた。高校生になつて初めて二人きりで歩いた僕たちは、クラスの事から知り合つた友達の事、自然科学部の事など、様々な事を語り合い、感想を述べ合つた。

「んじゃさ、んじゃさ。明日辺り、カラオケでも行こうぜ!」

「あー、良いかもね。重郎のジャイアンリサイタル」

「うっせえ! ちょっと成長してるつづーの」

中学校では、マイクブレイカーの重郎は異常なほど有名だつた。文化祭での歌唱力コンテストでスピーカーを壊してからは、単にブレイカーと呼ばれるほどの声量と音痴だ。

結局、明日に行く事に決まつた。久美と三人で行こうか、と言つた話でまとまりかけていたのだが、重郎が自然科学部の皆も誘つたらどうだろ? と提案したので、親睦会も兼ねてそうする事にした。

「じゃあ、家に帰つてから暫に訊いて、後で連絡するね」

「おう。了解」

カラオケなんて、何ヶ月ぶりだらう。

家と学校とのちょうど真ん中ぐらいの交差点で、僕が真っ直ぐ、

重郎が左にそれぞれ進んで別れた。

家に着いて、早速メンバーにメールしようとして、重大な事実に気付いた。

(誰ともメアド交換しない……)

元々あまり携帯電話を使わない方だから、すっかり忘れていた。情けなかつたが、仕方なく先に久美へと、カラオケへのお誘いとアドレスを訊くメールを送る事にした。その結果、土日は共に忙しく行けないと事だったが、追記として優さんを除く全員のメールアドレスが書かれていた。さすがは、手が早い。全てのメールアドレスを、登録する。

お礼のメールを久美に送つてから、それぞれに明日のカラオケについてメールした。最初に返信して来たのは、佐奈さんだった。

『FROM 佐奈さん』 polan15@neweb.ne.jp

件名：Re：昴です

本文：

奢れ』

なんと理不尽な。フリータイムでも千円ぐらゐの出費になる。

三分の一ぐらいなら持つてもいいけど、と返した。

『 FROM 佐奈さん " plan15@neweb.ne.jp "

件名 : Re : Re : Re : 専です

本文 :

なら行く

現金な人だ。場所と時間は後で連絡する、と佐奈さんへ返信したのと同時に、今度は一件のメールを受信した。

『 FROM 朋絵さん " dstp@neweb.ne.jp "

件名 : Re : 専です

本文 :

信せじやなければ、行けますよ~』

『 FROM 朋絵さん " dstp@neweb.ne.jp "

件名 : 無題

本文 :

深・夜!

酷い変換ミスだ。深夜に及ぶ事はまずないので、お騒ぎになると  
思つけど、と返信する。

『 FROM 朋絵さん " dstp@neweb.ne.jp "

件名 : Re : Re : Re : 専です

本文 :

なら、参加してみます』

時間と場所は後で連絡する、と同じように返信して待ち受け画面  
に戻ると、すぐに今度は電話の着信があった。知らない番号である。

恐る恐る出てみる。

『いえすもしもしー！……あ、いらっしゃ優よ』

「…………え？ えつと？」

『科学的に、あなた達がカラオケに行くといつ情報を手に入れたのよ。いく合法的にね。私も誘いなさい』

盗聴なんてものは都市伝説だと思っていたが、実在するのだろうか。現代社会の闇におののきながらも、特に断る理由も無いので、後で時間と場所を連絡すると言つて、メールアドレスを聞いて電話を切つた。

三連続のお誘い成功に心躍る僕だったが、その後、多香子さん、明菜さん、春花さんと三連敗し、ちょっと氣を落としながら都合の良さそうな時間と場所を決め、全員に連絡しておいた。

明日が楽しみだ。四人ほど不在だが、それでも自然科学部員同士の親交を深めるには、十分すぎる舞台である。

(……よし)

ガツンポーズをしたこの時の僕はまだ、すっかり自分の音痴を忘れ切つたままだつた。

絶好のカラオケ日和なのかは分からないが、目が覚めて部屋の窓のカーテンを開けると、雲一つない青空が広がつていた。今日は土曜日だが、あえて言うなら日曜日っぽい。

約束の時間は十一時、場所はこの辺のカラオケ店舗では格段の安

価を誇る、駅前のジャイカラで現地集合だ。じつくりと歯磨きをして、テレビを見ながらご飯を食べても、十分に余裕がある。

(さうだ、今の内にウォーミングアップしついで)

部屋の中で、着信音にもしている名曲を歌つてみる。そつして、僕は自分の音痴を思い出すのだった。

十一時少し前にジャイカラに着くと、メンバーは既に全員揃っていた。

「遅いですよ～！」

朋絵さんは僕の姿を認めるといつて、すぐ口を尖らせた。私服……ではなく、何故か制服を着ている。

「ごめんごめん。でもほら、時間前だし」

「十分前行動は原則です！」

わざとらしく、腰に手を当てて怒る。その隣で、派手と言ひほどでもない白い服を着た優さんが、溜め息を吐いた。

「あなた、ついさっき来たじゃない？」

「そ、それは、道に迷つただけで……」

「朋絵嬢なら、三十分前行動が丁度良いな」

そう言つて笑う佐奈さんを、朋絵さんが抗議の意を持つて小突いていた。

重郎は、僕の姿を見てすぐに受付に行つてくれていたらしく、それから少しして部屋番号が記されたバインダーを持って帰ってきた。

「一〇五号室だ。一階だな」

何度も来た事がある重郎に案内されて、僕たちは用意された部屋に入った。

一〇五号室は、数字が若いだけあって中はかなり広かつた。十人ぐらい入つても、苦にならない氣がする。逆に、一人や二人で利用するには、広すぎて不便と言う程だ。

先に注文しておいた飲み物が届くまで待つて、とりあえず各自選曲する事になった。

「優さんは、歌上手そうですね~」

手馴れた手付きで電子歌本をいじる優さんを眺めて、朋絵さんが  
言った。

「カラオケなんて、前世ぶりよ？」

「そ、なんですか？」でも、真二先に取られましたよね。それで、

優さんは、思つてゐるよりもずっと危ない人のようだ。そういう内に、一番最初に曲を入れた重郎のジャイアンリサイタルが始まる。

.....

重郎の歌は、中学校の頃から更に悪化していた。

「うつし。まあまあだつたな！」

「もう……かしきり……」

重郎が歌いきつた頃には、僕たちは佐奈さんを除いて全員虫の息となっていた。さつきまでの地獄絵図的な歌とは正反対の、朗らかな効果音と共に、得点が表示される。

音程 : 49% テクニツク : 71 / 100 得点 : 61点

「」

……三分も音が違うから ゼン房の曲みたいにしないで

『 続いて表示された、採点機能からのアドバイス的なコメントには、  
　落ち着いて歌いましょう』とだけ記されていた。とても、正しい。  
次に演奏されたのは、朋絵さんの入れた『TAIFU』だった。

—  
—  
—

『TAIFU』  
どちらかと並んでアルト声の朋絵さんの音域には、一度歌いやすことうだった。のびのびと歌つているような感じがする。

「さつきの後で、天使の歌声に聞こえるわね」「うん。かなりー」

聞いていて心地良い。隣で重郎は、自分が上手いじやないか、  
と言つのような顔をしていたが。

曲が終わり、評価が表示された。

『音程・83% テクニック・83／100 得点・81点』

「……まあまあですか？」

「朋絵嬢は、歌が上手いのだな。そことのとは違つて」

「そこのつて何だよ！」

最近の、利用者に媚を売る事を知らない採点機能が、八割オーバーの得点を出す事はけつこう稀である。大体、七十台後半を上下する事が多い。八十一点は、中々の高得点だ。

ちなみに、コメントは何故か『落ち着いて歌いましょう』だった。

「ほり、朋つちも俺と一緒にじゃねえか！」

重郎の言葉に、朋絵さんがかなりショックそつこへたり込んだ。次に、優さんが選曲した『世代』が始まった。優さんはいつもの声と全く違う、明瞭で真っ直ぐな声で歌い出した。

「~~~~~」

「……やべえ、うめえ」

頑固な重郎が認めるほどの安定感だった。絶対音感でもあるのかと言つほどに、正確に、いく正確に音を繋いでいく。すっかり聞くのに夢中になつたまま、曲は終了した。部屋は、満場の拍手に包まれた。

「褒められるのも、悪い気はしないわね」

優さんも、心地良さうにその拍手を受け止めていた。

その後表示された評価は『音程・89% テクニック・75／100 得点・84点』、コメントは『ビブラーートを意識してみましょ。こぶしを利かせるのも更なる高得点への道です』だった。

「優姫は万能だな。ネギのようだ」

「それは嫌な喩えね……」

次はいよいよ……僕の番だ。曲は、『世界に溢れている花』。好きな曲よりも、まずは自分が何とか歌える曲を選んだ。好きな曲はどう頑張っても上手く歌えそうにない歌い出しじゃつともたついたが、ノリ始めるとななりに歌う事が出来た。

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

「

れたコメントは『落ち着いて歌いましょう』だった。

「……それで、佐奈さんは歌ってくれないの？」

「ああ。歌つてあげない」

「気にしないし、歌つてよ」

何度か誘つたが、佐奈さんが電子歌本を手に取る事はなかつた。  
無理強いも出来ない。

「じゃ、一周目だな。つまりは俺だ、俺だ、俺だーー！」

地獄のジャイアンリサイタル・リターんが始まり、僕たちはまた阿鼻叫喚の中に突き落とされていくのだった。

「…………あー…………喉痛え…………」

うなだれる重郎を先頭に、五時間ほど歌い尽くした僕たちは店の扉をくぐつて外に出た。

最初に歌つた時の雰囲気通り、優さんの歌は華やかではないものの正確で、一番上手だった。音程だけを見ると、正確さが九割を超えている時すらあつたほどだ。ただ、結構な数を歌つたと言つのに、ずっとノンビリートで通していた当たり、カラオケが初めてだと言つのも本当らしい。

「私は耳が痛いがな」

結局、五時間の間一曲も歌わなかつた佐奈さんが、耳を押さえる

振りをして言う。何度も歌うよう勧めたのだが、三分の一も持つて貰うのだから、と言つて譲らなかつた。終始楽しそうだつたから、本人が良いなら構わないのだが。

「あの電子本……何とかして持つて帰れないかしら……はあはあ」  
「そんなに気に入つたんです?」  
「当然よ!……あのサイズでの動作速度……通信速度も申し分なかつたし……はあはあ」  
「変態だな。優嬢は」

全くの同意見だ。あと、そんなに先端技術でもない気がする。駅前から少し歩いた所まで、今日のカラオケの出来について皆でわいわいと喋り合い、そこで別れて解散となつた。

家に帰る途中、久美にメールをしてみた。が、返信は夜になつても来ないままで、少しだけ寂しくなつた。

日曜日。特に予定もなく、誰からメールが来るという事もなかつたので、そこそこふんだんにあるお金を持って、町を出歩いてみることにした。

スーパーの登場で段々と廃れつつある商店街に入る。シャツターキ商店街と言う程ではないが、昔からある駄菓子屋さんや八百屋さんが数を減らし、薬局や理髪店が多く入つて来た分、昔ながらの商店街とは言えなくなつていた。

いくらか考えて、アニメートに入る。アニメートは、主にアニメや漫画・ライトノベルのグッズを取り扱うお店で、業界ではそれな

りのシェアを持つ大手だ。

『／＼』

マイナーな電波ソングが店内BGMで流れ続けるのも、このお店の特徴と言つて良い。今流れている『one - s teacher』は、入門編程度の電波ソングながら、僕を含めて一般人には、歌詞の意味すら分からぬ。とは言え、その道を極めた人に言わせれば、歌詞が聞き取れる間はまだ電波ではない、のだそうだ。

今放送しているアニメで詳しい物は一つしかなかつたが、その後ズはどこを探しても見つからなかつた。唯一、雑誌の付録にそれらしい物がある程度である。

(仮様の日記帳、不人気なのかな)

僕自身、ここ一回ほど見逃しているのだが。他にも言つて日を引く商品もなかつたので、アニメマートを後にした。

そのまま少し歩いていくと、見覚えのある小さな服が、商店街の路地裏に入るのが見えた。どうせなので、追いかけてみる。

路地裏で立ち止まる後姿を見て、誼絵ちゃんだと確信し、後ろから驚かそうと思つて手を伸ばすと、誼絵ちゃんは思わぬスピードで僕の腕を掴み、強く捻つた。

「い、痛い痛い。」「めん」「めん、僕だよ  
「ああ、ごめんなさい。……ちょっと、匿つて貰えますか？」  
「え？」  
「鬼ごっこ」してゐんです

僕が答える前に、誼絵ちゃんは僕の背中に隠れてしまつた。路地裏だからかなり狭く、誼絵ちゃんが完全に隠れる為には、かなり密

着する必要がある。まだ小さいとは言え、女性に耐性の無い僕にとっては心房細動にまで繋がりかねない危険な状態だ。

その上、あまり人気のない路地裏なのに、こんな時に限って多く人が通りかかって来るので、誼絵ちゃんは長い間僕の背中にしがみ付いていた。

「……ありがとう」やれこおした

よつやく、誼絵ちゃんは僕の背中から一歩離れた。

「ん……。子供は通りからなかつたけど、誰と鬼ごっこしてたの？」

「秘密ですー」

誼絵ちゃんはもう言つて、一度お辞儀するとどこかへ走り去つてしまつた。

子供は元気だなあ、と思ひ。口羅田でも走ろうとしたが止まられるのは、多分中学生の最初の頃までだ。僕のようなイングアッ子となれば、小学校高学年の時点では既に、口羅田は半引きこもり状態だつた。

(……ノートでも買って帰る)

ちよつとだけ意氣消沈した僕は、近くの町田ショップで何冊かノートを買って、真っ直ぐ家へと帰った。

月曜日の朝。携帯電話を開いて真っ先に、久美にメールを送った。思えば、金曜日の夜から今日に至るまで、こちらが何度メールを送つても、一向に連絡がなかつた。自惚れているのかも知れないが、三日連続で音沙汰がないと言つるのは、結構珍しい事に思える。ちょっとだけ心配だつた。

家を出る。どこか急いでいる自分を感じつつ、学校への最短距離を進んでいく。今日は、朋絵さんにも会わなかつた。いつもより三分ほど早く教室に着いて、携帯電話を開く。返信はない。

(珍しいなあ……)

何曜日のどんな時間でも、すぐにメールを返して来るのが久美なのに。そう思つてゐる内に人が揃い始め、一学期最初の授業が始まつた。

「えー。化学とは、えー、物質を扱う授業です。えー。これに対し、えー、物体を扱うのが、物理の、えー、授業です」

化学の先生の授業は、一言で言つて眠たかつた。声質もさる事ながら、毎度区切りごとに入る『えー』が、子守唄のような効果をもたらしていた。

大半の生徒があくびをし、一割ほどの生徒は一時間目から机に突つ伏して寝に入つてゐる。その点佐奈さんは普通とは違い、真つ直ぐ黒板に向き合つたまま不動の体勢で目を閉じ静かに眠つていた。

「……と、言つ事で、えー、次の時間から、えー……。原子量について、学びます。以上」

やつと一時間目が終わる。重郎などは、腕に自分でシャーペンを突き刺す事で、何とか一時間目からの快眠を避けたようだつた。

一時間目、二時間目、四時間目と順調に終わり、お昼休みになる。僕は、朝の不安を先に消そうと、一組へ行ってみた。久美の姿はなかつたが、幸い春花さんが居たので、声を掛ける。

「春花さん」

「わおう！ ビックリしたー。何々？」

「久美、どこに居るか分かる？」

「んー……家かなあ？ 今日休みだよ、久美ちゃん」

ああ、なるほど。悪い風邪にでも当たって、寝込んでいるのか。返信がなかつた理由まで、全ての辻褄が合つた気がした。

「そつか。ありがと」

「看病にでも行つてあげたら喜ぶと思つよ、幼馴染さん」

これまでの明るすぎる口調とは違い、落ち着いた雰囲気で春花さんが言う。僕は大いに頷いた。

六時間目後のホームルームを終え、焦る心を抑えながら初めての掃除を言葉少なにちやちやっと済ませ、僕は小走りで化学実験室に向かつた。先に待機していた優さんに事情を伝え、今日は先に帰ると言つた。

「分かったわ。明日は顔、出しなさいね」

「うん。じゃ」

挨拶も最低限に止めて、さつさと化学実験室を出た。

学校から久美の住むマンションまでは、川を挟んでいるもののそ

う遠くはない。自然が多く、目に入る光景の一割は緑と言つような道だ。美味しい空気をいくらか吸い込みつつ、ゆっくりとマンションまで歩いた。

久美のマンションのセキュリティ・システムは、オートロックのような素晴らしいシステムを採用していないらしく、フリー・パスでエレベータまで辿り着く事が出来た。無用心だ。六階で止まっているエレベータを呼び出し、五階まで上がる。

やがてエレベータのドアが開き、五階のフロアが視界に入った。僕は、目を疑つた。

「……く、久美？」

久美が一人、四階にある突き出した休憩所の、屋根に立つて向こうの空を見ていた。屋根には、仕切りもなければ手すりもない。足を滑らせれば、五階から転落する事になる。落ちる先は、一階エントランスの屋根の上だ。

僕の言葉に反応して、久美はこちらを振り向いた。その久美の頬には、既に何滴もの涙が伝い、その涙は服の首元を冷たく濡らしていた。

「昂……すばるつ……」

鼻声で、久美は僕の名を呼んだ。どうして、そんな所で泣いているんだ。それじゃあ、まるで……。僕は、屋根の上とこちらとを分ける高い金網の前に走つて、金網の間から手を伸ばした。

その時。久美は何を思ったのか、一瞬、涙の中に笑みを浮かべて見せた。

「久美！」

叫んで、金網をよじ登ろうと手をかけた。嫌な予感がする。大きな音が立つのも気に留めず、懸命に登った。

その僕の目の前で、久美の体が大きくひずんだ。僕が、声を上げる暇もなく、次の瞬間久美の体は高く宙に舞い、やがて僕の視界から消えていった。

……。

緊急治療室の前で、久美の両親は共に青ざめた顔をしていた。部屋のランプが消え、中から出て来た医師が、静かに首を振る。僕も、重郎も、そして久美の両親も、全員が声を上げて泣いた。

色々な事を聞かれた。久美が飛び降りる前の動作について。学校生活について。久美が抱えていた悩みについて。全て、記憶が朦朧としてはつきりしない。僕は、曖昧に答える事しか出来なかつた。呆然とした心のまま家に着く。事情を聞いたらしい両親は、無言で僕を抱きしめてくれた。また泣いた。

夜の十一時頃になつて、ようやく冷静さが戻つて來た。無力感と罪悪感、そして猛烈な虚脱感に襲われた。氣だるかつた。ベッドに入れる気力もなく、僕はリビングのソファで一人座つていた。

十一時半頃、日が替わる前になつて、誰かが家を訪ねて來た。両親は僕を気遣つて先に布団に入つていたので、仕方なく僕が出た。誼絵ちゃんだつた。誼絵ちゃんは事情を知らないらしく、それなりによく分からぬ事を僕に話し続けた。冷静さが失われ、苛立つて、怒鳴つた。誼絵さんの表情が変わつた。

「……目が覚めて、不思議な事があつたら私の所に来なさい」

それも、意味が分からぬ。誼絵ちゃんは、そのまま帰つて行つた。

今更、目が覚めなくとも、不思議な事は嫌と言つぽぢあつた。何故、久美が身を投げたのか。投げなければならなかつたのか。いや、そうではない。今の僕にとって、一番不思議なのは、もつと単純な部分。

久美が、何故居ないのか。

玄関に座り込んで、僕は泣きながら目を閉じた。

## 野木久美？・後

はあっ、と溜め息が聞こえた。

「見た目中々丁寧な設計図だつたから、何かあるかと思つたんだけ  
ど……無かつたわね。とんだガ設計図よ。この装置、後で同じ山に  
埋めておく事にするわ」

閉じていた目を開く。眩しい光が、脳に刺激を与えた。

僕は、化学実験室に居る。皆も居る。見覚えのあるダンボールの  
装置が、田の前にある。

「今年分の予算使い切つたのに……腹立たしいわ

優さんが、怒りをあらわにしながら苦々しく言い捨てる。見た事  
がある光景だ。

「ねえ、今日つて何曜日だっけ？」

「あ？…………おい部長さんよお、この装置なんかヤバかつたんじゃ  
ねえか？」

「…………こんな事もあるわよ、ええ。今日は金曜日よ」

「…………金曜日かあ」

明らかに何かが、間違っている。間違っているが、何が間違つて  
いるのか分からぬ。

記憶はかなりまだで怪しかつたが、徐々に明らかになるに連れ、  
久美が死んでしまつた事だけは思い出した。涙が、また何粒も溢れ  
出できた。

「……優姫。いついつ場合の損害賠償がいくらになるか、知っているか」

「ど、同意の上だもの、私に責任はないわ、ええ」

久美が、死んだ。それは確か、月曜日の事だ。それなのに、今は金曜日だと言ひ。そもそも、僕は家で寝たのではなかつたか？

そして、朦朧とした記憶の中で、一番最後に聞いた言葉を思い出した。

「……誰か、朋絵さんの家、知らない？」

まずはその言葉通りにしよひ。少なくともその言葉は、今の状況を的確に表しているのだから。僕は涙を拭つた。

朋絵さんの家の場所は、明菜さんが知つていた。学校から十分ほど歩き、中々に大きな一軒家に辿り着いた。表札には、津田、と書かれている。

ためらわずに、呼び鈴を鳴らす。しばらくして扉が開き、朋絵さんが出てきた。

「どうしたんです？ 何か、連絡事項ですか？」

「誼絵ちゃんに会いたいんだ」

「はい？ ……よく分からないんですけど、ちょっと待つて下さい」

朋絵さんは不思議そうな顔をして中に戻つて行く。  
しばらくして、誼絵ちゃんが一人で出て來た。

「はい、私に何かご用ですか？」

「え……と

言葉に詰まってしまった。どう聞えれば良いんだろうか。

「不思議な事があつたら、会いに来いつて誼絵ちゃんに言われたんだだ

結局、微妙な言葉選びになってしまった。

誼絵ちゃんは最初きょとんとしていたが、段々と表情が硬くなり、やがて僕に、中に入るようになに言つた。言われるがまま、僕は家の中に入り、誼絵ちゃんの先導に従つて奥の誼絵ちゃんの部屋へと入った。

「ありのままに、話して下さい。何があつたのか。今どんな状況なのか

「だから話すべきか迷つたが、僕は入学の時から今に至るまでの記憶を、覚えているだけ全部、つぶさに語つた。久美のこと。重郎のこと。シャウト校長のこと。自然科学部のこと。変な装置のこと。カラオケのこと。久美の自殺のこと。誼絵ちゃんが深夜に僕の家に来たこと。そして今、不思議な事に曜日が戻つてしまっていること。全て話した。三十分ほどの間、誼絵ちゃんは顔色一つ変えずにそれを聞いていた。

「……やっぱ友人を亡くしたのね」

誼絵ちゃんの口調と雰囲気は、記憶の最後にある誼絵ちゃんのそれと、全く同じだった。明らかに、子供のそれではない。

全て聞き終わった後、誼絵ちゃんは大きく溜め息を吐いた。

「状況は分かつたわ。原因も明らか。聞く?」

「え……うん」

「その装置、いわゆる禁忌の技術によるもの。具体的な説明はややこしいから省くけれど、とりあえずループしている」

「ループ?」

「うう。よく漫画とかアニメであるじゃない。ある時間からある時間までを、永遠に繰り返す」

一笑に付す事は出来なかつた。今経験しているのは、確かにそういう現象だ。

「その装置、まだ学校にあるなら、ループは改善出来るかも知れない」

「……『メン、全然分かんない』や」

「縦線を一本想像してみて。それが時間軸。人や生物、物質はそこにあつて、時間軸が手前に引かれ続ける限り未来方向へと進んでいく。ここまでは良い?」

「……まあ」

分かつたような分からなかつたような……謹絵ちゃんの年齢も相まって、質の悪いアニメの設定にしか聞こえない。

「今私達は、その装置によつて生み出された、別の縦軸、二つ目の縦軸に居るのよ。この二つ目の縦軸が不完全だから、ループする」

「うん……うん」

言つている事は分かるが、それが実際に起つていてと言われる途端に分からなくなる。起こる筈がない、と思つてしまつ。だが確かに、この金曜日を経験するのは一度目なのだ。

「……やっぱり納得は行かないけど、一応分かつた事にする  
「仕方ないわ。実際、絵空事のようだから」

誼絵ちゃんは、上品に笑つた。決して、子供らしくはない。

「とにかく、その装置を何とかするのが最優先  
「何とかなるの？ そんな、無茶苦茶な装置……」  
「私ならね。……私は、特別な人だから」  
「え？」

少し言いよどんだのが気になつて、僕はその意味を訊ねた。

「……一分が七分に感ぜられる。一日が、一週間に感ぜられる。この十三年間で、私は九十一年分の知識を得た」  
「ええと。え？」  
「パソコンで言えば、七倍の速度を持つCPUが搭載されているのよ」

頭の回転が良いとは聞いていたが、七倍ともなると相当である。今あるパソコンのCPUが七倍働くようになれば、素晴らしいソフトウェアが増えてくるに違いない。

「証拠は？」  
「私は世界のあり方を知っている。それは、ループする前にあなたに忠告した、という所で証明されている。私にはその記憶、ないのだけれど」「……確かに」

普通の中学生が……いや、普通の人であっても、世界がどのよう  
に存在しているかなど、知る由もない筈だ。それが正しいかどうか

は分からぬが、少なくともループしている事に気付いていたらしいのは、誼絵ちゃんしか居ない。何らか、特殊なのだ。

「でもどうして、そんな事が？」

「それは分からない。私も、知りたくて仕方ないのだけれど」

理由は無く、ただ誼絵ちゃんが人よりも数倍頭が回るといつ事実だけが存在している。それは実際の所、かなり不可解な事だった。だがどちらにせよ、彼女を信じない事には話が始まらない。

「じゃあ、誼絵さんで」

「受容力があるわね。……ループは取り消す事が出来るけど、それでも一つ目の縦軸と言う事に変わりはないわ。とても不安定。壊れたら、どうなるかは分からない」

「ん……難しい話は良いや」

複雑に過ぎる。と言つか、聞けば聞くほどに、漫画の話としか思えなくなつて来る。

「そう?……ああ、その久美って子、まだ救えるわね。折角ループしたのだし」

「……おおー」

突然見えた光明に、思わず声が上がった。

久美を、救う事が出来る。他ならぬ、僕の手で。手から零れ落ちていってしまった大切な物を、もう一度掴むチャンスがあるので。

「優さんに感謝しないと」

「禁忌、だけどね。マジドなサイエンティストには違いないわ」

「そうかなあ……」

混乱したので、御歳九十一歳の誼絵さんに簡単にまとめて貰つた。曰く、優さんの作った装置によつてループするパラレルワールドに入っちゃつた。誼絵さんが良い感じに修復してループしなくするけど、それでも不安定で壊れたらどうなるか分かんないや。でもまあ気にして仕方ないので、この際ループをありがたがつて久美を助けちゃえれば良いんじやないか。だそうだ。

「凄くよく分かりました」

「……なら、お行き」

追い立てられるようにして、僕は朋絵さんの家を後にした。

久美のマンションへ、途中まで走つて、ある時気付いて久美の携帯に掛けながら向かう。電話は繋がらない。電源は切られていないようだが、何度掛けても留守番電話センターに繋がるばかりだ。

マンションに着いて、エレベーターで五階まで上がる。月曜日……明々後日の月曜日の事が、フラッシュバックされて僕の不安を煽つた。見えたその景色に、久美が居たらどうしようか。

当然の事ながら、エレベータが開いても久美の姿は見えなかつた。ほつ、と胸を撫で下ろしてから、五〇三号室の前に立ち、呼び鈴を鳴らした。中でドタバタと足音がして、すぐにチャーン越しに扉が開いた。

「……どうり様かしり」

出たのは、中学校の頃の授業参観で一度だけ見かけた事のある、久美の母親だつた。出来るだけ声を落ち着かせて、言つ。

「えと、久美さんの友人の、武田と言います。久美さん、居ます？」

「武田さんね。『ゴメンなさいねえ、久美、まだ帰つてないのよ』」

申し訳なさそうに、久美の母親は肩を竦めて見せた。僕はお礼を言つて、帰つて来たら連絡するように伝えて貰う事にした。

「あの子、深夜までどこかに出掛けている時もあるから、深夜になるかも知れないけど……」

「それでも構いませんので、是非」

「ええ、分かつたわ」

快諾してくれた。恐らく、携帯電話を家に忘れていたとか、着信音が聞こえないほどのカバンの奥にしまい込んでいるとかだろう。だがあるいは、電話に出たくない理由があると言う事かも知れない。もしそうなら、久美は家に帰つても、僕に電話をしてくることはないだろう。

となれば張り込みである。コンビニで安いお弁当を買い、五階と六階を繋ぐ階段に腰掛けて食べた。お腹を満たしたら、今度は家に電話を掛け、今日は友人の家に泊まる、と伝えておく。

そして、階段に座り込んで、久美の帰りをじつと待つ。最悪の場合でも、久美は月曜日のあの時間に、ここに現れるのである。それまでは、待つていようと思つた。それでとりあえず、僕の手の届かないところで久美が居なくなってしまう事は防げる。

(……)

あの時の久美の様子を思い出す。

泣いて、休憩所の屋根に一人立つていた。僕に気付いて、振り向いて一度僕の名を呼び、そして笑つた。それから、また向こうを向

いて、飛び降りた。

残念ながら、自殺以外の目的が見つからない。やはり、止めなければならないのだ。

(……)

昨日の夜……月曜日の夜に流し切ったと思っていた涙が、また溢れ出てきた。今日一度目だ。豪放な久美がそれだけ思い詰めていたのに、気付く事も出来ていなかつた。それどころか、最近はむしろ元気になつたと、喜んでいた。そして、飛び降りるのを止める事すら、出来なかつた。

手で押さえて指でほぐしても熱い涙は中々止まらなかつたが、ひとしきり泣いた所で泣き疲れてそのまま眠つてしまつた。

「……るさん、昂さん？」

声を掛けられて、飛び起きる。いつの間に来たのか、朋絵さんと誼絵さんが僕を覗き込むようにしてみていた。その後ろからは、オレンジ色の陽が差し込んで来ている。

「はあ、探しました」

「ん。どうして？」

「久美さんが自殺するかも知れないんですよね？」

ハツとして、誼絵さんを見た。誼絵さんは、最初に会つた時のよう年相応な表情をしている。僕の視線に気付いてか、口を開いた。

「もう一つの件は、上手く行きました」

「……ああ。良かった」

ループが云々と言つ件だ。いつ言つのもアレだが、今の所どうでも良い事だ。むしろ、このまま久美がここに帰つて来ず、別の所で死んでしまつたら……と考えると、まだループしていた方がありがたい。

誼絵さんは続いて、朋絵さんの死角で、その事については伝えていない、とジエスチャーで伝えて来た。

「もう一つの件？」

「別件だよ。……それより、ありがとう。久美の事」

「友達ですもん」

久美が隠しておきたい事実が出てくるだらうから、皆には秘密にしておきたかった。だが、朋絵さん一人ぐらいなら、この際良いだろう。もう一度、深く感謝した。

「それから、天才誼絵も連れて来ましたよ~」

「今の状況を、省かず余さず全て話して下さい~」

どうやら誼絵さんは、朋絵さんに対してあの達觀した口調と言つか、第一の性格は見せていないようだつた。わざわざその事を追求しても何の意味もないのに、気にしない事にする。

誼絵さんと朋絵さんに、ここへ来てから今に至るまでの一部始終……といつてもこれと言つた進展はなかつたのだが、全てをつぶさに語つた。二人とも相槌だけ打つて反応を示さずに居たが、全部聞き終わつて誼絵さんが口を開いた。

「……お姉ちゃん。何だか喉が渇いちゃいましたー」

「あ、はい。何か買つてきます~」

誼絵さんの意図を察して、朋絵さんが階段を駆け下りていく。ち

「と申し訳ない気持ちになつたが、新しい縦軸だのループだのと言つ話を聞かせる訳にもいかないから、仕方ないと割り切るほか無い。」

「そうね。まずは携帯電話の所在から考える」

誼絵さんの雰囲気が変わつた。一重人格と言つよつは、こちらが本性と言つ感じである。あつちは、さしづめ仮面と言つ所だらうか。

「一回田の金曜日、あなたはその子とメールをした。なら、今日の時間には、その子は携帯電話を持っていたと言つ事になる」

「うん」

「母親の話を信じるとすれば、その子は今日家に帰つていない。つまり、一回田の金曜日にも、家には帰つていなかつたはず」

「……うん」

「なら今、その子は携帯電話を持つていなればならぬの。なのに、電話に出ない。電源が切れている訳でもない。これは、明らかにおかしい」

言われて見れば、不可解だつた。冷静になつて考えれば、すぐに導き出せたであらう不可解さを、今まで全く気付けなかつた。誼絵さんは、更に続ける。

「と、すれば、電話に出られなくなるトラブルに巻き込まれたと言う事になる。それも、自殺してしまつまびのトラブル、そして周囲に知れ渡らないほどのトラブルに」

「……強姦とか？」

「あり得るわ。だけど現実的に言つて、電話が繋がらなくなつた頃……當時ね。當時に、そんな場所を通りかかる事はまずない。そんな行為に及ぼうといふ者もそうは居ない」

それもそうだ。しかし、そうなると……。

「……トラブルに巻き込まれようがない?」

「ええ。そして、大きなトラブルには巻き込まれず、ちょっととした事で連絡が出来なかつたなら、土曜日や日曜日に連絡があるべきだつた。つまりは、少なくとも金曜日から日曜日まで、携帯電話が使えないくなる理由は続いていたと言う事ね」

携帯電話を持ったまま外に居るのに、僕と連絡がつかない。電源は入っている。大きなトラブルに巻き込まれたとは考えにくい。なのに、携帯電話は日曜日の終わりまで使えなかつた。

……全く分からぬ。そんな僕を見て、誼絵さんは訊いた。

「あなたの中のその子は、どんな子なの?」

「え……っと。活発で、明るくて、外向的で……って言う感じかな」

「そんな子が、深夜徘徊なんてすると思ひ?」

……。深夜徘徊をする理由も、徘徊する悪仲間も、久美にはない。深夜まで帰つて来ない事が度々あるとすれば……いや、そうじやない。そつちじやない。

久美は深夜徘徊なんてした事がない……? 久美の母親は、嘘を吐いている? 久美は今でも、家に居る? それを隠して、連絡さえさせない理由は……?

「久美は、虐待を受けている……の?」

「その可能性が一番高いと思つ」

学校では、そんな様子はなかつた。だが、幼稚園の頃から今に至るまで、久美が両親の話をした所を見た事はない。ずっと同じクラ

スだつたのに、両親が授業参観に来たのは、中学校の頃のあの時だけだつたのではなかつたか。

間違ひない。全ての状況証拠が、久美の被虐を認めている。

「けれど、絶対とも言い切れないわ。あとは、あなた次第」

誼絵さんはそう言つと、後ろを向いて「こちらに背中を見せた。

「私はそろそろ帰る。他にも、色々と用事があるから」

「うん。……ありがとう。結局、全部任せちゃつたけど」

「そうでもないわ」

小さい背中をこちらに向け、誼絵さんはエレベータの方へと歩き去つて行つた。

誼絵さんと入れ替わりで、朋絵さんが階段を上つて來た。腕には、三本の缶ジュースが抱えられている。

「あれ、帰つちやつたんですね？ 一本、余つちやいますね」

余らせるものか。僕はそう、強く思つた。

久美が虐待を受けていると云つ事を、一連の事と関連付けて朋絵さんに話した。一回目の金曜日についてだけは、話す訳にいかないので話さなかつたが、朋絵さんは大体を理解してくれたようだつた。虐待防止センター、と言うような所に連絡はしたが、本人からの連絡ではない事もあり、訪問調査は明日の午後以降になるようだつた。勿論、それまで待つてゐる気は無い。明日にはもう、久美が帰つて来れなくなるかも知れないのだ。

(……?)

一瞬、何か違和感を感じる。だがそれも、それと同時に鳴り響いた携帯電話の着信音に搔き消された。

慌てて開いて、ディスプレイに表示された名前を見る。送り主は……滋野重郎。

「もしもし。何?」

『話は聞いてんぜ。突入すんなら、俺も混ざるよ』

誼絵さんが上手く手を回してくれたようだった。何から何まで、本当に頼りになる。

『今一階に居るからよ。いつでも呼んでくれ

「じゃあ、今すぐお願ひ

『了解!』

一二三分で、重郎はエレベータから降りて来た。簡易に事情を説明し、突入して久美を連れ出す計画を練った。計画と言つても、みすばらしい物だ。強引に入つて、強引に連れ出す。強行作戦である。行動は、早ければ早いほど良い。久美の苦しみは、早く取り除かなければならない。僕たちは扉の前に立つて、呼び鈴を鳴らした。さつきと同じようなバタバタ、という足音と共に、扉が開く。

「……あら、さつきの方。久美はまだ帰つてないけれど……  
「いえ、今回とはちじやないんです」

僕の言葉が終わるや否や、扉の陰に隠れていた重郎と朋絵さんが、扉を強く引っ張った。僕は急いで、チーンに手を掛け、外そと

力を込める。久美の母親も、すぐに僕たちの意図を悟つて、ドアノブを持つて後ろに体重を掛けたが、重郎と朋絵さんの力に届かず、扉は動かない。次に僕の指を狙おうとしてか、ドアノブから手を離したのと同時に、チエーンが外れた。

朋絵さんが扉を全開にして、重郎が母親を突き飛ばして中へと走つていく。僕もそれに続いて、廊下を進んだ。ダイニングらしき所へ入ると、久美の父親らしき男が呆然と立っていた。

「おい！ 久美はどこだ！」

「…………」

男は黙つて、奥のふすまを指差した。重郎と僕が、横一線になつてふすまへ向かい、勢いよく開ける。中には、久美の姿があつた。だがもう一人、男が居る。

「うつせーな……あ？ ガキ。んなとこで何しとんじゃ」

「久美を連れ出しに来た！」

「そーか、んじゃ無理だからよ。早く帰れや」

どうやら、この男が主犯のようだった。久美は口をガムテープか何かで塞がれ、それでも僕たちを見て、目と唸り声で逃げるよう伝えている。

この男が久美の父親なのか。しかし、だとすると、さっきの男は一体誰だ。

「あん？ サッサと帰れつづーのが、分かんねーのか？」

男の声に耳を貸さず、僕は冷静になるよう努めた。まずは先入観を、取つ去る。そして状況を並べ直す。客観的に見て、今の状況は……。

「重郎」

「……ああ。さつきのが父親さんだな」

理由にまでは行き着けないが、恐らく今日の前に居る男は、久美を人質に取つてここに居るのだ。

全く話を聞かない僕たちに激昂して、男はナイフを出した。こちらに向けるのかと思ったが、男はそれを久美の目の前へと持つて行つた。

「帰れつつてんだろうが、ガキ！　舐めてつと女が痛い目遭うぞ？  
あ？」

「……どうする、昴」

「……大丈夫」

僕がそう、小声で重郎に言つたのとほぼ同時に、僕たちと男が対峙している脇にあるふすまが勢い良く開き、そこから飛び出て来た朋絵さんが、男に突進した。男は突然の事に驚き、ナイフを朋絵さんに向ける。僕たちも、今だとばかりに男に飛び掛つた。

「久美さん！　早く！」

最初に飛び込んだ朋絵さんが、揉み合いの中しつかりと久美の腕を掴んで男から離れる。そのまま、僕たちのせいで軽く腰を打つたらしい久美の母親の下へ走つた。

「チツ！　鬱陶しいガキ草どもが」

だが、僕たちは、男を押さえ付け切れなかつた。僕と重郎一人がかりでも、男の力は数段強く、気が付けば僕たちは一人とも、男に

うつ伏せで寝かされていた。

「大層な事やりよつたのぉ、あ？ 楽には殺さんぞ」「うー。」

逃れよつと、暴れる。だが、男の力には抗し切れない。段々と、ナイフが首元へと近付いてくる。僕は、目を閉じた。

ダーン！

その瞬間、聞いた事もないような轟音が、部屋中に広がった。

「し、素人がチャラチャラんなモン出すんじゃねえ！ 殺すぞ！」

僕の上で、男がかなり戸惑いながら、誰かを罵っていた。前を見る。そこには、アニメで見るような拳銃を構えた、さつきの男……久美の父親が立っていた。

「怪我はない？ 君たちが時間を稼いでくれたお陰だよ」

「早う下ろせや！ 早うせんと、こいつらの命はないぞ！」

再び、首元にナイフが突きつけられる。だが、久美の父親は柔らかく笑っていた。笑いながら、男に言った。

「チャカ力野木つて言つたら、有名なつもりだけね」「んあ？ ……。……マジっすか？」

乱暴な口調だった男が、突然シヨンとなつた。ナイフが勢い良く外され、体が自由になる。僕は重郎と、顔を見合せた。

「出でつて貰えるかな、とりあえず。話は今度、ゆつくりと聞くからさ」

「へ、へへ……〔冗談はよしてくださいせえよ……〕」

男はナイフを鞘に戻して、ゆるゆると力なくふすまを通り、少しして玄関で音を立てながら出て行つた。

残つた久美の父親は、拳銃を右手に持つたまま久美に駆け寄り、その頭を優しく撫でて、僕たちに言つた。

「今日はとりあえず、帰つて下さい。久美は大丈夫ですから。……これは水鉄砲ですし。音は、あのスピーカーです」

引き金を引かれた拳銃から、勢いよく水が飛び出した。その背景には、学校にあるような大きなスピーカー。大それた装置だ。僕たちは、大人しく帰る事にした。

「……あ、久美。ジュース、置いとくね」

帰り際、思い出して僕は、350㎖のジュース缶を一つ床に置いていた。

「……ヤクザ者が家に乱入、娘を人質に取つておいて何の要求もせず。しかも、その娘の父親は地域の組の幹部で、ヤクザ者はそれを知らなかつた。……奇怪な話ね。辻褄が合わなすぎる」

僕の部屋のベッドに座り心地悪そうに腰掛けて、誼絵さんは言った。本当なら前に訪ねた誼絵さんの部屋で話すのが一番だったのだが、今日は何かと都合が悪いらしく、仕方なく少しだけ掃除をした

僕の部屋に招待したのだった。

「まず、ここの辺を仕切っている組の幹部の家だと言つ事ぐらい、調べずとも分かるはず。それから、家に立てこもった目的も不明。謎だらけ」

「八方上手く収まつたんだし、良いんじやない?」

「……とてつもない能天氣ね」

幼い少女を、ただ一人だけ部屋に上げるに当たって、まず両親からかなり白い目で見られた。自分でも、客観的に見てかなりよろしくない事をしているのは、よく分かる。だが、目の前に居る少女の声は、幼いそれとは全く似通つてはいないのだ。

全ての決着がついてホッとする僕を見て、誼絵さんは溜め息を吐いて言つた。

「あえて言わなくとも良いのだけど……。本当に、何の疑問も感じないの?」

「えー。うん」

「……人質に取られたその子が、何故自殺したのか。あなたには、見当がつく?」

……ああ、そう言えば、それは今もって謎だ。人質になつた状態から、何をどうすれば自殺と言つ事態に陥るのだろう。

「色々あつたんじゃない?」

「……短慮ね。私も、簡単に虐待だと決め付けたのだから、言えなけれど」

予想が外れたのは久しぶりだと、誼絵さんは笑つて見せた。実は、今日の今日……日曜日に至るまで、誼絵さんの話は六割ぐらいしか

信じていなかつたのだが、今日様々な事を試してみて、信じざるを得なくなつた。

まず、高校数学は理解しているだけでなく、解くのも非常に早かつた。英語も上手い。そして、カードゲームも恐ろしく強かつた。今日初めて知つたはずのルールを、巧みに利用して来たのだ。

「はあ……凄く疲れたのに、明日から授業と思つと心が萎むなあ……」

「一時間以上は眠れるんでしょう？」

「あー……まあね」

あの授業をまた受けるのか。ちょっとだけ憂鬱になつた。

「あ、そつと音えれば、飲む？」

手提げのかばんから、赤いプリントが特徴的なルーラ・コーラ・ジューースを取り出して、誼絵さんに手渡した。少しづぬくなつてしまつたが、まあ飲めなくはないだらう。

だが、誼絵さんはコーラに手をつけることなく、床においた。

「ごめんなさい、コーラは苦手」

「そつか。美味しいんだけどなあ」

僕は缶を捕まえてプルタブを引き、口を一杯にコーラで満たした。

月曜日、最初の昼食は、学食で思つたほどひの苦難もなく手に入れ

たカツサンドを持つて、一組へと走った。金曜日に会つた以来、電話やメールで連絡し合つたりはしたもの、直接会つては居なかつた。今日は、久しぶりに久美に会える日なのだつた。

同時に、誼絵さんが感じた違和感、そして僕があの時に感じた、今では何なのかよく分からぬ違和感が、心にずっと引っ掛かつてもいた。つまり、他に何か自殺する理由があつたとしたなら……。今日は朝から、そんな悪夢を見た。

とは言え、そんな事は万に一つもありえないと分かつてもいた。今日の朝も、電話まで掛けて來たのだ。

「久美ー？」

名前を呼びながら、一組の部屋中を見回す。かなり恥ずかしい行為だとは分かつていたが、早く久美の顔が見たい僕にとつては、些細な事だつた。

「ありや。スバちゃんじやん。何々、どうしたの？」

前と同じように、先に春花さんに話しつけられた。嫌なデジヤヴを頭から振り落つて、久美の居場所を尋ねる。

「さつき、スバスバと重郎に会いに行くんだけーとか言つて、七組に行つたよ？」

「すれ違つちゃつたのかあ……。ありがと、七組戻るね」

「きひひ、恋悪いですなあ。うつし、面白そつだし、あたしも行く行ぐう」

「るるるるお供が出来てしまつた。でもとりあえず、今日は学校に来ているらしい。まずはとりあえず、安心した。

階段でも廊下でも所構わず、恋悪いですなあ、青春ですなあ、と

繰り返す春花さんを何とか落ち着かせながら、一組へと向かつた。今日見た悪夢のせいでいくらか寝不足だつたが、進む足は勢いがある。

あと少しで一組の教室、といつ最後の曲がり角で、今度は優さんに出会つた。

「……科学的に、何か一人だけハブられそうな流れを感じたわ。私も誘いなさい」

「超能力者？ テレパシー持ち？ 優ちゃん凄いなあー」

「科学の力よ、いえす！」

久美救出の、陰の立役者である。心の中で、深くお辞儀をしておいた。

(……でも、優さんも、やつぱり変人だよね)

冷静なのか、一匹狼なのか、お茶目なのか、やつぱり分からぬ。色々混在しているという感じがする。ただ、総合して、余裕があつて有事には頼りにはなりそうだ。平時に頼りにするには頼りないが。教室の扉を開ける。中には少ない。だがしかし、僕の求める姿は、その中にあつた。

「……ほほふ、ふははん。ほほひふほはほほっは」

「おおう、スバちゃん。どこに居るのかと思つた。と言つている」

口いっぱいにご飯を詰め込んだ久美が、生き生きと笑いながら、七組五班の皆さんに囲まれていた。通訳には、明菜さんが起用されている。

「ひんはいひはんはよ？」

「心配したんだよ？　と言つてこる」

「ひひふひひははつ……げふ、がふ。……ひませつせせは」

「一組に居なかつ……げふがふ。居なかつたから。と言つてこる」

やうに話つマードなら抱きしめるまではじょつと思つていたが、全  
くやう言つ感じではなかつた。と言つか、明菜さんの翻訳能力が素  
直に凄い。

これで良こ。いつして、田常に溶け込めるのなら、これが一番良  
いのだ。

「……早く食べないと、お昼休憩が終わつてしまこますよ~」

多香子さんに急かされて、僕はカツサンドの封を勢い良く開けた。

六時間目、終わりのホームルームまで終え、僕たち七組五班は初  
めての掃除をする為に、社会科教室へと向かつた。僕は一度目だが、  
一度目は心ここにあらず、といつ状態だったので、新鮮には違ひな  
かつた。

社会科教室は、七組の教室から見えるような距離にあり、行くの  
も容易い。僕たちは社会化教室に入ると、思い思いに簾を取つたり  
ちつとりを持つたりした。

「つていいやいや、ちりとりはまだ早いからさ」

「やつです？　……確かにそうかもですねえ……」

朋絵さんちつとりを近くの机に置き、掃除ロッカーからひん  
とした簾を出して掃除を始めた。僕もそれを見てから、近くの机み  
を一箇所に集めていく。

「……面倒ですね」

「多香子嬢は掃除が嫌いか。これは意外だな」

「社会科教室は、授業で使わないですから。掃いていて虚しくなります」

大人しい性格から、掃除が好きそうな印象しかなかつたが、多香子さんが一番に文句を垂れた。こう言つ時に一番文句を言いそうな重郎は、中学校の頃から掃除好きで知られており、今日も無言で隅々まで掃きまくっている。

「多香子も、重郎のように掃けば良い」

「……明菜さんは何をしてるの?」

「総指揮だ」

リーダー命令で、雑巾係に左遷した。

机を動かして、掃ぐ。戻して、集める。また別の机を動かして掃ぐ。そんな作業を繰り返している内に、皆の士気が思わず上がり、十五分ほど掛けて部屋中をぴっかぴかにしてしまった。

「これでぴっかぴか? 全然だろ。黒板舐めても大丈夫つてぐらいがぴっかぴかってもんよ」

重郎の意見はもつともだつたが、達成感が損なわれるので聞かなかつた事にした。

掃除が終われば、次は自然科学部の活動である。今日は誰も帰る気はないらしく、全員で化学実験室へと入った。

「……」

「うわ。……どうしたの、優さん

入室早々、田代のうか顔まで死人のようになつてゐる優さんに睨まれ、少したじろいでしまう。僕に続いて中に入った七組五班の皆さんも、同様に硬直する。

「……盗まれたのよ……」

「何が？」

「あの実験装置……高かつたのに……！」

うわあ。誰が盗んだのか、心当たりがありまくる。朋絵さんはその事を知らないようで、優さんの睨みにも気付かず、悠々と中に入つて久美と談笑を始めた。

「でも、動かなかつたんでしょ？」

「分解して再利用……リサイクル！ 私の、超科学的リサイクルの法が、何者かによつて破られたのよ！」

超科学的つて、科学を超えて科学ではないような気がする。見えない仇に、一人で罵詈雑言を浴びせ続けている優さんを置いて、僕たちは化学実験室の奥へと集まつた。

「……大喜利、だな」

誰もが忘れていた今日の議題を、佐奈さんが再び掲げた。金曜日の活動に参加していなかつた多香子さんや朋絵さん、それから久美は、何の事か分からずに各自首を傾げたりしている。

「七組の五班……俺たちの呼び名、が今週のお題だつたよな？」

「だつただつた、優秀作品には……豪・華・商・品ー」

「おお～。何を貰えるんです？」

「……何かを？」

春花さんが無責任に僕を見て來たので、僕はその視線を受け流す  
ようにして佐奈さんと目を合わせた。

「……一番面白くなかった者が、一番面白かった者の欲しい物を買  
う」

「ほほ、欲しい物の条件は？」

「千円以内、だな」

「よし、よし来たあー、私参加するーー！」

物に釣られて、久美が早々に参加表明する。だが、その久美を制  
止するように両手を大の字に開いて、明菜さんが言った。

「賭博行為は日本の法律で禁止されている」

「うむ。過去の判例から言つて、この程度の金銭のやり取りなら、  
遊戯の内として認められるだろう」

「そうなのか……。しかし、生徒手帳にも、お金のやり取りはして  
はいけない、と書いてある」

「私生活ではそうだろうが、部活動の一環だからな  
「むう……」

学級委員として、納得の行かない所が多くあるらしい。と言つか、  
一方的に明菜さんの方が正しい。だが、屁理屈を堂々と言つ佐奈さ  
んに、明菜さんも徐々に丸め込まれて行く。

「私は九九スナックで参加する」

その内に、止める立場から進んで参加する立場に変わっていた。  
九九スナックとは、小さい袋に包まれた煎餅の詰め合わせセット

の事で、その小袋には一つ一つに、一桁×一桁×一桁の数式と答えが書かれている。いわゆる、勉強菓子ジャンルの商品だ。価格は千円弱。千円まあと一円。

「げ。……千円、ギリギリじゃねえか、それ」

「ロスは少なくする」

「さつすが明菜ちゃん、合理的いー！」

「……なら私は、伊藤博文の描かれた日本紙幣、で参加するわね」

手と手を合わせてハイタッチする明菜さんと春花さんを他所に、優さんが参加表明をした。伊藤博文の描かれた日本紙幣とは、日本銀行が発行している千円札の事である。その価値はちょうど千円。

「あれ、参加するの？」

「当然。キャプテンが参加しないでどうするの。あなたも強制参加よ」

副キャプテンとして当然の役目らしい。元々そのつもりではあつたので、新しい目覚まし時計を狙つて参加する事にした。大体七百五十円ぐらいだろう。

その後、多香子さんが文庫本、朋絵さんが豚の貯金箱、重郎が明日の昼食、春花さんがカットキット……お菓子の袋を上手に切断する為の道具、久美がノート五冊、佐奈さんがお徳用十リットルのルーラ・ourke・ジユースで、それぞれ参加を表明した。

「……皆さん、参加するんですね」

「これが、自然科学の求心力なのよ。いえすー！」

「自然科学関係なさそうんですけど……」

いつの間にか佐奈さんが持ってきていたくじを引いて、発表する

順番を決定した。

そこから、要暖房な大喜利大会が始まったのだが、あまりにレベルが低かったので割愛する事にする。とりあえず、中でも格段にレベルの低かった春花さんが、まだマシというレベルだった朋絵さんに豚の貯金箱を買つという事となつた。

「その貯金箱で、失われた自然科学部の資産を集め直すのね。良い心得だわ」

「え、違いますよ～」

「…………」

優さんの冷たい視線も、朋絵さんには効果がないらしい。そんな感じで、今日の活動は終わつた。

校門を出た辺りで、後ろから追いかけて来た久美と合流し、僕たちは久しぶりに一人きりで下校した。夕焼けに少し足りないほどの、薄い橙色のかかった青空に太陽が燐々と輝き、夏が近付きつつある事を示している。

「ほんと、金曜日はありがとね」

久美が、珍しく改まって言つ。

「金曜日……あの後も、何か悪い夢見ちゃつて」「悪い夢？」

問題事は解決したはずなのに、いつになくトーンの低い久美の声に、つい僕は訊き返した。久美の視線は、まっすぐすぐ下の影に向

けられている。

「そ。昂が来なくて、私がずっと人質になつて。その内、お父さんが拳銃を持つて、向けて、引き金を引いて……。……んで、私が死ぬの」

「撃ち外してつてこと?」

久美は、首を小さく横に振つた。

「色々あつてさ。お父さん、上の人に拳銃使わないつて約束してるんだよね。だから、もし撃つて迷惑掛けちゃつたら、制裁として私が殺されるつて感じ」

「……何それ」

まるで、意味が分からない。何故そこで、久美が出てくるのか。だが、久美は昔から変わらない笑顔を見せながら、言った。

「ま、とにかく、借りーつて事さねー」

「うん。……貸しーで」

「借りは仇で返すから、そこよろしくうー

「重郎に返しておいてね」

「いえす、そーつ」

すっかり誤魔化されてしまった。もう一度訊き直そうと思つている内に、僕たちが左右に別れる交差点に差し掛かり、短く言葉を交わして一人の帰路に就いた。

「……何で居るの」

家の扉をくぐりて、台所で洗い物をしていた母に声を掛けたと、母は怪訝そうな、勘織るような表情で、お密様が来てるわよ、と言つた。誰だろうか、と思いながら部屋に入ると、田羅口と回じょうつな位置と体勢で、誼絵さんが座つていた。

「情報の共有のため。知つておいて貰わなこと困る事もあるから」

母があんな顔をしていたのは、一日連続で小さい女の子が家に来たからだろう。迷惑ではないが、変な評判が立つのだけは避けたい。

「朋絵さんにおひでてくれたら、明日僕から行くの」「早いに越した事はない。……まず、普通なら抱くべき疑問に答えるわ。何故、あなたにだけ記憶があるのか。気にならない?」「んー……ならないかな」「…………そう?」「…………」

誼絵さんは、少しだけ驚いた様子で僕を見上げた。

「受容力があるより先に、反懐疑的なのね」

「まあ、うん」

「……答えは、たまたまよ。記憶が残るか残らないかは、運次第」

結論から言つて、どちらでも良い事としか思えない。そんな僕の表情を見て、誼絵さんは小さく溜め息を吐き、母が出したらしいお茶を口に運んだ。

「今は、この世界を脱す方法を考えているわ」

「……パラレルがどうとかって話?」

「そつ。壊れやすいここから、安定した元へと戻らないと」

金曜日に聞いた話だ。その件についても落着したのかと思つていたが、どうやらそうでもないらしい。

「今の所は、そんなもの。特に何かしろと言つ事もないわ」「そつか。……あ、そうだ。久美が自殺した理由、分かつかもしないよ」

むしろ、今、頭を満たしているのはその事だ。僕が久美の父親の話をすると、誼絵さんは静かに頷き、納得した、と呟いた。

「一度目の経緯は恐らく、父親が覚悟して発砲、その後その子を庇おうとしたけれど力足りず、思いつめたその子が身を投げた、ね」「……何だかさ、おかしいと思ったんだ」

「今の所、矛盾らしい所はないと思うわよ」「そうじやなくて……」

久美の事情を公言出来ない以上、他に心を打ち明けるべき相手はないのだ。僕は誼絵さんに、自分の考えを話した。両親の事情とは言え、何故久美が死なねばならないのか。何故そんな事が、久美の知らない所で決められているのか。それで、良いのか。

「…………」

僕が話している間、誼絵さんは無表情に、視線だけ僕に向けて静かに聞いていた。止めようともしなかったので、僕もつい感情的になつて熱弁してしまい、五分ほど話してやつと冷静に戻った。

「……それで、あなたはどうすると?」

「どうすべきなのかな、つて」

「改善したければ、その”上の人”に談判するしかない。あなたにそれが出来るの？ どうやってもどうしようもない事に不満を持つのは、あまり賢明ではないわ」

これまでになく厳しい言い方だったが、理に適っている。何より、何をすれば良いのか、明確に理解する事が出来た。

「……”上の人”に会う方法つて、あるかな」

「人に頼つていてばかりでは駄目。自分の力で何とかすべきよ」

「誼絵さんの力を借りるのも、僕の力の内だし」

「……詭弁。分かつたわ」

久美は、すぐに死ぬという事はないだろう。だが、今の状態が、久美にとって望ましい物であるという訳でもない。大事、特に命に係わるような事は、当人の意思によって定められるべきなのだ。そして今、そこに久美の意思が入っていないというのだ。やる事は、決まっている。

誼絵さんが、口を開いた。

「あなたの周りで、”上の人”に一番近い人は誰か考える。誰？」

「……久美のお父さん？」

「そうね。彼の力を借りるのが、最善策」

自分でもいつかは考え方そつた発想だが、やはり誼絵さんは早い。

「会えるかな、”上の人”に」

「目的、見失ってるわ。あなたが会う必要は全くない」

ああ、そうだった。僕が久美の父親を説得し、久美の父親が“上の人”を説得すれば良いのだ。

「時間は掛かるわね。それに、急いで仕方ない事よ  
「うん。分かってるよ」

「そう?」

谊絵さんは、珍しく可愛げに首を傾げて見せた。  
それから少しして、谊絵さんは荷物をまとめて立ち上がった。

「帰るの?」

「……あまり遅くなると、都合が悪いだらうから」

どうやら、悪い評判が立つのを気にしてくれているらしい。それならあえて押しかけなくてても良いのに、とも思つたが、素直に頷いておいた。

「これは別の話だけど」

部屋を去り際、谊絵さんは振り返つて言つた。

「一度日の曜日、私は鬼ごっこをしていたそうね」

「うん」

「それはありえない。……つまり、私は何から逃げていたのか、といつ疑問が残るわ。それだけよ」

扉が開いて、また閉じる。部屋に一人残された僕は、何とも言えない不気味さを感じた。

翌日、六時間目を終えてのホームルームで、先週のテストが返却された。

(国語科49点……うわあ……)

他も、見るに堪えない得点ばかりだった。唯一、英語だけが平均を軽く上回っていて、人に見せても恥ずかしくないと「うレベルである。

(誰にも見せないでおこつ……)

かばんの奥深くにしまって、絶対出せないよつとしておいた。

テストの点数を訊かれないように、そそくさと一人で化学実験室へと行き、扉を開く。一体どんなトリックなのか分からぬが、それでも優さんは息も切らさずに奥に座っていた。

「テスト、各教科ごとに分けて、机の上に置いて行きなさい」

「……嫌と言つたら?」

「モルモット化ね。……いえす、その方が良いわね、出さないで聞いて」

自分の命と天秤では仕方がない。僕は、プライドの為に命を捨てられないタイプだ。ホラー映画では、大抵三番目死ぬ。一番目が勇敢な男、二番目が不信症の男、そして三番目が僕。

そんな暗い思索でこまかしながら、紙ながらにして重々しいテスト用紙を机の上に並べた。優さんは、最初は目を見開いていたが、途中からジトーッとした目付きになり、全部並べ終わつた時に僕に

言った。

「……頭が良いものだと思い込んでいたけれど？　体育会系なの？」

「運動は苦手かな」

「……良い所なしじゃない。君には、モルモットがナイスな職業よ。何なら私が斡旋してあげても良いわ」

分かつていてる事だけに、改めて言われると腹が立つ。でも、じやあどこが長所なのかと言われると、答えに詰まってしまうのも確かだ。コミュニケーション能力は中の下、誠実と言ひ訳でもなく、行動力もなく、当たり障りのない顔で……。

「泣きそう……」

「今泣かれたら私の所為みたいになるじゃない、駄目よ、駄目」

「まんま優さんの所為だよ！」

「本当？……せつと、君より点の悪いのも居るわよ。春花とか」

さすがの春花さんでも、平均点が73点の国語のテストで、49点を下回る事は出来ないと思つ。

その内、皆が集まり始めて、僕が出したテスト用紙の上に、どんどんと重ねられていつた。国語のテストで見えた点数は……64、41、43、91、62、77、96。

結構微妙だ。いくらか絶句した後、久美さんが静かに言つた。

「……国語科の最高点は99の私。最低点は41の久美」

「てへへ」

「褒めてないわよ。……あら春花、どうやってカンニングしたの？」「プロの技つてヤツ？　いいー！」

優さんの手で公表された春花さんの答案には、大きく『77点』

と書かれていた。更に意外な事に、明菜さんが43点といつ低得点に収まっている。かなりの謎だ。

「滋野君が62、須本さんが96、駒黒さんが91、津田さんが64」

「あ、俺達も名前で良いからよ、部長さん」

「わづ? …… あとは、昂くんが49」

おおづ。突然名前を呼ばれると、ちょっとビックリしてしまつ。どうも心の中にやけと顔のにやけは運動していくようなので、心を引き締めねば。

「……………酷い結果ね……………」

「そうです? 結構、良い線行つたと思うんですけど」

「平均点を取つてから言わないと、説得力に欠けますよ?」

「」もつともである。だが、得点的に朋絵さん側の奥の方に居る僕は、突つ込むに突つ込めない。

「国語は苦手だ……」

「そのようですね。数学は、とても良い得点をお取りですし」

明菜さんの数学の答案には、『96点』の文字。国語は得手不得手の出にくい教科だと思っていたが、実はそうでもないのかも知れない。

全教科を見た結果、佐奈さんは余裕な感じのまま余裕な得点、明菜さんは国語以外はほぼ完璧、多香子さんはどつしり優秀、朋絵さんはぐらぐら平均点以下、春花さんは意外な平均越え、久美はどん底、重郎はそこそこ、優さんは満点多数、僕はボロボロ、という結論が出た。

「……自然科学部として、科学分野は平均点のダブルスコアぐらいは取つて貰わないと困るわ。つまりは100点。一学期の定期テストでは、必ず取るよ!」。オーケー?」

「うむ。そんな完璧主義の優姫も、国語科と社会科が満点でないようだが」

「……文字数指定のある短作文は苦手なのよ」

そう言えば、それぞれ一問ずつ作文の問題があつた。どちらも五点問題で、僕の自信満々で出した文章は一一点と評価されていた。

「今日の活動は、珍解答で盛り上がらんつ余ですっ。」

「おー。へんなへんなー」

そんな感じで、今日の自然科学部も、全員出席で活動が始まった。

「ベスト珍解答は、重郎さんの社会科から、問題が『田高になると輸出産業はどのような影響を受けるか、簡潔に記しなさい』、解答が『輸入産業に路線変更する』でした~」

朋絵さんの発表により、何故か誇らしげに重郎が、優勝カップを見立てたビーカーを明菜さんから受け取つた。そのまま頭上高くに持ち上げて、まるで金メダルを貰つたかのような笑みを浮かべる。

「……人選ミスね。サブキャプテン、解任。新サブキャプテンは明菜さん」

「どうして私なのか……」

「一番まともだからよ。科学的な消去法の結果」

在任一週間もなく、副キャプテンを解任された。元々ただの名誉職なので特に何か変わった事はないのだが、明菜さんはがっくりと肩を落としていた。

その帰り、僕は久美を誘つて一人で下校する事にした。理由は一つである。久美の父親に、会いに行くためだ。

「いやあー。部活つて楽しいねえー」

「自然科学とは全然関係ない事してるけどね」

だけども、中々その事を切り出すタイミングが掴めない。元来から、会話が得意な人間ではなく、しかも今回は格別言い出しにくい話題である。苦戦は元より予想されていたが、こうも術がない物とは思わなかった。

校門を出て、いくらか歩いた後、久美がはつらつとした語氣そのままに、

「今日、ウチ寄つて行かない?」

と問い合わせてきた。まさに渡りに船で、僕が慌てながらうん、うんと一度頷くと、久美は訝しげに首を傾げて、

「もしかして、もうバレちゃってるのかなあ? 実は、新発売のジースがあるんだけどさー」

と言つた。

「へえー。なんて名前のジュース?」

「『ウイッチ・アップル・ジュース』。美味しいしあうしょ?」

「どうちかつて言つと毒々しそう」

どうやら、前のジュースのお返しとして、同じくジュースを飲ませてくれようとしているらしい。方法云々はさて置くとして、こういつ律儀さはいつも久美そのものだ。

「一リットルしかないから、コップ一杯で我慢してね  
「うん、十分だよ」

何やら毒見役をさせられているような氣もするが、そういう氣にさせて恩を売らないのも久美の良い所なので、好意的に受け取つておく。

あとは、久美の父親が在宅なら完璧なのだが。僕はそう、淡い期待を膨らませた。

……。明らかに、昴はおかしかつた。

幼稚園の頃から一緒に仲だからではない。高校生になつてから、ずっと昴を見続けてきたから分かる事だ。

明らかに、最近の昴はおかしい。一般的に見て異常という訳ではない。ただ、私の中の『昴』と今の昴が一致しないといつ一點にお

side : 久美

いて、最近の昴はおかしいのだ。

例えばそう、つい四日前の立てこもりの時もおかしかつた。これまで、私が病欠した時以外に、昴が私の家を訪ねて来た事は一度もなかつた。それだけでも十分おかしいと言うのに、あの鈍い昴が家中の異常に気がついて、あの非行動的な昴が強引に中へと入つて侵入者と戦いを繰り広げるなど、おかしい点はいくら挙げても足りないぐらいだ。最近の昴は、妙に、重郎に似ている。

何が、昴を変えたのだろう。部活だろうか。だけれど、それだけでは昴が鋭くなつた理由を説明出来ない。昴が勇敢になつた理由を物語るにも、あまりに薄弱としている。

ただ、少なくとも確かなこと。それは、昴は変わつたという事だ。重郎にしか打ち明けていなかつた事を、打ち明けるに足るようになつたという事だ。

そして、私が感じた昴への違和感が真か偽か、今日分かる。こうやって小芝居を打つのは、私の好む所だ。嫌悪する人も居るが、全てが嘘だと告げる時の快感は極上で、他にはない。昴が、私の思うとおりに、お父さんに話がしたいと言つてくれれば良い。

「一リットルしかないから、コップ一杯で我慢してね」  
「うん、十分だよ」

関係のないジュースの話をしながら、私の家への道を歩く。幼馴染だけあって、私と昴との間に、会話が途切れる事はない。他愛もない話。部活の話。テストの話。話題は余るほどある。

その内に、マンションへと着いた。エレベータで五階まで上がり、二つも取り付けられた鍵穴を両方とも捻つて開け、扉を引く。

「さあ、どうぞー」

「あ、うん」

相槌だけ打つて、昴は扉をくぐつた。私もそれに続いて、扉を閉めながら中へと入る。今度は私が前に立つて、客室までを先導していく。

「…………」

昴は廊下の壁を見ながら、何も言わないでいた。見なくても、昴の緊張が分かる。

客室の扉を開くと、中からお父さんがいらっしゃい、と昴を出迎えた。私がまた扉を押さえて昴を中へと入らせて、今度は私が入らずに扉を閉める。

「あ……」

昴の声が聞こえた。多分昴は今、お父さんと昴を会わせる為に、私が仕組んだのだと思っているのだろう。その答えは、ずいぶんと惜しいが、残念ながら外れである。私が仕組んだのは、もつと大掛かりな事なのだ。

扉に耳をくつ付けて、中の声を聞く。

『…………昴くん、だったね。重ねてになるけど、先田は本当にあります』

『いえ……。その、それよりも、僕はもう一つ話があるんです』

来た、来た。昴はどうやら、私が想像したとおりに、変わってくれていたらしい。これで、やっと、言えなかつた事を言える。

『ほう。それは、何だい？』

『久美の……。あなたが銃を使つたら、久美の命が取られる、という話です』

『……エリヤ、そんな話を?』

お父さんは、即座に否定はしなかった。それで良い。事前にお父さんによる事を話していないから、もしかするとすぐに終わってしまうかもしれないと思っていたが、じつして少しでも湾曲して進んだ方が面白い。

『久美本人から聞きました』

『……あの子も、困った子だな。まさか友人に、言ってしまうなんて』

ちょっとだけ驚いた。真面目なお父さんが、私の小さな企みに気付いてか、昂に話を合わせている。珍しい。とても珍しい。

『……单刀直入に言います。久美を解放するより、談判して貰えないでしょ?』

『……。君の言いたい事はよく分かるよ。だが、私にはそれを覆すほどの力はない。そもそも、私から始まつた話なのだからね』

妙だ。お父さんが、まるで私の作り話を知っているかのよう口ぶりをしてくる。昂に話を合わせるだけなら、「私から始ました話」なんて言葉は、出ない筈だ。

おかしい。何か悪い兆しを感じる。

『だけど、このままじゃ久美が、あまりにも可哀想です……!』

『……残念だけど、私には何も出来ないよ。君が想像しているよりずっと、こういう組織の縛りは厳しいんだ。たとえ私が上と直談判出来たとしても、久美を死の呪縛から解放する事は無理なんだ』

「ま、待って、お父さん!」

私は思わず、扉を開けて中へ飛び入った。お父さんの話が、あまりにも具体性を帯びすぎている。昴とお父さんが一人で私を騙していく、二人に笑われるのも覚悟の上で……いや。一人に笑われるのは、まだマシな結果だ。

「……久美。どうしたんだい？」

「冗談がキツ過ぎだよ！ スバガ……本当に信じちゃう…」

「何を言っているんだ、久美。久美が、自分で話したんだろう？」「だ、だから、それは……」

一人とも、笑うような、そんな空気ではなかつた。むしろお父さんは、その厳正な空気を壊した私を、責めるような目で私を見る。

「……え、ええと……。嘘、なんでしょうか？」

昴は困惑して、お父さんにその真偽を訊ねた。こんな展開は、想像だにしていなかつた。これは、何だ？

そして、お父さんは、静かに首を振つた。もう、明かしても良いのに。その首は、横に振れていた。

「久美は、死の縛りに遭つてている。これは、本当の事だよ  
「や、やだ何！？」

自分でも、混乱しているのがよく分かつた。私がそういう境遇にあるというのは、全て昴への嘘なのだ。冗談なのだ。それがどうして、お父さんに知られ、まるで眞然の事のように話が進んでいるのか。

おかしい。異変は、確実に起こつていて。

「……すまないけれど、久美には辛い話なんだ。これ以上は、話させないでくれ」

「違う、違う、そうじゃない……そうじゃないよ、お父さん！」

止めるなら、嘘だと告げれば良いじゃないか。どうして、そういうのか。これではまるで……

……それが事実のようではないか。

「わ、分かりました……。ええと、久美と少しだけ、外に出ても良いですか？」

「ああ、構わないよ。慰めてやってくれ」

「あ、あああ……ああ……」

頭が真っ白になつた私が次に感じたのは、私の腕を掴む昂の細い指の暖かさだった。

side・昂

本当ならもつと話したかつたが、あまりにも様子が変だったので、仕方なく久美を連れて家の外に出、近くの公園にまで連れ出した。

「…………」

久美は、帰り道のような饒舌さを全く失くして、黙り込んでいる。理由は……今の所分からない。だが、それぐらいは、僕が察してや

るべきだろうと思つ。

久美が突然にこうしてうつむいた原因は、まず間違いなくあの父親の話による物のはずだ。あの久美の反応は、尋常ではなかつた。

(……でも、言つてゐる事は、久美のそれと一緒にだつた……ような)

久美が部屋に飛び込んで来た時に話していたのは、久美を解放するのは難しい、という事だ。となると、久美は、自分は解放される物だと思い込んでいたのか？

……いや、そうではない。久美はある時、確かに、「冗談が過ぎる」と言つた。更には、僕が本当に信じてしまつ、とも言つた。それはつまり、久美にとつてそれまでの会話は「冗談だつた」という事だ。

(でも久美は、僕にその事を打ち明けたんだから、当然知らなかつたという事はないだろし……)

……謎が、深い。まこと男らしくない話だが、こんな時に誼絵さんが居たら、と思つてしまふ。

誼絵さんのような情報を整理する能力は、多分僕にはないのだろう。なら、たとえバラバラに散らばっていても、繋がるだけの情報を得なければならぬ。

「……久美は、知つてたんだよね？」

「……」

驚く事に、久美は首を大きく、何度も横に振つた。つまり、この事を知らなかつた。では、何故、僕に事實を打ち明ける事が出来たのか。

……記憶が、不明瞭になつてゐる？ 暴漢に襲われたショックが、僕に打ち明けた後の記憶に穴を空けた……？

(……いや、そりゃない)

誼絵さんは、ずっと言っていた。この世界は、不安定なのだと。その不安定さが、久美の記憶にまで影響を与えたのではないか。

「……久美、行こう」

そうだとしたら、もう僕の何とか出来る範疇ではない。僕は、未だに言葉のない久美の手を引いて、朋絵さんの家……誼絵さんの下をを目指して、走った。

「……その可能性はとても低い。世界が不安定でも、世界に居る知能の記憶にまで影響は及ばない筈よ」

呼び鈴に応答した誼絵さんは、すぐに僕と僕の隣の久美を一階の窓から認めて、中へと入れてくれた。朋絵さんは不在らしく、僕は右手の先を気にしながら、誼絵さんの部屋へ入室し、誼絵さんに事情を話した。

「その子、大丈夫?」

誼絵さんは僕の説を聞くと、すぐにそれを否定した。そして少し考えた後、久美を指してそう言った。

「大丈夫見える?」

「そうじゃないわ。こういう事を、聞かれて大丈夫かという意味。

……自分、ショックで一時的に自失しているだけよ

「……うん、大丈夫だと思つ」

一時的な、自失。それは、相当のショックによるものでなければ、ありえない。聞いてどうなるのかは分からなかつたが、久美に何が起こつたのか、知りたかつた。

「私の予想は、こうよ」

と、誼絵さんは話し始めた。

……久美は、僕を驚かせるつもりで、僕に嘘を吐いた。それが、父親が銃を撃つたら久美が殺されるという話である。それは、嘘であり、虚実だつた。だが、不安定な世界がその嘘を呑み込み、現実として吐き出してしまつた。だから、久美は突然自分の冗談が事実に変わつて驚き、父親に詰め寄つた。そして父親が本気だと知ると、ショックのあまり自失状態に陥つてしまつた。

……誼絵さんの話は、おおよそこんな感じであつた。

とりあえず、つじつまは合つてゐる。だが、それならこの世界では、どんな事でも起こり得る事にならないだろうか。

「……不安定な世界つて、そんなに不安定なの？」

「その子は、例の装置の被験者。それが影響してゐるのよ。……そんな事は、どうでも良いのでしょうか？」

それも、そうだ。今大事なのは、久美である。そうして意識してみると、僕の右手が、微かに握り返されているのに気が付く事が出来た。

「……半分くらい分かんないけどさ。私の事に関しては、その子の言つ通りだよ」

久美の目に、光が戻っていた。

「世界つて、何？不安定つて、何？ねえ。誰か知らないけどさ、私が納得出来るように、教えてよ」

真っ直ぐ、誼絵さんに向き合つて言つ。目線は、いつになく鋭い。だが、誼絵さんは一向にたじろぐ様子なく、僕に、本当に教えて良いのか、と訊ねてきた。僕は殆ど時間を掛けずに、うん、と答えた。誼絵さんはゆっくりと、これまで知り得た事を、久美に話した。久美は感情をあらわにして、おおう、とか、うわあ、というような反応を示していたが、久美の自殺、といつ話になると、声を静めて聞き入つていた。

「……むむ。スバも、ややこしい話に巻き込まれてたんだねえー」

誼絵さんが、十分以上掛けて全て話し終えた後の、久美の第一声はそれだった。緊迫した場面としては気の抜けた言葉だが、いつも久美らしくて妙にホツとした。

「誼絵ちゃん……ヨシちゃんで良いよね、ヨシちゃんなら、何とか出来る？」

「世界の事なら、さつき言つたように今の所は無理。あなたの事なら、あなたの父親を通じて談判出来ない以上、やはり不可能ね」「そつかー……。ま、銃なんて普通使わないしね。別に良つかー」

うわ、軽い。久美を解放してやるうと悩んでいた僕をあざ笑つているかのように、軽い。腹立たしい程に軽い。いや、良い事なのだが、軽い。

誼絵さんが、そんな久美をじっと見つめて、言つた。

「……用が済んだなら、早く帰つて」

「ありや。私、ヨシちゃんに嫌われる?」

「違うわ。何も人の家で、仲睦まじいのを見せ付けなくとも良いと  
いう事よ」

……僕は、誼絵さんの言葉で気付いた。久美はまだ気付いていないようだったが、僕の右手は、まだ久美の手と繋がったままになっていた。つまりは、誼絵さんの話中……十分以上手を繋いでいたという事だ。その瞬間、暗い部屋の中で僕は真っ赤になった。

「あてつけ?」

ただ一人、未だに気付かない久美だけが、見当違いの失礼な質問を誼絵さんにぶつけていた。

side:久美

何もかも、無茶苦茶だ。

最初は私がおかしくなったのかと思ったが、どうやら違うらしい。昂は、怪しい子供の戯言に騙され、おかしくなってしまっただけのようだ。決して好転ではなかった。

多分、お父さんも。何か悪い病気にかかっているだけなのだ。昂とお父さん。二人は、私が直す。直してやらないといけない。必ず。

田覚まし時計に、新しい電池を入れてみた。田覚ましのベルが鳴らないのは、電池の残量が少ないからではないかと考へたからだ。だが、鳴らなかつた。

次に、いつその事と、埃を被つたドライバーを持ち出して、分解してみた。なるほど、この部分が正常そうだ、と思える部分があつて直したが、組み直してみるとネジが一本余る。田覚ましも結局鳴らないままだつたが、時計が壊れるという事もなかつた。

もはや、と思い、時計を買い直した。田新しい青いフォルムに最初は田を奪われていたのだが、いくらかして僕の心は、他の事に埋め尽くされていた。

新品であるはずのその時計すらも、田覚ましのベルが鳴らなかつたのである。

不良品に当たつただけに違ひないのだろうが、不吉な事この上ない出来事にすっかり意氣を落としながら、水曜日一時間田の芸術科目の教室へと向かう。

「……鳴子。しゃんしゃん」

隣で、自分で持つてきたりしい赤と黄色の鳴子を、とても楽しげに明菜さんが振つてゐる。芸術科目は選択制で、音楽と美術、それに書道から選ぶ事が出来た。僕は色々考へた結果、服が汚れたりしないように音楽を選ぶ事にした。

「鳴子、好きなの？」

「音がうるさいから、鳴子は嫌いだ」

七組五班の中で、音楽を選んだのは僕と明菜さんだけだった。他の四人は、全員美術を選んだようで、重郎が僕たちを冷やかしつつ、ハーレムわっしょいと叫んでいた。

「じゃあ、どうして鳴子？」

「好き嫌いはいけない」

いつもして一人で音楽の授業へ向かうのは、昨日に続いて二度目である。そして昨日で分かったのは、明菜さんと二人きりになると、会話が難しくなるという事だ。何だか、会話を楽しんでくれているのか、それでもないのかが掴みにくい。

「好き嫌いをすると、健康に悪いそうだ」

「んー。鳴子とかの好き嫌いは、別に関係なさそうだけど」

「そうなのか……」

そんな会話をしながら、音楽室に入った。

帰る前の短いホームルームで、担任の倉口先生から明日日に控えた遠足についての詳細説明があった。バスに乗って行くという事と、時間がないので席順は名簿順になるという事、雨天は延期になると、いう事などいくつかの注意点、それから明日の六時間目にあるロング・ホームルームで買出しに行く、という事がものの五分で伝えられた。

「…………」

「わあ、お隣ですねえ～」

僕が窓側、朋絵さんが通路側で、僕たちの席は隣同士だった。とてもラッキーな事なのだが、一緒に登校しているとか実は付き合つているとか、あることない」と噂になつてゐる事を考えると、複雑な心境ではあつた。

「重郎さんは、バスが苦手なのですね」

「に、苦手じゃねえやい、ちょっと吐き気を催して頭がぐわんぐわんするだけだつ」

「……典型的なバス酔いです」

七組五班の中では他に、重郎と多番子さんが隣同士だつたようだ。何やら一人で、わいわいと盛り上がりをついていた。

ホームルーム終了のチャイムが鳴り、クラス中に机を後ろへとずらす音が響き終わると、早くも久美が教室の中に入つて来ていた。

「スバー。今日は用事があるから、部活行けないって部長さんに伝えといてー」

「ん、分かった」

「携帯も忘れちゃつたし……今日は厄日だあーね

どうやら急いでいたようで、久美はたつたそれだけの会話を交わして、教室を走り去つていつた。

機大会だった。さすがと言つべきか、優さんの折った飛行機は、室内でも屋外でもかなりの飛距離と飛行時間を保ちダントツのトップで、続いて室内での滞空時間がぶつちぎりだった多香子さんが二位、屋外でもぐるぐると旋回し続けた佐奈さんが三位、後はどれも同じぐらいのスコアだった。

「やつと科学部らしい事が出来たわね」

「……紙飛行機大会が科学部らしいとお思いなら、かなり毒されているかと」

「…………。それもそうね」

「」何日と、大喜利やら珍解答やらが続いていたので、優さんの出る幕はなかつた。だが、今日のように科学分野になると優さんの独壇場になるのだ。やはり、有名中学校の実力は恐ろしい。戦々恐々しながら、部活を終えた。

今日は久美が居ないので、一人で帰路につく事になつた。ちょっとだけ寂しく思いながら、妙に広く感じる道を歩く。

(……夕方だなー)

家に着いて、自分の部屋の扉を開けた頃になつて、携帯電話がかばんの奥の方で鳴つた。慌ててかばんを置いて、チャックを引き、手を突っ込んで携帯電話を掴み、取り出す前に応答ボタンを押す。

『……昴だな?』

スピーカーから、重郎の声が漏れる。

「僕じやなかつたら怖いと思つよ」

と呼びかけつつ、僕は携帯電話を耳に当てた。

「それで、なに？」

『今からそつち行くからよ、準備しといてくれ！』

「 プチ、ツーツーツー。昔からだが、重郎の電話は淡白だ。多分、面と向かって会話する事に、コミュニケーション能力の殆どが使われているに違いない。

（準備つて何だろ……）

心構えという事だらうか。何の用かは分からないが、何か重要な事なのかも知れない。全く、想像はつかないが。

五分ほどして、宣言どおり重郎がやつて來た。だが、軽く息が切れ、表情もどこか焦っている。何か緊急の用なのだと理解し、玄関口で話を聞く事にした。

「久美が、久美が黒いヤツに追っ掛けられてんだ！」

だが、重郎はただ、その言葉を繰り返すばかりだった。かなり、切羽詰つているらしい。何だかんだで冷静な重郎が、ここまで憔悴するのも珍しい。

（黒いヤツ、久美……）

久美を追いかけるような黒い物。ゴキブリ……なら、重郎がわざわざ報告する理由が分からぬ。パトカーは白黒だし、ブラックメンは日本には居ない。

そこまで考えて、僕はハツとした。久美の今の環境を考えれば、久美を追う黒いそれは……。

「まさか……暴力団系の人？」

「そ、そうだ！ 何か知らねえが、早くしねえと久美が捕まっちゃうー！」

「電話は！？」

「分からん！ けど、メールはさつき届いた！」

僕は急いで、靴を履きながら久美に送るメールを打了た。どこな  
ら匿えるだろ？ 大きい建物、広い建物……。

「……春花さん。春花さんって確かに金持ちだったよね」

高校に入つて、最初に久美とした電話で、聞いたような気がする。  
まるで遠い昔のようだが、確かに記憶が残つていた。

春花さんの家へ逃げ込むようにメールした後、今度は春花さんに  
電話を掛けた。三度目の呼び出し音が鳴るか鳴らないかというタイ  
ミングで、春花さんのやほーいという声が聞こえた。

「春花さん、そっちに久美が行くから！」

『あーうん。何か分かんないけど、久美つちピーンチつて聞いたか  
ら、こっちから迎えを出してるよー。なにかあったの？』  
「あとでっ」

電話を切る。既に僕たちは、家を出ていくらか走つてた。電話  
の内容を気にして振り向く重郎に、僕は春花さんの家へ行くように  
叫んだ。重郎は、理由を訊く事もなく、そのまままた前を向き直し  
た。どうやら、どこにあるか知つているらしい。

電話が鳴る。今度は、朋絵さんからだ。

『私も、誼絵と一緒に春花さんの家に向かいますので～』

緊急事態でも、朋絵さんの声はどこか和む。とりあえず警察に電話して貰うよ、う言って、電話を切った。

橋を渡つていくらか走ると、お寺のような外見をした屋敷が見えてきた。重郎があれだ、と言つてスピードを上げる。僕も、少ない走力をフル使用して屋敷を目指す。

「……あー、来た来た。中に居るから、入っちゃってよ」

門付近で待つていってくれたらしい春花さんが、心持いつもよりも穏やかな抑えた声で、僕たちを出迎えた。そして僕たちに開いている大きな門を通らせた後、自分も中へ入つて、厳重に門を閉じ門を刺し入れた。

春花さんに案内されるままに中庭を抜け、屋敷へと入る。外観とは打つて変わつて内装は洋風で、広い玄関の靴入れの上には、輝くように赤い花が、二輪だけ花瓶に飾られていた。他の所も、広さの割にどこか質素で、がらんどうとしているように感じられる。

そうして案内された部屋には、見慣れたメンバーが大体揃つていた。居ないのは、多香子さんに優さん、そして佐奈さんだ。明菜さんは、朋絵さんから急報を受けて、一番最初に来てくれたらしい。

「……久美」

勿論、そこには久美の姿もあった。既に息が整つている所を見ると、ここに着いていくらか経つてゐる様だったが、まだその目からは、いつものある意味での余裕を持つた輝きは失われているようだつた。僕の呼びかけにも、小さな反応しか示さない。

久美が、黒い人たちに襲われた。考えられる理由は一つしかない。金曜日、久美を襲つた男が、また何かの企てをしたか、あるいは久美の父親の拳銃の引き金が、何らかの理由で引かれたかである。

「あーっ！」

突然、春花さんが叫んだ。驚いて僕たちが振り向くと、春花さんはテレビを指差して硬直していた。

「漸進コイガースが、また負けたるーー あぎやーーー！」

じたばた。春花さんは、そつとしか形容の仕様がない動きで、地団太を踏んだ。部屋の空気は一瞬、大きく淀んだ後、和やかなムードを取り戻す。

「立山ホーマーズが勝つのは良い事だ」

「むむ、明ちゃんは敵い？ 今日負けたり、N子園三連敗になっちやつじやーん！」

なるほど、と、久美の言っていた事を思い出した。底抜けに明るい、という評価は、的を射ていると思つ。強張つていた久美の表情にも、一転して笑顔が戻つた。

しかし、そうしていたずらに時間を潰している訳にもいかない。何故か居る女中さんによれば、久美を追つて来ていた車は、遠巻きにこちらを囲んでいたようだつた。

「……何があつたのか、話してみるよ」

「…………」

皆の期待に応えて、重郎がそつ切り出すが、久美に反応はない。聞こえてはいるが、返事をする気はない、といった風である。

どうした物かと考えている僕の手を、隣に居た春花さんの手が引いた。少し戸惑いながら顔を見ると、どうやら話があるらしいしつ

になく無表情で、更に僕の手を引っ張つてくる。僕はそれに従つて、集まっている大部屋から廊下へと出た。

「何の話？」

春花さんは僕の言葉に返事をせず、代わりに僕の肩を強く押して壁に押し付けてきた。思わず身を捩じらせて逃れようとするが、その力は強く、ついに春花さんの手を脱することは出来なかつた。

「な、何？」

手を軽く上げて、抵抗する氣のない事を示す。そつそつと、春花さんは僕を押す力を弱めて、こちらを見上げた。

「重郎ちゃんにはメールで伝えたんだけね。……これ、久美の狂言だと思つ」

「……どうして？」

「片や一・二台の車、片や徒步。どう考えたって、捕まるよね」

……確かに、そうだ。しかも重郎の言い方では、既に走つて逃げなければならぬような状態に追い込まれていたようだつた。これでは、捕まらない方がおかしい。

「で。……スバちゃん、何か知つてるんじゃないかなーって。どうして、狂言なんてしないといけなかつたのか」

春花さんは狂言と決め付けていたようだつた。そのまま、また僕の肩を強く押してくれる。

「……本当に、狂言のかな？」

「狂言じゃないと思える理由、ある?」

「…………。…………実はさ」

僕はやむを得ず、これまでの事について洗いざらい春花さんに話した。本当は『久美の父親が銃を撃つと、久美が殺される』という点だけで良いのだが、そこだけ話しても春花さんは納得してくれないだろう。何より、肩を押す手と、僕を見つめるその目から早く逃れたいという気持ちが、僕の心を押した。

春花さんは世界が云々という所で一瞬ハツとした表情をした以外は、終始真顔で僕の話を聞いていた。全部聞き終えた時、春花さんは心底感心したような顔で、

「嘘つぽーい

と囁つた。

「……ま。スバちゃんの成績からして、急いでしらえじゃこんな話出て来ないもんねー。一応信じじとこつかな」「何か、馬鹿にされてるような気がする」「気のせいっ、せーーいーーー」

急激に肩への力を緩めると、春花さんは軽くステップしながら大部屋へと戻つて行つた。

残された僕は、いつたん落ち着いて、狂言という可能性を考える事にした。

(…………もし、狂言だつたとすれば)

狂言だつたとすれば、久美の目的は何だろつか。すぐに思い付くのは、今話したばかりの事である。つまり、『久美の父親が銃を撃

つと、久美が殺される』事への反抗。……だが、それとの狂言とは、どうやっても繋がらない。

(となると、狂言じゃない?)

狂言でないとすれば、何らかの理由で久美の父親が発砲したから、と安易に説明が付く。無闇やたらに発砲するとは思わないが、前的世界において久美が自殺した時には恐らく引き金を引いたはずだ。ひた、と僕の脳裏に、濡れた足音が走った。何か、どこかが引っかかる。そもそも、そもそも、発砲すれば殺されるとこのは、昨日始まつたばかりの話ではなかつたか……?

(……)

つまり。久美が自殺してしまつた理由は、未だ解き明かされていない。全くの謎である。……それも、狂言だとしたら?

(……やめといへ)

それ以上続けても、人間不信になるばかりで、成果はないようと思えた。思考は、僕の仕事ではない。  
だが……。僕は、眞実の琴線に触れつつある事に気付いていた。

「どうあえず、車はどこに行つちやつたつてさ」

僕が部屋に戻つて十五分、女中さんから一度目の連絡を受けた春花さんが、皆にそう言った。

「向こうが本気だったなら、今出ても危ないかも知れないし、泊まつてくれる？」

本気だったなら、といつ所が強調されたように感じたのは、恐らく氣のせいではない。春花さんは本気で、狂言であると確信しているのだ。

「……私達は、とりあえず帰らつかと思いますー」

「私もそうする」

誼絵さんと、明菜さんが立ち上がった。

「じゃあ、昴さん。久美さんの事、よろしくお願ひします～」

その口調から察するに、明菜さんも朋絵さんも、狂言説に考えが行っている様だ。女中さんに案内されて三人が出て行くのを見届けてから、僕は重郎に、メールを打った。

『何か、隠している』こと、ない？』

重郎からの返信は来なかつた。ふと、彼の方に目をやる。重郎は、手で、廊下に出でると呟きしていた。

『……俺が、隠し事をしてると思つのか？』

一人きつの廊下で、重郎はそつまつて真剣な顔で僕と向き合つた。

「隠してるかも知れない、つて思つ」

「……どうか。んじやあ、隠しても、仕方ねえかもな」

殺伐とした雰囲気。しかし、重郎に敵意はないようだった。むしろ、哀れむような、後ろめたそうな、そんな表情をしている。

一度深呼吸して、重郎は言った。

「俺と、久美は、付き合ってる。一年前からだ」

……。思わず情報だった。耳を塞ぎたくなるとか、そういう物ではない。だが、それにしても、余りにも、驚かされた。

「隠してたのは、俺も久美も、決して悪意からじゃない。けど、中学生の頃のお前は、不安定すぎた。だからどうしても、言えなかつた」

僕は、中学校の頃の自分を想起して、頷いた。目立つた友達は、二人を除いて他におりず、成績の伸びの悪さにナーバスを抱えた事もあった。

「……で、もう一つ、言つてなかつた事がある」

……。心の準備を整える。あの頃から、まだ一ヶ月と経つていな。一人が、僕を慮つてあえて言わなかつた事を、今から聞くのだ。一人が付き合っていたという事。それすらも、今の所消化出来るか分からぬのだから。

「…………うん」

決心して、相槌を打つ。

「久美は、引っ越す予定だつたんだ。家族の都合で、どうしてもつて話だつた。久美は、昂が泣いて引き留めるのを見るのは、耐えら

れないつて言つた

つまり。そこで、僕の頭の中で、全てが繋がつた。実際には一部分、符合しない要素を孕んでいたのだが、少なくともその時の僕は、全てを理解したような感覚を覚えた。

自殺は、狂言だったのである。僕は、久美の死体を見ていない。狂言の目的は、“死んだ事にして、引っ越し時に誰とも会わないよう”に。引越しを憂いでいたのだから、入学式以後数日続いた久美の無精力にも、説明が付く。

……だが。その事実は、矛盾がないと同時に、久美が僕に仕向けた残酷な仕打ちを物語つてもいた。取り残された僕は、久美が自殺したという事実を、一生背負うところだったのだ。

「俺は、久美が苦しむのを見るか、鼻が壊れるのを見るかの一択で、久美を救う事にした。……裏切つてゴメンな」

重郎の苦しい、無力感に覆われた心情も、容易に想像出来た。だから僕は、良いよ、と言つて、重郎の肩を叩いた。

「……多分、今日のは狂言じやないと思つんだ」

「え……？」

「俺が久美から聞いた全ての事情を合わせても、今日、こんな狂言をする理由が見つからないからな」

狂言じやない、とはそれはつまり……。

「み、皆が、危ない？」

「……俺は、そう思う」

重郎がそう言つてうつむくのと、春花さんが全速力で駆けながら

僕たちの下に来るのとは、ほぼ同時だった。

「津田姉妹は、上手く逃げたみたいだけど……」

春花さんの報告を、責めた久美、まだうつむいている重郎と共に聞いた。

車は、大通りを一周すると、家のすぐ近くに帰って来たらしく。僕たちの警戒を解くための罠に、まんまと引っ掛けたという事だ。とっさに逃げた朋絵さんと誼絵さんは捕まらなかつたようだが、明日菜さんが車に強引に乗せられて、連れ去られた。

「…………」

久美は青ざめているだけでなく、小刻みに震えてもいた。見開いた目は、恐怖と、そして謝罪の意に染まっている。どこかで、見た事があるような気がした。

着信音を切つておいた携帯が、バイブレーションで電話の受信を伝えた。慌てて開く。電話は、優さんからの物だつた。

「もしもし」

『大丈夫？　トライブつてるんじゃない？』

「……え、分かる？」

『分かるわよ、そのくらい。怪しい車が走り回つてゐし、春花の家は取り囲まれてるし』

やつぱり、取り囲まれてゐるのか。久美の様子と言い、車の挙動と言ふ、どうやら狂言ではなかつたようだ。

『で、何事なのかしら?』

「それが……」

僕はとりあえず、分かる範囲の事を簡潔に話した。世界云々の話は、長くなるので除いて話したのだが、優さんは大体の事情を飲み込んでくれたようだつた。

『大窮地ね、それつて。警察は何ど?』

「警察?』

『……誘拐事件なのよ?』

ああ……。どうやら、僕たち四人は、かなり冷静さを失っているようだ。僕は重郎に、警察に通報するように言った。賢明にも、重郎はすぐに頷いて、携帯電話を開いてくれた。

「今電話したよ

『……はあ』

溜め息と共に、電話は唐突に切れた。優さんはやはじびこか、せつかちな所があるなあ、と小さく笑つて、僕は同じく通話を終えたばかりの重郎にその首尾を尋ねた。

「何台か車、回してくれるつてよ

不當に少女を拘束している可能性がある車が、まだ現場近くに停留している事から、急いでその確認に来てくれるのだという。心強い。だが、明菜さんの無事有事を考へると、まだ不安は取り切れなかつた。

知らない間に部屋を出でいたらしい春花さんが部屋に帰つてきて

座ると、部屋は重々しい沈黙に包まれた。一分ほどその空気が流れ、遠くにサイレンの音が聞こえた頃になって、部屋に走りこんで来た女中さんが、急報を告げた。

明菜さんが、解放された。添えられるべき理由も経過もなく、女中さんはそう僕たちに伝えた。重郎が、ポカンとした顔をする。

「……何が、起こったの？」

久美が、九十分ぶりに口を開いた。僕が、他に言いたい事があるのを押し止めて事情を説明すると、久美はいくらか明るい顔になつて、

「そつか」

と言つた。思わず僕は、表情を和らげたが、その言葉は決して事態を好転させるものではなかつた。

久美が、続ける。

「なら、行かないと、ね。お父さんだけじゃなくて、皆さんも迷惑掛かっちゃうしさ」

「い、行くつて……どこにだよ？」

久美の父親の拳銃の話を知らない重郎は、哀れにもうろたえ、久美に訊いたが、久美は答えなかつた。

「どうせ、ずっと逃げてらんないもんね。最初から、そうしないとダメだつたのかも」

「……久美」

僕はその意味を悟つて、行かせまいと久美の腕に手を伸ばした。

あと一息で、掴める。そう思った途端に、僕の手から、白い円筒は離れていった。

「「めんね！」

叫びながら、僕たちの制止を振り切つて、部屋を駆け出て行く。その後姿に、僕はいつか感じた、遠く届かない守るべき存在の影を見た。

フラッシュバックする、その映像に気を取られている暇はなかつた。今ならまだ、間に合うのだ。僕は、真っ直ぐ窓を眺めているだけの春花さんと、まだ茫然自失としている重郎を置いて、その後ろを追い掛けた。

一人の距離は、縮まっているような、広がっているような感じがしつつも、その実あまり変わってはいなかつた。明菜さん達が出てから開け放されていたらしいう大門をくぐり、道に出る。どうやらちようどパートカーが到着したところだったようで、すれ違つて呼び止められる。無視する。ありがたい事に、道には、それらしい、怪しい車は一台も見当たらなかつた。

後ろから、声を掛けたくなる。大声で呼び止めたくなる。だが、そんな事をしても、久美が止まる筈はないのだ。今はただ、追いかけて、腕を掴む。赤信号に遭遇するまでに、それを達成しなければならないのだ。

だのに、距離は縮まらなかつた。運良く、二つ、三つと青信号で道路を渡つたが、幸運がいつまで続くとも分からぬ。久美の家までは、まだ二つの信号があるから……。

(あ……つー)

目の前に、大通りが見えてきた。赤い光が僕の絶望を誘う。

「久美！」

決心は揺らぎ、僕は久美の名を叫んだ。

久美は……立ち止まつた。立ち止まつて、振り返り、僕に駆け寄つてきた。僕は、それを、両腕で受け止める。

「……。実はね。引き金を引いたの、私なんだ」

僕の腕の中で、息も切らさずに久美は言った。

「ど、どういう、こと？」

「私……昂の事、信じてなかつたんだ。昂が、おかしくなつたんだ  
と思ってた。お父さんも同じ。目を覚ませてあげないと、いけない。  
そう思つて、私は引き金を引いてみた」

久美は、震えていたが、泣いてはいなかった。その代わり  
なのか、僕の頬に涙が伝つていく。

「……結果は、こうだつた。昂の言う通りだつたのに、私……」

……。要は、僕が悪かつたのだ。世界がループだの、二つ目の世界だのという話を、久美は簡単に信じない普通の人だつた。信じる為には、信じられている人が、それを語らなければならなかつたのだ。そして僕は、幼馴染というだけで、久美の信を得てはいなかつた。僕は、小学校の頃から、二人に頼つてばかりだつたのだから。

「大丈夫」

だからこそ、今が。心から信じて貰える、最後のチャンスなのだ。  
久美を救う。必ず。

「行こう」

僕はそう言つと、青に変わった横断歩道を、初めて僕から久美の手を引いて渡つた。

久美が発砲したのなら、社会的に問題はあっても、久美の父親が交わしたという事になつてゐるその契約には、一切触れないはずだ。それだけで大人しく引き下がつてくれるとは思えなかつたが、道理はこちらにある。恐らく、粘り強く交渉すれば、向こうも納得せざるを得ないだろ。

僕が、そんな甘い考えを持つて久美の家のチャイムを鳴らしたからか、ドアが開いてすぐに、僕の頭に銃口が向けられた。

「……おひ。兄やん、連れてきてくれたんかのあ」

……。何か言わなければいけない。だが、思考が、口が、一斉にストライキを起こして、何も言葉にならない。

決意とは、裏腹に奮い立たない自分にむしゃくしゃしながら、僕は右手で、僕を指す拳銃を、押して避けさせた。

「ま、入れや。野木嬢。あと、兄やんものお」

無口のまま、頷いて、中へと入る。久美は、何も言わない僕を、逆に頼りに思つていいのか、抵抗せずに付いて来てくれた。一時の信頼にすら、應えられない自分に、無力感を覚える。

扉の中では、数人のサングラスをした男達が座り込んでたむろしていた。案内役らしい男に誘導されて、金曜日に謎の男が立てこもつた小さい部屋へと歩いた。そういえば、あの謎の男は何だったのだろう。自殺の狂言に必要だつたはずはないし、今あちこちに居るサングラスとは、雰囲気も服装も、全く違う。

……。そんな、どうでも良い事には頭を働かせてしまう自分に、辟易した。今は、目の前の久美を、目の前のサングラス達から解放する事だけに、集中すれば良い。僕は、入れてもすぐに抜けてしまう炭酸のような気合を、もう一度入れ直した。

「……野木ん旦那、連れて来ましたん」

「ああ。うん。ありがとう」

そこには、ただ一人、暗がりに佇む久美の父親の姿があった。おかしい。久美がこうして追われている状況で、ある意味當人である久美の父親が、悠々とこんな所に一人居る。その光景は、異様と言つて間違ひなかつた。

「……お父、さん？」

久美もそう思つたらしく、ぎゅっと僕の裾を掴んだままに、呼び掛けた。久美の父親は、一步こちらへと歩み寄つて、

「少なくとも、久美が思つていいような事にはなつていないよ

と言つた。更に、言葉を継ぐ。

「撃つたのが久美だつて事が、明白だつたからね。少し叱られちゃつたけど、制裁なんて事にはなつてないよ。……ただ、怪しい車が、街中を走り回つてるとかでね。ウチの人たちが追つかけて止めさせようとしたんだけど、誰が呼んだんだか警察が来ちゃつてさ。今、対策協議中なんだよ」

……。どうやら、とりあえず、最も危惧していた事は、元々発生していなかつたようだ。しかし、そうなると、久美を追いかけいた怪しい車とは、一体何なのか。

思い出して、振り返つて見てみると、久美は心底、ホッとした表情をしていた。最後には、諦めて自分から身を差し出そうとしていたのだから、当然と言えば当然だ。だが、僕の裾には、まだしわが寄つたままだつた。

「……お疲れ様、久美」

僕はそう言って、軽く久美の頭を撫でてやつた。

一時間ほど久美の家に留まつた後、怪しい車が姿を消したという事で帰宅した頃には、既に夜の八時ぐらいになつていた。解放されたという明菜さんは、怪我一つしていなかつたらしく、本人も何故解放されたのか分からぬ、と言つているらしい。不思議な話である。久美はその後、落ち着きを完全に取り戻し、強面の男による叱責にも、にこにこと対応していたとの事だつた。何がともあれ、無事に済んで良かつたと思った。

翌日木曜日。朝に、朋絵さんから、無事だつたかというメールが

届いた。僕は、経過を丁寧に書き記して、返信した。

多香子さんと佐奈さんは、一連の事件について全く知らないようだった。わざわざ知らせる必要はないだろう、と思ったので、秘しておくる事にした。

六時間目ロンジング・ホームルームでは、お向かいという超最寄りのスーパーへ、明日の遠足料理の材料を買いに行つた。予算五千円の半分以上を、明菜さんが強く希望したロールイカに費やし、肝心のそばはかなり少なめになつたが、とりあえず問題なく購入する事が出来た。

「小型通信機をそういう車にくつ付けて回つたのだけど、通信可能範囲が狭すぎて検知出来ないわ……不覚つ」

部活では、優さんが小さな液晶画面を覗きながら、そう溜め息を吐いていたのが印象的だった。

あの時初めて見せた、息の詰まるような春花さんの態度は、まるでそんな事などなかつたかのように扱われ、春花さんはいつも通り笑い、叫んで、騒がしいまま帰つていった。

帰宅して、思う。結局、僕は何も出来なかつたのだと。ただ、決意し、決心し、覚悟を決めたばかりで、事態の解決に何の協力も出来はしなかつた。

久美との事も、心に引っ掛かっていた。久美が、狂言自殺で何の挨拶もなしに引っ越そうとしていた事。少なくとも、僕が涙を流して、前後不覚となるまでに至つたあの時を作り出したのは、他でもない久美なのだ。そして重郎も、同じだつた。

僕は、僕のふがいなかつた事を、よく知つている。だから、それでも、仕方ないと思わないではない。でも、だからといって、

久美が、重郎が僕にした、あるいはしようとしていた残酷な行為が、僕にとって心の痛む事でないという訳には、残念ながら行かなかつた。

まだ、足りない。久美の中に残るわだかまりは、まだ僕と久美を、決定的に隔てている。そう何度も反芻しながら、僕は、未だに鳴らない時計一つを眺めた。

野木久美？・後（後書き）

……と。また何度も修正する事でしょうが、以上で野木久美？は完了です。

拙文、ここまで読んで下さって、ありがとうございました。

次からは、いわゆる便利な日常パートがいくらか続くかと思します、

小話です。

誰かが、弱い事こそが俺の強い理由なのだ、と言った。  
そんなバカな。それなら僕は、スポーツ万能、多々才能、容姿端麗で勇猛果敢と言う事になるではないか。  
……自分で言つていて悲しくなった。

六時三十分ちょうど。不快な夢を見たせいか、昨日の夜をひどく遠く感じつつ、僕は洗面台に立つて、歯を磨き出した。

高校生活が始まったのは、まだ先週の月曜日の事だ。それから今日までの間に、入学式があり、班分けがあり、新たな友人との出会いがあり、自然科学部の活動があつた。加えて、久美の自殺があり、世界の入れ替わりがあり、僕の決心がある。

多分。今日の遠足が、そんな事からの区切りになつてくれる。僕はそう、強く思い願つて、いつもよりも少し早めに家を出た。

「……津田朋絵さんが、道に迷つて隣町に着いたつちゅう連絡が来たさかい、彼女を拾つてから遠足先に向かうで」

今日も、朋絵さんの方向音痴は冴え渡つていた。隣町に着くまでに、普通は気付きそうなものなのだが。ついでに、重郎のバス酔いも絶好調で、バスが動き出す前から頭痛信号を受信しているようだつた。

「ふえ……。朝の『一』ラが出てきそうだ……」

「……あの、出す時は、通路の方に出してくださいね。くれぐれも、私の方を向かないようお願いします」

多香子さんは、いつ爆発するとも知れない重郎爆弾を抱えて、いくらか迷惑そうだ。通路を挟んで左側にいる明菜さんと、少し前方にいる佐奈さんは、早くも目を閉じて眠る態勢に入っている。景色を楽しみたい派の僕からすると、何度も見て不思議な光景だ。

先生の合図で……正確には、先生の合図のコノマ五秒前ぐらいになつて、バスはゆるやかに動き出した。

「…………」

いつなると、暇だつた。多分、ずっとこんな時間が続くのだろうと思つて買い込んで、結局今まで読まれなかつた小説が家に何冊もある。一冊ぐらい持つてきたら良かつたなあ、と思いながら、通路席から何とも不便な体勢で外を眺めていると、右の空席と僕の座つている席の隙間から、手が伸びてきて僕の右腕をとんとん、と叩いた。

「武田くん？ ちょっと戻り？」

「……ん、何？」

振り返ると、座席の背もたれの上から、これまで話した事のない女子生徒一人が、こすりに顔を覗かせていた。

「武田くんつて、部活動何してるのかな？ ……あ、私は、演劇部の近田ね。こっちが戸倉楓」「べつ、別に、入つて欲しいわけじゃないんだけどね！」  
「……楓は今、シンデレキキャラの猛特訓中なの。本当は痛い子じゅ

ないんだよ

「う、うん。……ええと、自然科学部に入ってるよ」

妙な空氣で話す一人に気圧されつつ、出来るだけ平静らしく答えた。一人は、その答えが不満だったのか、顔を見合させて、

「自然科学部って、何するの？」

と声を揃えて僕に尋ねた。

「……えーと。テスト見せ合つたり、紙飛行機飛ばし合つたり、変な装置いじつたり、あとはカラオケとかかな」

「へえー。実は、演劇部が人数不足でさ。少數精銳でも良いんだけど、四人じゃ選べる演劇の幅が狭すぎるから、今募集中だつたりするんだよー」

「あれこれ言わずに、早く入っちゃいなYO！ 馬鹿犬YO！」

「……楓は今、シンデレラキャラを模索中なの。本当は荒々しい子じゃないんだよ」

とりあえず、一人の目的は演劇部への勧誘のようだ。更に話を聞いていくと、来月の中頃に、演劇の大会があるらしい、それに向けて人数を増やそうと探し回っているらしい。

「……悪いけど、自然科学部は、一応毎日活動だし、無理かな」

「さ、寂しいよ……どうして？」

「楓はシンデレラ」、テレは冷たくされると出る、キャラを確定しようとしている。本当は、淡白な子なんだよ。……じゃあ、気が変わつたら、教えてね

「うん。ゴメンね」

一人は、僕から目を離して一人の後ろの席にアプローチ始めた。……。近田さんと、戸田さん。知り合いが二人増えたようで、二人には悪い事をしたと分かりつつも、とても嬉しく覚えた。

(…………?)

だが、何故か同時にどこか、違和感を感じるのだった。

隣町の交番で、無事朋絵さんを拾い、僕たちのバスは、他のクラスのバスに十分ほど遅れて駐車場へ停止した。

「時間がないさかいに、はよ割り当てのトコ行つて、昼ご飯の準備してき」

倉口先生にそう急かされ、僕たち五班は一番駐車場から遠い炊爨場所へと歩き始めた。七組は割り当ての場所が一つに分かれていって、五班だけ一番遠い場所に当たっていたのだった。

「五班。しゃーーーー！」

到着すると、班長の僕をさし措いて、明菜さんが号令をかけた。それに素直に従つてしまつ僕も僕だと思いながら、どうしてか一列に並べようとする明菜さんの近くに歩み寄る。

「今から料理を開始する。分担は……」

「あっ、私ご飯炊きたいです~」

「…………」

「あ、あの？ ご飯、私が……」

「ダメだ」

明菜さんが、冷静に朋絵さんの希望を却下した。

「米担当は、佐奈に頼む」

「うむ、了解した」

「わわ、私は？」

「待機」

米担当佐奈さん、待機担当朋絵さんに続いて、調理担当重郎、盛り付け担当多番子さんが任命された。いつもの事ながら、重郎に押し付けられている任務が一番重い。ただ、一昨日の一件から微妙に気まずさを感じている僕は、それについて触れないようにした。

「僕と明菜さんは？」

「昴は監視と指揮担当。私は味見担当」

「…………あー。なるほど」

平たく言えば、休憩とつまみ食いである。

「明菜さんが手伝いたいってさ」

「ん。それでは、代わって貰う事にしよう」

「…………班長に裏切られた…………」

独裁極まりなかつたので、班長権限で明菜さんを米担当にして、佐奈さんを調理手伝い担当にした。僕は、他に仕事もなく手持ち無沙汰だったが、じつと、明菜さんが水量を慎重に量るのを見ているだけで、癒されるというか、時間の経過が気にならなくなつた。

明菜さんの作業が終わり、僕が待機担当の朋絵さんに田を移すと、

「やうね。コンピュータ技術も、自然科学の一つと言えるわ」

そこには何故か優さんが居た。

「……どうして居るの？」

「あら、良い質問ね。食事を終えて、暇になつたからよ」

「早すぎた……じゃない？」

「いえすっ！ 家から炊き上がつたご飯を持ってきて、メニューを握り飯にする事で、化学的に時間を節約することができるのよ。いつつみらい」おー！」

化学的では恐らくないが、付き合わされる他の班員が可哀想でならない。

「久美と、春花さんは？」

スルーに怒つたのか、無言で優さんが指した先では、久美と春花さんが重郎の手伝いをしていた。

「……嫉妬します？」

「まさか」

朋絵さんの問い掛けに、僕はそう即答した。久美と重郎の仲に関しては、一昨日から考えて、祝すべきだと結論付けていた。元々僕にそういう気はないし、一人はお似合いだと思う。とは言え、完全に割り切れているという訳でもないのだが。

「春花さん可愛いですね~」

「……え？」

「ね。朋絵と話していると、知的その欠片もないようだ。この雰囲気が心地良いのよ」

「む、むむ……何だか馬鹿にされます？」

朋絵さんと優さんは、かなり相性が良いようだった。どちらも天然ボケキャラと言えばそつだから、多分そう言つ所で通じる物があるのだなつ。

「焼きそば、かーん！ セーーー！」

春花さんが叫んだ。

「まだ炊けていない……」

「先に、焼きそばだけで食べま……しよう」

お皿に盛り付けようとして、イカだらけの惨状に一度言葉を詰まらせながら、多香子さんがそつ言つて、旨を呼んだ。

「でもそれだと、ライスが余るんじゃないかな？」

「あら。それなら、塩結び用の塩と味調味料があるわよ。それで食べましょう」

「それはありがたいけど、イカ焼きそばはあげないからね」

「……呪われると良いわ」

優さんは、非科学的な捨て台詞と調味料を置いて、珍しく走り去つていった。

久美と対角線上に立ちながら、明菜さんが恍惚とした表情を浮かべて、

「……イカイカしている。とても素晴らしい」と呟いた。

「これってただイカ焼きですよね？ そばはどこにあるんですか？」

見た目がボロボロで、食べる前の下馬評はかなり低い評価だったが、食べてみると中々の味だった。胡椒と塩に、イカの旨味が絡み、そこに少しだけ入ったソースが香りを付けるという構成で、焼きそばでは全くなかったが、全員『ご飯が炊けるまでに平らげてしまつた。久美と春花さんの分は当然なかつたのだが、多香子さんや明菜さんにちょっとずつ分けて貰つて、一人は美味しい美味しいと騒ぎ回つていた。

『ご飯が炊けておにぎりを作る段になつて、優さんが帰つて來た。

「いえす！ 昆布を提供するから、焼きそばを食べさせなさい！」

「昆布は貰うけど、焼きそばもつないよ」

「なつ……。……六一つ……」

さすがにおにぎりだけでは、無味乾燥として口が寂しかつたのだと思う。でも残念ながら、人を呪つた優さんに『えられたのは、またもおにぎりだった。

「『ご飯を貰つてましたー』

余りある『ご飯を全部握つて、全員で食べ切つた。他の班が『ご飯を残したりしているのに比べると、かなり上品に出来たと思う。その実態は、かなりアレだが。

少し時間が残つたが、僕たちはそれで談笑し合つて時間を過

「こ」した。

食後の腹<sup>こ</sup>なし用なのか、班の団結を高める為なのか、食事の後はクラス・レクリエーションだった。班別に配られた三つの紙に書いてある指令を、全部クリアするまでの時間を競うという簡単なものだ。

「よつし、やんぞー！」

確実に一班になれる筈だったのに、好奇心から五班に落ちてしまったという過去を持つ僕たちの士気は、かなり高かった。第一の指令『倉口先生を見つけよ』では、明菜さんが電話で呼び出すという強行策、第二の指令『虫を三種類捕獲せよ』では、蜘蛛の巣で三種類を一瞬で捕まえるという奇策をそれぞれ用い、他の班とは比べ物にならないような早さで第三の紙を開いた。

第三の指令は、レモンティーを買ってこいというおつかいモノだつたが、これも奇跡と言つべきか、朋絵さんが未開封のレモンティーを持っていて、即座にクリアだつた。

「……なんか詰まんねえな

始まる前あれだけ興奮していた重郎も、どの班よりも先に集合場所へ向かう頃になると、さすがに冷め切つていて。優勝の証として小さなスナック菓子を貰つても、僕たちの心は晴れなかつた。

(.....)

優勝すれば良いという訳ではないのだと、僕は改めて思い知らさ

れた。

「…………」  
「…………」  
「…………」  
「…………」

家に帰り着いた僕を出迎えたのは、僕の部屋のベッドに不機嫌に腰掛ける、誼絵さんの姿だった。

## 間奏・1（後書き）

小話でした。次回から、『駒黒佐奈？』に入ります。

諭絵ちゃんの話をもとむねど、つまつぱいひだ。

昨日の謎の車については、謎しかない。目的も分からぬし、どこから現れたのかも不明のままである。ただ、少なくとも、春花さんの家を取り囲んでいたのは間違いない。一度捕まつて解放された明菜さんを除く僕たちの中の、誰かが狙われているのには違ひない。そして今の所、それを回避する術はない。捕まる機会は、いつにでもあるのだから。

「登下校は、二人以上でした方が良いわ。登校は、朋絵と一緒にしなさい」

「うなると、かなりの大事だ。どこからこんな非日常に迷い込んでしまったのだろう。鈍い僕にとって、あまり環境がおかしそうのは、良くないとと思うのだが。

誼絵さんは、どうしてか不機嫌のまま、家を出て行つた。

土曜日。僕は、買った筈なのに買つていらない事になつてゐるノートを求め、商店街の百円ショップ『SYOSO』を訪れた。何でも店名の由来は『勝訴』であり、昔、実際の販売価格が百五円であるのに、百円ショップを名乗るのは誇張表現である、という理由で起こされた裁判に、数ヶ月の闘争の結果勝利した事だそうだ。客を小馬鹿にしたような店名だが、それでも年々大きくなつていいくのは、その商品の質が高いからに他ならない。

僕が二冊セツトのノートを胸に抱えながら、五百ページもあって税抜き百円の英和辞典を眺め、二つぐらい購入しておくと使い出があるかも知れない、などと考えていると、隣から見覚えのある顔が、その辞書を手に取った。

「……うん？　ああ、君か」

佐奈さんだ。佐奈さんは、僕よりも先に僕に話しかけると、手に持つ辞書をペラペラとめくらしながら、

「枕にちゅうじゅう良いのだよ」と言つた。

「枕……。確かに、そうかもね。使つた事ないけど」「無論、猫のだ。私は使わない」「……また騙された」

時々、佐奈さんのいうことにやられる。多分、僕の方がちょっとずれていて、そこを上手くからかわれているのだと想つのだが、逆にそのせいでどうしても引っ掛けてしまう。

「騙すとは心外だな。君が勝手に勘違いしているだけだう」「……。猫の枕を買いに来たの？」

僕がちょっと意地悪げにそう訊くと、佐奈さんは少し目を細めた。

「猫は飼つていらないんだ」

「え？　……嘘吐きだなあ」

「私の妹は猫っぽいからな。猫と呼んでいる」

そう言えば、自然科学部員の家族構成はよく知らない。佐奈さんは、妹が居たのか。

「へえ……。妹さんは、幾つなの?」

「君にはやらんぞ。……私の一つ下だ」

という事は、中学三年生か。無邪気な佐奈さんは、想像にかなり難い。どんな子なんだろうか。可愛いのかな。

……。危ない。またおかしな方向に走りかけた心を修正した。

「そつか。……猫、ちょっと撫でてみたかったんだけどなあ

「ふむ。私は猫は嫌いなのだよ」

佐奈さんは、もつと皿を細める。でも今度は、すぐに表情を崩して、

「さて、そろそろ会計せねばな」

と言った。僕もそれに従つてポケットに手を入れる。……あれ、ない。ポケットの中には財布はなく、そういうえば入れた記憶もない。

「……あー、佐奈さん?」

「うん?」

「財布忘れちやつて……良かつたら、お金貸してくれない?」

佐奈さんは、少しの間硬直した。

「……なんだ、私に金をせびりつと詰つのか」

「そうじやな……くもないうけど、同じクラスの誼でさ」

「それは、貸す方のセリフだぞ。……ノートだけか？」

「うん。ありがとう」

多少の皮肉を言いながらも、思つていたよりもすんなりと貸してくれた。

僕は何度もお礼をしてから、佐奈さんに押されてレジへと並び、会計を済ました。その時後ろを見返しても、もう佐奈さんは居なかつた。つぐづぐ、不思議な格好良い人である。

その後、家に財布を取りに返つてまた商店街へと戻つたが、佐奈さんの姿を見かける事はなかつた。

日曜日。毎日飯を終えた一時ぐらいから、すっかり忘れ掛けいた化学の宿題に取り掛かつた。原子番号と元素名を覚える……。単純作業とは言え、暗記力に乏しい僕には中々に難関で、課題だった二十番まで覚えるのに一時間を要した。

次に、英語の宿題を始める。先生に言わせれば、「I love you.」を日本語訳する時のような感覚で他の英文とも当たれるようにすべきであり、その為には大量の読解をこなす必要があるのだそうだ。お陰で、宿題を終える頃には四時過ぎになつていた。

（微妙だなあ……）

四時過ぎだと、遠出は出来ない。かといつて近場に用事はないし、何もせずに居るには暇が多くすぎる。予習するようなタチでもないし、ゲームするような気分でもない。分かりやすく言つて、向こう一時間ほど手持ち無沙汰だ。

メールでもしようかな。そう思つた所へ、電話の着信音が鳴り響いた。発信者は……。

「 もじもじっ? 」

『 ..... おはよーひらいでこます』

発信源は多香子さんだった。珍しい。ヒツヨツ、初めてである。

「 もつ夕方だよ? 」

『 おはよーひらいでこました』

「 ..... うん。ええと、用件は? 」

『 用件 ..... はー、もうですね。用件は、明日の時間割なのですが... 』

『 ... 』

どつも渾身のギャグだつたらしく、少し釈然としていない口調で、多香子さんは明日の時間割の詳細について尋ねた。どつやう時間割表を失くしてしまったらしい。

『 英語が一時間もあるのですか? 』

『 英語と、リー・ティングかな』

『 なるほど..... 分かりました、ありがとうございます』

『 どう致しまして』

電話を切る。

と、すぐにまた着信があった。

『 お弁当、作つていらます』

『 え..... ? 』

『 飯わんの分持つてこいつと思こます。では

ブチ。今度は向いから電話が切れた。

ええと。お弁当。持つてくる。明日から?

(……わあ)

マイペースといつのは、多分こうこう人の事を言つんだらうなあ、  
と思った。既に家に居ない母親へ、明日のお弁当は要らないという  
メモを書いておく。それから、一応連絡しておこうと思つて五班の  
メンバーにメールを送つたのだが、全員から知つていての返信が  
来た。中々、多香子さんもアクティブである。

色々な事が終わつてしまつたが、変わらず明日も楽しみだ。朋絵  
さんとの登校も、もちろん含めて。

(今日は早く寝よう……)

そう決め込んで、僕はかなり早い夕餉の支度を始めた。

翌日の朝、僕が朝「はんの片付けを終えた頃に、朋絵さんは訪ねてきた。

「ちょっと、早くない？」

「そうなんです。どうせ道に迷うからって早めに出たんですけど、今日は迷わずに来れました～」

「……ことしながら、朋絵さんは誇らしげに自分の胸を叩いてみせる。確かに、朋絵さんが道に迷わないなんて、結構な奇跡だ。

「……、地図を頭に思い浮かべてですね～……目を閉じて、その地図通りに歩いたんです。春花さんに教えて貰つたんですけど、本当にでした～」

「……明日からは、普通に来た方がいいよ

「へ、どうしてですか？」

「いつか病院に着きそだし」

春花さんも、「冗談なら「冗談で、もつと分かりやすく言つて欲しい。朋絵さんは確かに死ななさそうだが、それは殺しても死ななさそうなのではなく、殺されそうにない事に起因しているのだから。とりあえず、行く準備は整っていたので、少しの間玄関で立ち話をした後、学校へと出立した。防犯の事を描いても、朋絵さんとの会話は楽しく、多少人の目を気にしなければならない点を除けば、素晴らしい登校と言つて間違いない。

「最近、全然雨が降りませんよね～。どうしゃったんでしょう～？」  
「んー。……確かに。でも、今日辺り、降るかもよ？」

と、僕は太陽を覆う薄暗い雲を見上げた。思えば入学式以降、一度も雨が降っていないのだから、そろそろ降らない方がおかしい。

「体育、お休みですかね？」

「僕たちはグラウンドだから、そうかもね。女子は、体育館じゃなかつた？」

「ああ……そうでした。何だか、雨が降っても体育が休みにならないと、損をした気分になりますよね」

否定すべきなのだろうが、僕は大きく頷いた。土曜日に来る祝日と、日曜日に本州へ上陸する台風、それに体育館体育時の雨は、合わせて三大無駄と呼べるだろう。特に台風に関しては、テレビの前で、ゆっくり来い、ゆっくり来いと念を送るほどである。

「体育、嫌いじゃないですけどね~」

「そうなの？」

「はい！ 友達も増えましたし、楽しいです。……疲れますけど」

一瞬不思議に思った。けれどそれは、僕が学校に対して抱いている感情と、実は全く同じなのだった。

「……うん、僕もそうかも」

好きな学校が休みになる事を切に願うのは、多分、僕たちがそれを学生の本分だと思い込んでいるからだ。あるいは、思い込むことこそが、本分であろうと信じているからなのだ。学校全体にそんな空気が流れているから、あながち独善的とも言えない。

……朝から考える事でもないか。僕は、一段と黒く見えるアスファルトを、だんだんと踏みつけた。

朝の晴々しい充実した気分を、これ以上ない穩便なやり方でずっとしてくれたのは、一時間目の化学の授業だった。

「えー。先週、えー、宿題を出しましたね。えー、抜き打ちで当てますから、えー、答えるように」

これは、非常にいけない。先生の声は、どうやら脳に対し、眠るよう指令を出すようだ。少し前に読んだ本の知識を借りれば、メラトニンの分泌を大いに促しているという事になる。先生はこんな所で詰まらない初步化学の授業などしていないで、ただちに実験所へ移るべきだ。

「えー。十八番。おはこですね、えー。では、えー、武田、えー、くん。原子番号十八番は？」

突然当てられて、僕は少なからずうろたえた。ええと、十八番。十七番が塩素だから……。

「アルゴン、です  
「その通りです」

何故か今は脳に心地よいチョークの音を響かせて、先生は黒板に大きくAと書いた。良かつた。どうも、一つ三分を掛けた自宅学習は、無駄にはならなかつたようだ。

「アルゴンは、えー。八偶則により、えー、非常に安定しています。えー。他の物質とはあまり、えー、結びつかないという事です。え

一、余談ですが……

始まつた。どうやら化学の先生は余談好きらしく、先週も授業の三割は余談という程の頻度で授業に取り入れてきている。先生は A-rと書いたすぐ下に、先ほどよりはちょっと控え目に、アルゴンフッ素水素化物 (HArF) と記した。そして、HArF は、低温のヨウ化セシウムの……と語り出し、僕の意識もそこで途切れだ。

「……いや、だからよ。なんで俺らが、好き好んで実験室で昼飯食わなきやなんねえんだよ」

重郎が、半分呆れた様な表情で僕たちを見回した。

「文化部でも、昼間の活動は認められてる」

「俺が言いたいのは、そういう事じゃなくてよ。……不潔だろ?」

「あら、失礼ね。実験の為に、化学実験室はどこよりも清潔なのよ

?」

正論のような気もしたが、実験という言葉を聞いて口の食欲はより減退したようだった。特に春花さんは、露骨に舌を出して嫌々と首を左右に振っている。

「……今日は、手巻き寿司セットをいじ用意しました」

至つてマイペースな多香子さんが、口論と低テンションを全く気にする様子もなく、重箱のように大きい弁当箱を実験机に開ける。……。海苔。保冷剤に囲まれた刺身類。同じく保冷剤に囲まれた酢の香りのする「」飯。……。

「多香子嬢は……中々こいつ、凄いのだな

さすがの佐奈さんも驚きを隠せないと見えて、酢飯を何粒か取つては口に運んで、むむむと唸つた。学校で手巻き寿司とまで来ると、僕には異次元過ぎて逆に大丈夫な気がしてくる。そんな冷静な中、皆を見回してみると、さつきとは打つて変わつてポシティブな表情になつていた。

「手巻き寿司なんて、久しぶりさね~」「わ~。マグロもありますよ~」

「イカも、ある

「皆さんの、好きそうな物を詰めてみました」

多香子さんの解説も聞かないままに、皆は思い思ひに頂きますと叫んで海苔を手に取り、酢飯を奪い合い、刺身やレタスを巻いて食べ始めた。僕も、あまり余裕を持ちすぎると残り物ばかりになるので、争奪の相手の居なくなつた海苔を取つて、誰も必要としなくなつた酢飯を敷いた。

「……おすすめは?」

「胡瓜巻きが、一番ですよ」

一番人気のなかつた胡瓜は、わざわざ別のタッパに分けて入れられていた。それをあえて薦めるのは、余らないようなのか、河童巻きが本当に一番美味しいからなのか。どちらにしても地味には違ひ

なかつたが、今更嫌だと言ひ訝にも行かず、僕は胡瓜だけで巻き寿司を完成させた。

「……見た目には、ちよつと地味だよね  
「味も、地味かと」

何やら豪華な海老巻きを作つてこる多番子さんが、「ひちをひらりとも見ず」に言つ。

「だ、騙された……」

「騙してはいません。ただ、地味なのが一番だという事です」

「じゃあ、どうして海老巻いてるのさ」

「……一番を常に選んでいては、いけませんから」

ちよつと言い淀んだのは、恐らく僕の疑念が正しいからに他ならない。つまりは、胡瓜巻きは僕に押し付けられたのだ。可哀想な僕と胡瓜。僕は、同じ身の上である胡瓜巻きに、がぶりと喰らいついた。

……。美味しいのだが、衝撃的な何かはやつぱりなかつた。さつさと食べ終えて、僕は一本目の製造に取り掛かりと海苔を手にした。

「……胡瓜しかないっ！」

既に、刺身類が入つていた箱は、暴君蹂躪、天災多発により大葉とツマだけという惨状になつてあり、他のレタスや卵焼きなども、全てどこかへと消え去つていた。残っているのは、タッパ胡瓜。力ツバ胡瓜っぽくて風流だ、などとは言つていられない状況である。

「おめでとうござります。胡瓜に縁があるんですね

そんな縁は嫌だ。

だが、空腹の音に勝てるはずもなく、僕は一本目、そして二本目も胡瓜巻きという、胡瓜地獄を体験するのだった。

社会科教室を掃除しながら、結局雨を降らす事なく通り過ぎていった雨雲を、窓から眺めた。

いくら何でも、雨が少なすぎるのではないか。入学が、先々週の月曜日。今日まで、十五日間も雨が降っていない。どんよりとした事さえ、今日を除いてなかつた気がする。何か良くない出来事の前触れではないだろうか、と、妙に僕の勘は昂っていた。

……。ああ、それよりも、先にしておきたい事があった。

「ね、重郎」

「……ん。何だ？」

あの一件以降、僕と重郎の間には、妙な溝が出来ていた。最初から、二人が付き合つのなら、それで良いと思っている。久美を想つていないと言う訳ではないが、だからと言って一人を祝福しないといふ法はない筈だ。

「僕は、二人の関係、良いと思うよ」

「…………」

「二人の事、応援してるし」

「……それ、すげえずりーよ。……。ありがとな」

するい。その言葉の真意は分からなかつたが、僕の差し出した手を、重郎は握ってくれた。多分、これで良いだろう。未だに残る、

僕と久美との見えない溝よりは、ずっと目立たなくなつた。

総指揮担当の明菜さんに指差されないようにと、僕たちはまた、それぞれ掃除へと戻つた。

七組五班が化学実験室に入った頃には、さも当然のように久美達は揃つていた。

「……三人とも、掃除とかないの？」

これまで、優さんに先んじて到着できた例がない。本人は、化学的に当然だとか、物理的に可能だとか言つているが、僕たちが教室から直行してくるような口に、掃除をしてから来ていて先に入つているなんて、現実的に無理だ。何か、反則的な、越権的な、背理的な事をしているに違ひない。

「週に二回あるよ、勿論」

だが、久美は即答した。

「でもさ、それだと、いつも先に来てるのっておかしくない？」

「いえす！　いい質問ね。それはごく地学的に、掃除場所を化学実験室に限定する事で、可能になるわ」

「ああ、なるほど……部活に、体張ってるね」

相変わらず地学的ではなかつたが、この答えには納得せざるを得なかつた。しかし、昼食もここ、掃除もここ、部活もここでは、その内に化学実験室は、彼女らの基地になつてしまつのではないだろうか。

「当然よ。リーダーは、常に最初に来なければいけないものなの。

……それより、ちょっと聞いて欲しいのだけど」

「そうかなあ。何?」

「……あなたの所の子たち、ちょっと個性的すぎるのよ。私、ここ二週間で、自分がどんどん丸く縮まつていくを感じているわ。これでも、中学生の頃は超絶ムードメーカーとまで呼ばれて……」

……。ただの愚痴だつた。でも、優さんを含めて自然科学部には、個性的な人材が揃っているような気がする。こんな所なら、没個性も個性となつて、僕でも輝ける……のかも知れない。少なくとも、今の所その兆候は全く見られなかつたが。

午後五時。かなり前から部費も尽きていたる為、談笑の内に解散となつた。部費のない自然科学部なんて、ビうじょうもない気がする。

「……あ、そうだ。佐奈さん」

たまたま思い出して、僕は佐奈さんを呼び止めた。

「ん。何だ」

「お金、返しとこいつと思つて」

と言いつつ財布の中を探つたが、どうも穴の開いた硬貨が見つからない。かといって、大きい硬貨もないようで、僕は言い出しておいてやつぱりなかつたという恥ずかしい事態を避けるため、止むなく百円玉を一枚渡した。

「おや、利子が付いたか。ルーラルーラでも買いに行くかな」

佐奈さんが重度のコーラ病だという事は、既に周知の事実である。

特に最近のハーブームはルーラ・コーラ・ジュースらしく、僕も朝から飲んでいる姿をよく見かけていた。そのせいか、佐奈さんの事を数学の先生が、ルーラーと呼ぶようになった。

「最近、安い自動販売機を見つけたんだよ。君もどうだ？」  
「遠慮し……あ、やっぱり行こうかな」

僕は、誼絵さんの言葉を思い出して、そう言い直した。途中までも、一緒に帰ればお互いの安全が確保できる。それに、佐奈さんと一緒に歩くと、こう、自分のランクが一つ二つ上がった気分になる。ブランド物のバッグを手にしているような感じだ。

「なんだ、はつきりしないな  
「行く、行くよ」

僕はそう、大いに頷いた。

ルーラ・コーラ・ジュースは、新興飲料会社ルーラの主製品で、このジュースだけで各地に自動販売機を置けるほどの恐ろしい人気を誇っている。一缶百円という、安いとも高いとも取れないような価格も、毎日飲もうといつような人々にとつては、かなり安い物なのだろう。僕は、名前通り過去の物になってしまった力コ・コーラを昔から愛飲していたので、ルーラ・コーラ・ジュースに対してはどうちらかと言つと、侵略者を見るような目を向けていた。

「どうやら、頭痛にも効くらしい。私も、こここの所頭痛に悩まされていたが、ルーラコーラを飲むといくらか鎮まるからな」

「へえ……」

「君も、一本か三本か買い溜めて置くといい

とは言え、珍しく興奮氣味に話す佐奈さんを見ると、敵愾心も引いていくような気がする。僕にとつては、日常の中ですらどうでも良い部類に入るような事が、こつして熱弁を振るう程に重要な思えるような人も居るというのは、どこか不思議だ。

「ちなみに、いくらなの？」

「うむ。一リットルが百五十円だ」

……。牛乳とお酒以外で、一リットルの自動販売機なんてあったんだ。

「……よし、着いたぞ」

佐奈さんに言われて顔をあげると、そこには、ルーラコーラ集合

住宅と呼んでも差し支えないほど、ルーラ・コーラ・ジューク専門自動販売機の密集地が広がっていた。左端から、『八十五リットル・ミニマムサイズルーラコーラ』だけの自動販売機、『一百三リットル・スマートルーサイズルーラコーラ』だけの自動販売機、以降、三百五十、五百、千と続いている。果たしてこれだけ設置するほどの需要が、ルーラ・コーラ・ジュークにあるのだろうか。

「とりあえず……」

と、佐奈さんは迷わず一步踏み出して、千ミリリットルの自動販売機の前に立つた。そして、片手で器用に樋口一葉を投入すると、ダース買いのボタンを押す。すると何やら、自動販売機の内部で騒がしい動作音が響き、しばらくしてから完了を知らせるピー、という音が鳴った。下の取り出し口を佐奈さんが開くと、そこにはダンボール箱が一つ、入っていた。

「いやいやいや……ダース買い？」

「そうすると、割り引いてくれるのだよ。千六百円になる」

百五十円が十一個だから……通常だと千八百円だ。一百円の為に、ダース買いする佐奈さんは庶民的である……とは、目の前で段ボールを抱える姿を見ては言えない。

「絶対佐奈さんだけでしょ。そんな買い方するの」

「ダース買いと言つボタンを付けるぐらいだ。そうでもないと思うぞ」

なるほど、一理ある。でも、大人たちが列を成して、この自動販売機でジュースを箱買いしていく様子は、見たくも想像したくもない。

……と思うが、ここまで来ると、一種の宗教なのではないだらうか。

「や、君も早く」

そう思い始めるとい、佐奈さんの言葉が悪質な勧誘の言葉にしか聞こえなくなつた。

「ん……まだ家に沢山あるし、良いや」

「む。 そうなのか。 無駄足を踏ませてしまつたな」

「ううん、大丈夫」

多少の嘘は仕方ない。 何だか、ここでも買つてはいけないと、浮き立つていたはずの心が警鐘を鳴らしているような気がするのだ。 何が僕をこんなにも不安にしているのかは分からぬが、ひとまず心に従つべきだ。

「そりか? .....君の家は、どうだつたかな」

「ん、あっちだけど」

「すると、逆方向か」

また明日。 それだけ言って、佐奈さんはさつと歩いて行つてしまつた。

(.....嘘、バレてるなあ.....)

僕は、良心を深く抉られたような心持で、反対方向へと歩き始めた。

幸い、帰り道に怪しい車を見かける事はなかつた。 どこからも連絡は来ていないので、まずは大丈夫だとは思うが、ちゃんと皆の無事

も祈つておぐ。

それにしても、ふと不安に駆られたからと言つて、大変な事をしてしまったものだ。折角、佐奈さんと仲良くなるチャンスだったのに、わざわざバレる嘘を吐いて、距離を置いてしまった。明日、謝る。そう恨みに持つような人でもないはずだ。

そう思つと気が軽くなつて、軽くハミングまで奏でながら勢いよく家の扉を開いた。

晩御飯を食べた僕は、自分の部屋へと入つて、すぐに携帯電話を開いた。新規作成、宛先は優さんである。

「……やっぱり気になるよね」

そうひとりごちた僕が優さんに送つたのは、ここ最近続いている雨が降らない案件についてである。謎といえば謎で、思い出す度に気になるので、今の内に解消しておこうと思つたのだった。

しかし残念な事に、優さんからの返事は、まさに拍子抜けするような物だった。

『一週間程度の晴天は、珍しくないわ』

……。何だ、そつなのか。継いで、天気予報によると明後日は雨だと教えられると、僕は雲模様についての興味を一気に失つた。知らぬが花、とはこう言つ事だろうと思つた。詰まらない。

お礼のメールを送つて、ベッドに寝転がる。……時計を見るが、まだ八時半だ。寝るには、あまりにも早い。

(そう言えば、この時計……)

と、僕は、目覚まし時計が、どうしても鳴らない事を思い出した。前の時計は目覚まし機能だけが壊れ、今の時計に至っては最初から目覚ましが動かない。こんな事も、偶然の一致で片付けられる物だらうか。少なくとも、最近のこの一つの時計以外には、目覚まし機能だけが動かなくなつたなどといつ事は、聞いた事がない。

……解明したい。だけど、また新しい物を買って三度続いてしまつたら、あまりに怖い。物理的な、実際的な怖さではなく、心靈的に、じく精神的にダメージを受ける事になる。まさかそんな事はあるまい、と思うには思うのだが、そこに行き着くと最後、それならあえて買わなくても良いじやないか、という結論に辿り着いてしまう。しかし、気になる。

(……やつ言えれば、誼絵さんの携帯の電話番号、知らないなあ……)

不思議な事、ことミスティー属、オカルト系については、僕の中では誼絵さんと相場が決まっている。時間が巻き戻るといつ、普通なら理解不能で混乱までするような不思議にさえ、誼絵さんは明確な答えを与えてくれたのだから。

(でも、朋絵さんに電話して繋いで貰つていつのもひつとアレだし)

あの邪心のない朋絵さんが、そこまで思い至るかは分からなかつたが、逆に言えば朋絵さんにまでロリータ・コンプレックスのレッテルを貼られたら、救い所がないといつ事だ。……いや、好きなのは口りな幼女ではなく、ツンデレな美少女である。金髪で、ツインテールだつたりするとかなり良い。

自分でも思考の逸れて行くのを感じたので、軌道修正ついでに目覚まし時計を手に取つてみた。

(……やつぱり鳴んないな……)

時間を合わせても、試しに『切』にスイッチを変えてみても、叩いても撫でても、全くなる気配すらない。あるいは音がかなり小さいのではないかと思い耳を近づけてみたが、遠くで悲しげに鳴く鳥の声が聞こえるばかりで、ベルの音は全く聞こえなかつた。

いくらお小遣いが多いからと云つて、高校生の僕にとつて目覚まし時計は、中々に高価だ。悔しい。だが、よく見直すと、取扱説明書もどこかお座なりな説明しかしていない上に、保証書も付いていない辺り、もしかすると悪質な詐欺だつたのかも知れない。会社名は……JR電子。……うわあ、聞いた事がない。

(……泣き寝入りしかないかな)

別段、時計として難があるわけではない。もう一度見直すと、時間は九時過ぎへ変わつていた。何も、する事がない。泣き寝入る勢いで、寝入つてしまおうと、僕は布団を被つた。

十分ほど目を閉じて、やつと眠気が襲つてきてくれた頃になつて、僕の脳裏に後悔が走つた。

(……今日、ラジオの日だつた……)

そう言えば、先週も聞いていない。起き上がりつてハードディスクに落とすだけ落としておこうかとも思ったが、折角良い感じに温まつた布団から出るのは億劫と思い直して、結局そのまま寝に入った。

「……あなたの為に、夢に出てきたんじゃないの。勘違いしないで」

……。田の前には、金髪のシンデレラっぽい女の子が立っていた。夢の中の人物が夢だと教えてくれるのは、明晰夢の内なのだろうか、などと思いつつ、僕は相槌のよつに疑問符を浮かべる。

「え？」

「辺りを見回してみなさい。一面の花畠でしょう」

言われるがままに、きょろきょろを頭を振る。おお、確かに、ひまわりがどこまでも、地平線の彼方まで凛として咲き乱れている。僕は小走り、歓声を漏らした。

「でも、妙だとは思わない？」この花たちは、皆違う方向を向いている

……そう言われてみると、よく言われるひまわりの性質に反して、片方が東を向けば、片方が西北西を向いているようだ。太陽は……一応、真上にある。だけども、上を向いているひまわりは一つとしてない。

「確かに、そうだね」

「……はい、今日はおしまい。別にあなたの為じゃないの、これは本當よ」

少女は、謎のニアランスを含んだ、謎のセリフを残して唐突に消えていった。

……金髪で、シンデレラっぽい。これは、僕の理想像に近い。だが、

僕はもつと勝気な方が良いし、何よりポーネーテールところのが気に入らない。夢の中でぐらり、ままならない物か。

少女が消えても、周囲三百六十度を囲うひまわり畠はそのままだつた。……。周囲がひまわり畠となると、一体僕はどうに居るのだろう。どこから来たのだろう。足元を見下ろしたが、足元には靄が掛かつて、よく見えなかつた。

しばらく、放心する。その内、どこからか音が聞こえてきた。苦しそうな音。すぐにその音は、呻き声だと分かつた。更に耳を澄ますと、それは自分の呻き声だつた。

……全身びっしょり汗を搔いていた。

悪夢ではなかつた。だが、無性に苦しい。ひどく渴きを感じて、こんな時によく常備してあるスポーツドリンクを一口飲むと、やつと心が落ち着くような気がした。

時計は淡白な音を立てつつ、十一時ちょうどを示してゐる。

(……はあ。眠つて疲れるなんて、馬鹿みたいだよね)

ダメ押しにもう一口喉に注ぎ込んで、僕はまたゆつくり、枕に頭を預けた。

田覚めは思いの外爽快で、深夜に一度目が覚めた時の不快はどこかへと飛んでしまったようだつた。

朝ご飯を食べた後、いつもよりかなり早くに家を出た。朋絵さんに毎日通わせるのはあまりにも思いやりに欠けるし、何より冗談が本当になつて、朋絵さんが車に轢かれないとも限らない。それを防ぐには、やはり、こちから出向くべきだつた。

メールでその事を伝えつつ、朋絵さんの家の道を歩いていく。なるほど、空がやけにどんよりとしている。明日辺りに雨が降るだらといつ天気予報は、どうやら当たりそうだ。

「あ、おはよー」  
「あ、おはよー」

朋絵さんの家の前に着くと、もう朋絵さんは支度を終えて道に出てきていた。

「うふ、おはよー」

軽く会釈をして、一人で歩き出した。まだ一日田なのこ、まるで慣れているような感じがする。自分で言うのはどうかとも思つが、朋絵さんとは相性が良いくような気がしてした。

（……と言つたか、朋絵さんが凄い人なのかな。優さんとも仲が良さそうだし）

そう思い始めると、何だか羨ましくなつてきた。それだけ「ミコニケーション能力があつて、憎まれない性格だつたら、敵を作る事もないだろう。それでいて楽しく過ごせるなら、これ以上の事はない

い。

……。今になつて再び、昨日の「一ラの事への後悔が盛り上がってきた。結果飲まないにしても、とりあえず買えば良かつたのだ。どうしてわざわざ、バカなよいつな嘘を吐いてまで買わない事を選んでしまつたんだらう。

「はあ……」

ああ、しまつた。これ見よがしに溜め息を吐いてしまつた。

「へ

「へ

「へ…………あれ、どうかしましたか？」

「う、ううう。何でもないよ」

「ついこのつ微細に気付かない所も、朋絵さんの魅力の一つかと思つ。それから、どうかしましたが、と訊ねて来るその顔も、やつぱりどこか猫っぽくて可愛い。えへへ。えへへ。

「…………あの～。顔、にやけてますけど……」

「へ……あ、ああ、うん、ゴメン」

……僕も学習しないなあ。結局そこは落ち着きつつ、どことなくした空を見上げた。

「船費も取き、時間だけがある……」

放課後、いつも通り集まつた僕たちに、優さんは普段よりもかなり情熱的に、声を張つて訴えかけた。

「今日は、中間試験へ向けて、勉強会を行つわ！」

「え、えすけーふ、おーけー？」

「いえす！……あ、いや、駄目よ」

春花さんや重郎のような常連が、いつも通り反対の意思を口々に叫んだ。逆に多香子さんや明菜さんは、既に決まったものとして力バンから教科書を出し始めている。何と言つか、足並みが揃わないにも程があると思つ。

「はいまずは、三角関数」

化学実験室の大きな黒板に、優さんは大きな円を描いた。反対意見はなかつた事にしたらしい。そうなると、春花さん達も従わざるを得なくなつたようで、一人は渋々教科書を取り出していた。

五分ほど優さんの講義があつた後、わざわざ用意したらしい問題プリントが配られた。…………。

「…………ひつ。…………酷いわね」

…………。全体的に、優さんが声を裏返すほどに酷い成績だった。中でも久美と僕の低得点は群を抜いており、満点だった佐奈さんの足を引っ張りまくつていた。

「そうね。三十度と四十五度の正弦余弦ぐらいは、覚えておけば良いわよ」「…………うー、言語難しい、言い直し希望！」「…………三分のと四分ののサイン」「サインぐらいは、覚えなさ

い

「更に難しくなつたやん……」

三角関数は、どちらにしても難しいと思つ。合成やら和積の公式やら加法定理やらの前に、まず「サインとサインの値の正負が分からぬ。単位円を描けと先生は言つたが、単位円を描けば良い事すら忘れてしまつたのは学生の常なのである。

「…………面倒ですね……」

僕のすぐ隣で、僕より先に多香子さんが本心を口に出した。とても小声で。優さんに聞こえないよつと。……中々策士だ。

「どうあえず、三角関数を完璧にしないとな」

優さんはそつと黒板にもつ一つ大きな円を描き始めた。

……。三角関数が完璧になつた。科学部としては、数学というのはちょっと違うなあ、と思っていたのだが、優さんによれば数学も自然科学の内らしい。いや、だからと言つて、部活動でテスト勉強をする理由になる訳ではないのだが。

「いえす……一応言つておくれど、明日もつて事はないから、ちゃんと来るよつと」

優さんは、一応勉強会が不評だつた事に気付いていたので、勉強会は今回が最初で最後という事になった。

さて。昨日の事もある。僕は、早くも一人で帰つとする佐奈さ

んを引き留めた。

「ルーラ・コーラ・ジュース、買いたいんだよね」

「ふむ？……ふむ、なるほど。気を遣つていいなら、別に構わないのだが」

「いや、普通に、欲しいんだよ」

昨日家に在庫があると書いた事には矛盾するが、既に嘘はバレている筈だから、むしろこの方が潔くて良い。佐奈さんはいくらか考えた後、承諾してくれた。

「優嬢の熱意にも、困ったものだな」

「そうだね。……でも、佐奈さんは頭良いから、羨ましいかな」

「そうか？ 私より、明菜嬢や優嬢の方が、ずっと頭脳派だよ」

昨日と同じ道を歩きながら、僕たちはそれなりの距離を取りながら話した。

「……皆、凄いなあ……」

「何。久美嬢の様なのも可愛いものだ。……君の場合、ちょっと難があるが」

「うわあ、酷い。でもまあ確かに、勉強が出来るか、気さくか、どちらかは持つていないと先々困る氣もする。その点、どちらも持ち合わせる重郎や、春花さんや、佐奈さんは偉大だ。」

そのままいくらか歩いていると、ある時珍しく佐奈さんの表情が大きく変わった。

「……あ、お姉ちゃん。と……あ、彼氏さん？ ついに脱却？」

それと同時に、向こうから、どこか朋絵さんに似た中学生ぐらいの女の子が声を掛けてきた。

「いや、違う  
「そつかー。ま、お姉ちゃんだもんねえ」

女の子は佐奈さんを見つめながら、小ちく笑った。佐奈さんはちよつと不機嫌そうにしながら、僕に、

「妹の紗江だ。ほり、前に話した……あれだ」

妹……と言ひうと、S y o s o で聞いた猫っぽい妹の事だろうか。ああ、そう言えれば、朋絵さんに似ていると思えた辺りが、どこか猫っぽいような感じもある。

「ええと……初めまして、武田鼎です」  
「駒黒紗江です。……ふうん」

と、紗江……何だか大人びてるので、敬意を表して、紗江さんは、品定めするように僕をじっと眺めた。そして、今度はさつきと違う明らかな笑みを漏らしながら、

「私の事を話したって事は、候補だつたりはするのかな、お姉ちゃん

「……全くない  
「へえ……」

佐奈さんは、心なしか居心地が悪しつだ。僕自身、佐奈さんの妹である紗江さんから妙な威圧を感じて、何だか冷や汗を搔くような心持がしている。

「ねえ、武田さん」

紗江さんは、僕に向か合つた。

「……うん、何？」

「お姉ちゃんの事、もっと知りたくないですか？」

「紗江。ストップだ」

「これ。暇な時で良いですから、連絡してトモー」

差し出された紙の切れ端には、端正な文字で電話番号「ひしき数字が並んでいた。つい、その勢いに押され、受け取つてしまつ。

佐奈さんが、僕が知つてゐる限りでは初めて叫んだ。

「紗江！」

「……紗江、帰るぞ」

「はーいはーい、お姉ちゃん」

「…………。…………。そうだな、その紙は破つて捨ててくれ

だが、すぐにいつもの冷静な声に戻つて紗江さんの背中を叩いた後、今度は常より低いくぐもつた声で僕に言つた。

「うん。ええと、また明日」

「ああ。また明日」

そう言つと、手を振る事もなく、佐奈さん達は僕に背を向けて歩いて行つてしまつた。一人取り残された僕は、十秒ほど迷つた後、家へと帰り道を歩き出した。

それでも平常を装っていたのはさすがだが、それにしても佐奈さんが冷静を欠いていた事は明らかである。ああやつて叫んだという点でもそうだし、ルーラ・コーラ・ジューースの購入同行を途中で放棄する事に対する謝罪がなかつた事についても、佐奈さんらしくはない。そしてその原因が、紗江さんと、紗江さんの知りたくないか、という問い合わせに答える事は、ほぼ間違いなかつた。

だが……。だからと言つて、すぐに紙切れの番号に電話しよう、とはならない。佐奈さんは最後に、捨てるように言つた。僕は、頷いた。もし僕が電話をしたら、先のルーラ・コーラ・ジューースの件と合わせて一度、佐奈さんを裏切る事になる。

(でも、掛けないと、何にも分かんない)

僕は、久美の事件以後、情報を得る事に対して、大きな重要性を見出していた。久美について、もっとちゃんと知つていれば、あんな回りくどい事をして、また別の、重郎や春花さんとの軋轢を生み出す事はなかつたのだから。

……とは言え、今回はどうだろう。電話した事が佐奈さんに分かれ、いや、分からなくとも、僕の心の中でだけであつても、佐奈さんと僕との間に亀裂が生じてしまう。電話する事、情報を得ようとする事自体が、軋轢を生み出す原因になるのだ。

だが、少なくとも、佐奈さんと紗江さんが、姉妹であんな関係でいる事は、健全ではない。朋絵さんと誼絵さんのように、おしどりになるべきだとは言わないが、あんな……外から見たら憎み合つているようにしか見えない関係は、改善されるべきだ。そして、僕が

改善させようとするのなら、やはり紗江さんから話を聞かなければならぬ。

(……逆に、佐奈さんに電話してみるとか)

そんな考えも一瞬浮かんだが、すぐに消えていった。佐奈さんは隠したがっている。電話したところで、上手くかわされるか、悪い場合には嘘を聞かされる可能性もある。

……こうなつては、致し方ない。佐奈さんへの裏切りになる事は重々承知の上で、僕は、紙切れの番号へダイヤルした。

「……私が勧めたんですけど、紙は破つて捨てて欲しかったなあ」電話番号は、予想通り紗江さんの物だった。僕が一通り挨拶を終えると、紗江さんはどこか潜めた声でそつそつと話してから、すぐに声色を明るく灯して、

「お姉ちゃんの事ですかね？ どれくらい、聞きたいですか？」

と僕に訊ねた。

「んー……詳しきは、良いや。何があったのかだけ、教えて欲しいかな」  
「……三年前のお姉ちゃんと、今のお姉ちゃん。全く別人です」  
「三年前に、何があったの？」  
「はい。色々と」

佐奈さんの、過去について。どうも話は、その辺りに進んでいくそうである。このまま聞き続けようところの想いが半分、やつぱり断つという思いが半分で伯仲し、僕は慣性に従つて話を聞いているだけだった。

「父親が早くに死んでしまって、お母さん一人で私たち姉妹を育てたんですね。お姉ちゃんは、とってもわがままな私の分もお母さんのお手伝いをする、まあ、健気な姉という感じでした。これが、二年前まで」

今の佐奈さんを、そのシチュエーションに当てはめてみる。……

多少違和感はあるが、似合わないという程ではない。むしろ、手伝いを全くしない佐奈さんという方が、僕にはおかしな感じがする。

「お姉ちゃんは、いつでも柔らかく笑っている女の子でしたから、誰かに嫌われるとか、憎まれるとか、逆に恨んだり疎んだりする事はなかつたんです。だから、お姉ちゃんが中学校に入つて、好きな男の子を見つけて、その男の子と想いあつにも、そんなに時間は掛かりませんでした」

「……でも柔らかく笑つて……ああ、確かに、今の佐奈さんからは、想像もつかない。どちらかと言えば、普段豪快に笑い、時々微笑むというイメージだ。

……に、しても。僕は、紗江さんの言葉を信じて良いものか、迷い始めていた。紗江さんの言葉が、どうも機械的というか、台本を読んでいるように流暢に放たれてくるからだ。余程話し慣れているか、周到に用意していなければ、多分こつはいかない。

「その男の子も片親に育てられた人でした。……私達のお母さんと彼のお父さんが結婚してしまったのが、お姉ちゃんの不幸です」

「えつ……」

「お姉ちゃんの昔の想い人は、今、お姉ちゃんの兄なんです。同時に、私のお兄ちゃんでもある」

……。世の中には、そんな事もあるのか。

「それ切り、お姉ちゃんはあんな風に、ちょっと人を食つたような性格になりました。兄への恋心と、私への憎しみも、どこかに秘め込んでいるんです」

「紗江さんへの、憎しみ?」

「小学生の私は、お母さんの再婚を強くねだつたんです。私が、お

姉ちゃんの恋路を塞いだんですよ

かなり、複雑な事情のようだ。当然と言えば当然だが、佐奈さんがそんな昔を持っていたなんて、全く知らなかつた。……でも。

「……佐奈さんは、実妹を憎んだりするような人じやないと想ひます

紗江さんを前にした時の佐奈さんは確かにおかしかつたが、それでも、佐奈さんに限つて人を憎んだりは、しないと思ひ。

「紗江さんだつて、佐奈さんから直接、何か言われた訳じやないんでしょ？」

「それは、そうですね。でも、お姉ちゃんから、私が何に似てるとか、聞いてません?」

……確かに聞いている。

「猫、だつけ

「その通りです。お姉ちゃん、猫嫌いなんですよ

何も言い返せなかつた。確かに、猫を嫌いだと云つ佐奈さんが、同じ舌で紗江さんを猫のようだと評するのなら、それは暗示的に紗江さんを嫌いだと表明してくるのに変わりない。と、僕は思ひ。

「と一つ。これで話、終わりです。思つたよつ、長く話しあかつ

たなあ

「……うん。ありがとう

「聞かなかつた方が良かつたと、思つてますね

否定できない。少なくとも今の所、聞いて得したとは、思つてい

ない。

「まあ、また気軽に電話して下さいね。昴さん、良い人そうだし」

僕を置いたまま勝手にそり言つて、紗江さんから電話を切つた。

紗江さんは決して佐奈さんを嫌つてはいない。ただ、憎まれている、という思いが、ああいう高圧的な態度を取りらせるのだ、と言つのが、一時間後の風呂場での僕の考えだつた。

猫の話を出してきた辺り、紗江さんが嘘を吐いていないのは間違いない。だから問題は、紗江さんの認識に勘違いや取り違えがないか、という点だ。つまり、本当に佐奈さんが彼女を嫌つているのか。電話の中では何とも言えなかつたが、一度冷静に返つて考えれば、それは全く不確実な事である。猫のようでない人をあえて猫を呼ぶのならそうだろうが、実際紗江さんは猫っぽいのだ。ならば、猫のようだと言つるのは、当然の事なのではないか。あるいは、照れ隠しといつ線もある。

どちらにせよ、佐奈さんの思いを知らない限りは、この姉妹関係の改善は難しそうだつた。多分、佐奈さんの過去については、僕がどういひようの事ではない。関わらないのが、恐らく最善策だろう。……。思い返してみると、ここ最近だけで、かなりの面倒事に数々首を突つ込んでいるような気がする。世界が云々という件もそうだし、久美の自殺騒動も、自然科学部も、そして今まさに手を出した駒黒姉妹についてもそうだ。高校生とは、そんな物なのだろうか。

(……皆、可愛いからかな)

久美にしても佐奈さんにとっても、他の科学部のメンバーにしても、

他の女の子よりどこか映えて見える。重郎も、やはり、他の男子に比べればかなり格好良く、万能だ。

「幸せだなあ

今までに、姉妹関係にあくせくしながら過去を苦しむ佐奈さんに悪いと思いつつ、僕はそう呟いた。

昨日聴き損ねたラジオ番組に耳を傾けていると、窓の外から強かにアスファルトを打つ雨の音が聞こえてきた。ちょっとぐらい不審に思えても、大体の事は気のせいだつたりする。爾についでは、この教訓が色濃く出た。

そう言えど、傘はあつたつけ。そう思い立つて玄関へ確かめに行くと、案の定、かなり前に壊した一本を描いて他に在庫はなかつた。明日を考えて買いに行こうかと思ったが、更によく考えると、傘を買いに行く為には、傘がないと濡れてしまう。傘を買いに行く為に濡れるなんて、何とも馬鹿らしい。

(……朋絵さんに借りようかな)

一緒に登校するのだし。朝、傘を一本持ってきて貰えれば良い。もう九時を回っていたが、僕は朋絵さんに傘願いのメールを送った。

『ラジヤです』

十秒も掛からず、朋絵さんから返信が来た。ありがたい、これでとりあえず明日はしげるだろう。僕はありがとう、とメールを打つおいで、携帯の電源を落とした。

何やら、今日は眠たい。色々と考えさせられる事が多く、頭が全体的に疲れている気がする。僕は、ドシッと音を立てベッドに寝転がった。知らない間にラジオは終わっていて、プレイヤは自動で電源を切っている。このまま眠っても、問題ない。

(……変な夢、見たんだつけ)

頭を枕に預けて目を閉じると、ふわっとそんな事が脳裏に思い出された。ひまわりがどうとか、ツンデレがどうとか言つ夢だったが、具体的な内容までは殆ど記憶にならない。

(寝たら、また見れるかな)

ほんやつした頭で、僕は淡くそつ思つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2383x/>

武田君のモッテモテ物語

2011年11月17日19時16分発行